

タイトル	東南アジアの人間像と日本経営史の原像（一）
著者	大場，四千男；OBA, Yoshio
引用	北海学園大学学園論集(148)：23-112
発行日	2011-05-18

東南アジアの人間像と 日本経営史の原像（一）

大 場 四 千 男

目 次

はじめに

1編 チベット仏教と人間像

序

- 1章 中央アジア騎馬民族王朝とチベット帝国の勃興
- 2章 遊牧騎馬民族王朝としてのチベット帝国
- 3章 チベット仏教と勤労倫理
 - (1) リンチェン・ドルマの家系とチベット史
 - (2) チベット仏教と仏教的家族主義勤労観
 - (3) チベットの荘園制度とチベット仏教の倫理
 - (4) ツァロン荘園，タリン荘園と牧畜業

2編 ブータン仏教と人間像

序

- 1章 リンチェン・ドルマとブータンの関係
- 2章 ブータンの原像—1 中世ブータンの村落と「結」^{ゆい}的^{きずな}絆
- 3章 ブータンの原像—2 「幸福大国」への歩み
- 4章 ブータンの原像—3 遊牧騎馬民族の系譜
- 5章 ブータンの原像—4 王室の出自とジクメ家，ドルジェ家
- 6章 ブータンの原像—5 農民とブータン仏教＝ドック派信仰

3編 ブータン探索～サンジャ・アチャヤ著 女澤史恵訳『ブータン・ヒマラヤ山脈の王国』

はじめに—著者紹介とブータンへの軌跡

序文

- 1章 着陸
- 2章 環境と開発

3章 雷龍の国

4章 チョモラーリ山：女神の神聖な山 (以上迄本号)

はじめに

東日本大震災が2011年3月11日にマグニチュード9の大ききで生じ、40メートルを超える大津波で福島原子力発電所を含め三陸沿岸のリヤス式海岸を舌め尽し、根こそぎ海の中に人間、車、建物を中心に引きずり込み、一瞬の間にガレキの山を築いた。今や東日本大震災への復興に取り組み始め、2つの案が対立し始めている。1つは効率中心の集約型都市、大規模区画の農地の開発、株式会社或いは法人組織による漁獲—加工—流通・販売の垂直的漁業組織等を中心にする田中角栄流の東日本改造論を中心にする近代化論である。もう1つは地元の住民、市民、商工業者のコミュニティの復興、地元漁農業者の漁業権、小農家族経営を中心にする伝統的な生業の復興である。こうした復興案の対立の底辺において2つの人間像の類型化が見出される。

東南アジアの人間像がこうした2つの人間像を生み出すのに大きな役割を果たしたのは大乘仏教による人間の育成である。それゆえ、東南アジアは大乘仏教を原像の1つにして発達し、チベット仏教、ブータン仏教そして日本仏教が発達する。これらの国での大乘仏教の発達とはチベットではダライ・ラマの政教一致制と観音信仰を形成する力となり、ブータンでも相同性の展開を遂げる。

しかし、日本仏教は古代律令制の鎮護国家の守護神として天台宗、真言宗を発達させ、法華經の観音信仰と密教を発達させる。平安時代の中頃から鎌倉時代にかけての大乘仏教は顕密体制を形成し、とりわけ観音信仰から浄土仏教の阿弥陀信仰へ発展する。日本は、チベット、ブータンと相違する大乘仏教の密教を独自に体系化し、即身成仏を現世利益主義の中心に据え、「開花された人間」を生み出す。

東南アジアに共通する人間の原像は(1)人的能力と(2)人的資本の2つを類型化する。日本では明治～大正期に(1)の人的能力を重点にする教育を行ない、昭和30年代以降の高度成長期に(2)の人的資本へ移行し、効率中心の経済大国を築く。すなわち、現代の日本では、効率型近代化論を担う人間像が、原子力技術に代表される最小のコストで最大の効果を追求する物の豊かさを求めるタイプとなり、GNP型と呼ぶ人的資本の人間像となる。他方、伝統的精神、コミュニティの価値を生産化しようとする精神的豊かさを求める人間はGNH型と呼ばれて東日本大震災の復興を担うものとして再生を期待されている。

これら2つの人間像は資本主義の両輪として対立と共生を深めながら、今日における東日本大震災の復興を巡る日本の原像として位置づけられる。2つの人間像を東南アジアに拡大してみると、東南アジアの人間像の原型を形成する。すなわち、ブータンはGNH型人間によって生み出される「幸福大国」(GNH)を築き、国際的に精神的豊かさを価値観にする仏教国家と見なされ

る。他方、中国と日本はGNPの物の豊かさを巡ってGNPのNo.2とNo.3の地位を競って、国際的に物の豊かな経済大国と位置づけられ、GNP型人間を中心に対立と共生を深めようとしている。これらの人間像は歴史的に溯って中世の騎馬民族の人間像に求められ、東南アジアの原像を形成する。すなわち、東南アジアの人間像は大乗仏教によって生み出され、遊牧騎馬民族征服王朝としてチベット、唐、日本、そしてブータンを特徴づけるのである。騎馬民族はヨーロッパの騎士の槍に比べて騎手兵の弓矢、太刀、鎧を東洋独自に発達させ、西欧との相違を際立たせる。

以上のべたように東南アジアの原像は第1に遊牧騎馬民族征服王朝の形成と見られ、第2に大乗仏教の発達を共通項にしている点、そして第3に大乗仏教の精神向上によって「開花された人間」を人間像として生み出すという3点に集約されるのである。したがって第1編はチベット仏教、第2編はブータン仏教、そして第4編は日本仏教から人間像と日本経営史の原像を東南アジアの共通項として探り、掘り下げることを課題とする。

日本の原像を探索する方便として『保元物語』、さらに『平家物語』の中に見出される人間、例えば祇王、仏御前或いは薩摩介忠教等を取りあげるが、これらの人々は平家繁栄の無常、空観からの解脱として阿弥陀信仰の智慧に救いを求め、念仏を唱え、その結果清浄されて善人に化身し、極楽往生する「開花された人間」として見なすことができると考える。平安時代から鎌倉時代への移行に果たした大乗仏教の影響は大きく、一方では中世の封建的主従関係とその絆を前世の宿縁と考え、他方では大乗仏教の法華経から浄土仏教への発展によりこの世の空観、無常観から密教の神秘性を純化し、ますます冥想的精神主義の悟りへ導かれ、その結果、念仏信仰と廻向を両輪にする功德＝福德国家（精神的に豊かな国）を育くむ担い手として「開花された人間」を生み出し、日本の原像を築く推進力となるのである。日本の人間像が日本経営史の原像を描くが、アマルティア・センは人間像を2つに類型化し、新しい開発経済学を理論化する。すなわち、センはインドの経済開発から(1)人的能力と(2)人的資本の2類型を描き、人的能力に経済開発力を見出し、その歴史的モデルとして明治維新以降の日本の経済大国を育くむ人的能力を重視する。センは、ロストウの近代化理論、とりわけ経済成長を担う人的資本を批判し、新しい経済成長理論を体系化するのに成功する。

他方、P. W. ドラッカーは日本の人間像の2つの類型を描き、(1)人的能力と(2)人的資本に対するマネジメント論を体系化し、ドラッカー経営学を築き、新しい経営学と経営史を発達させるのに成功する。すなわち、ドラッカーは、網野善彦が職能民の活動を基軸にする日本の歴史像を新しく描くが、その職能民の技能の高さに戦後の高度成長の成功を解く鍵と見なし、人的能力の高さ、その芸術的美しさを日本的経営として位置づける。それゆえ、ドラッカーが日本画のコレクターとして世界的に名声を博しているが、その動機は日本画の芸術的特異性と神秘性を学び、マネジメント論の人的能力（知的経営者）と組織の道徳性を日本人の職能と精神活動から体得しようとするからである。

東日本大震災の復興が東南アジアに共通する人間像のうちセンやドラッカーの重視する人的能

力の「開花された人間」によって推進されるなら、21世紀の日本は「幸福大国」GNHの新しいリーダーとして世界を牽引することになるであろう。この人的能力はルソーの『エミール』で描かれる教育人の理想能力であり、健全な民主主義国家への発達となる。さらに人的能力はルソーの第3の能力、つまり人間の自己発展能力の発揮となり、ドラッカーの知的経営能力の開発力と見なされる。東南アジアの人間像のうち、人的能力を開花した人間は日本経営史の原像である職能型人間として関連的技能を高度に発展させ、トヨタ生産方式を担い、未来社会を築こうとするのである。

1 編 チベット仏教と人間像

序

ここではチベットを取り上げる理由として東南アジアの比較経営史の立場から次の三点を明らかにしたいと考えるからである。

第1に日本の原像との関係からチベットを見た場合、日本人の思考と勤労革命は東南アジアに共通する「思いやりの心」、つまり、日本的労働観の「結」労働をチベットの仏教的家族主義勤労観に求めることができる点である。このため、ここではこの説を裏付けるものとしてリンチェン・ドルマ・タリンの『チベットの娘』を取り上げる。

第2は東南アジアの基底となる騎馬民族の征服王朝にチベット帝国を加えようとする点である。というのも森安孝夫は『興亡の世界史』5巻「シルクロードと唐帝国」でユーラシア大陸での征服王朝と騎馬民族との結びつきから中央ユーラシア国家の歴史像を提案するが、その対象となった中央ユーラシア王朝は突厥第一帝国と第二帝国を支えるソグド人を巡る騎馬民族国家であり、唐とウイグル帝国との両国によって築かれる歴史の構造となっている。これにチベット帝国を騎馬民族国家として追け加えることで森安孝夫説を補強することができることとなり、さらに中央ユーラシアの歴史をダイナミックに描くことが可能となるからである。

第3に日本の原像を構成する人間像は職能型人間であり、人的能力の「開花された人間」として位置づけ、人的資本と対照とする点である。背景には大乘仏教が法華教の観音信仰、さらに浄土仏教の阿弥陀信仰の影響を受け、職能活動を禁欲的勤労観と見なす日本人の思考の影響があると考えるからである。

1 章 中央アジア騎馬民族王朝とチベット帝国の勃興

森安孝夫は『シルクロードと唐帝国』の中で唐王朝を騎馬民族国家として位置づける点を新し

い東南アジア史の方法論として提起しようとする。したがって、ここでは森安孝夫の唐王朝の特異性を取りあげ、その全体像を明らかにする。

森安孝夫は最初にユーラシア大陸に占める中央ユーラシア＝中央アジア国家の境界線を次の図-1のように描くのである。

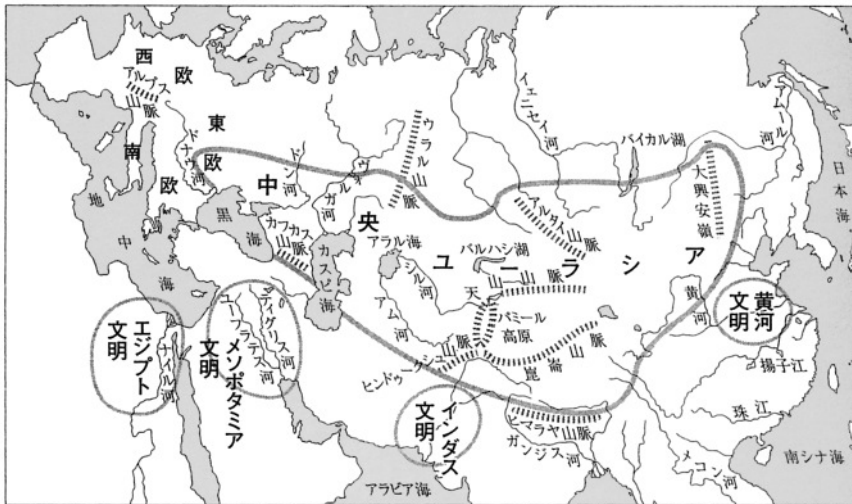
この図に示されているように、中央ユーラシアは東端の大興安嶺、西端のドナウ河－黒海、北端のアルタイ山脈・ウラル山脈と南端の崑崙山脈、ヒマラヤ山脈、カスピ海を境界にする中央アジア地帯とから成っている。しかも、この中央ユーラシアは中央アジアを枢軸にして形成され、シルクロードのネットワーク網に支えられているのである。

この中央ユーラシアを征服する最初の王朝が唐であることから、唐の征服王朝としての特異性は遊牧騎馬民族李氏の鮮卑系を出身系図とする。すなわち、唐の始祖が李虎であり、孫の李淵は高祖として唐帝国を築く。唐王朝の高祖李淵（612-626）の系図は図-2のように9代徳宗（李适）まで続く。

この図-2には唐王朝の李氏一族の家系図の出自を示している。すなわち、李氏一族は「大興安嶺の武川鎮に由来する鮮卑系集団」（140頁）の一つであり、隋王朝の始祖楊忠と同じ鮮卑系である。このことから、森安孝夫は隋・唐を漢民族王朝でなく、鮮卑系遊牧騎馬民族（拓跋氏）の「拓跋国家」、或いは「閼隴集団」の王朝であると位置づけ、東南アジア史の新しい解釈を行うのである。すなわち、「閼隴集団」王朝は北魏の国防を担う六鎮、つまり、武川鎮の鮮卑族を家系図の始めとするのである。

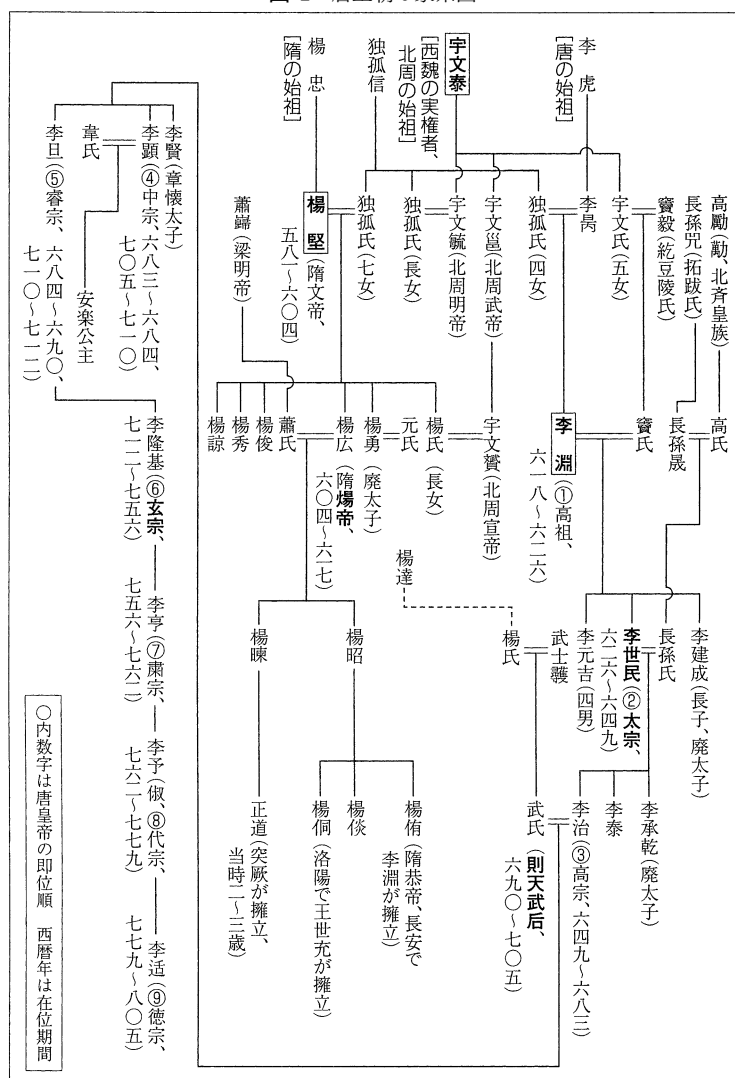
次に唐朝の確立に貢献する2代李世民（太宗）は中央アジアの西方経営を行うために中央ユーラシア東部地域に勢力を誇っている匈奴（費也頭）と突厥を630年に破り、西方経営に乗り出し、

図-1 中央ユーラシアの境界線



（森安孝夫「シルクロードと唐帝国」51頁より引用）

図-2 唐王朝の家系図



関隴集團と拓跋国家（北周・隋・唐）王族の系図

(森安孝夫, 前掲書, 140頁より引用)

唐の支配権を中央アジアに確立して中央アジア国家を樹立しようとする。その際、李世民は西方経営策として(1)従来の異民族を統治する冊立策を継続し、これに新しい統治策として(2)羈縻策を導入するか、或いは、(3)直轄制(内地化)を採用するか、その選択を迫られるのである。(1)の冊立策は異民族の族長及び国家の君主が服従する代りに官爵制を与え独立を認め、朝貢を課す主従関係の冊封を進める例として突厥の阿史那思摩を取り立てるのである。(2)の羈縻府州制は冊立制度より統治の厳しい直接統治であり、占領・帰属地域を府一州に分け、その統治のトップ機関として燕然都護府を組織して唐人を都護につけて府(都督)一州(刺史)、の異民族の族長と国の君

主を支配する。このため、李世民はこれら中央ユーラシアに郵駟網の参天可汗道を交通路として開くのであるが、次頁の図-3の○印が郵駟箇所である。

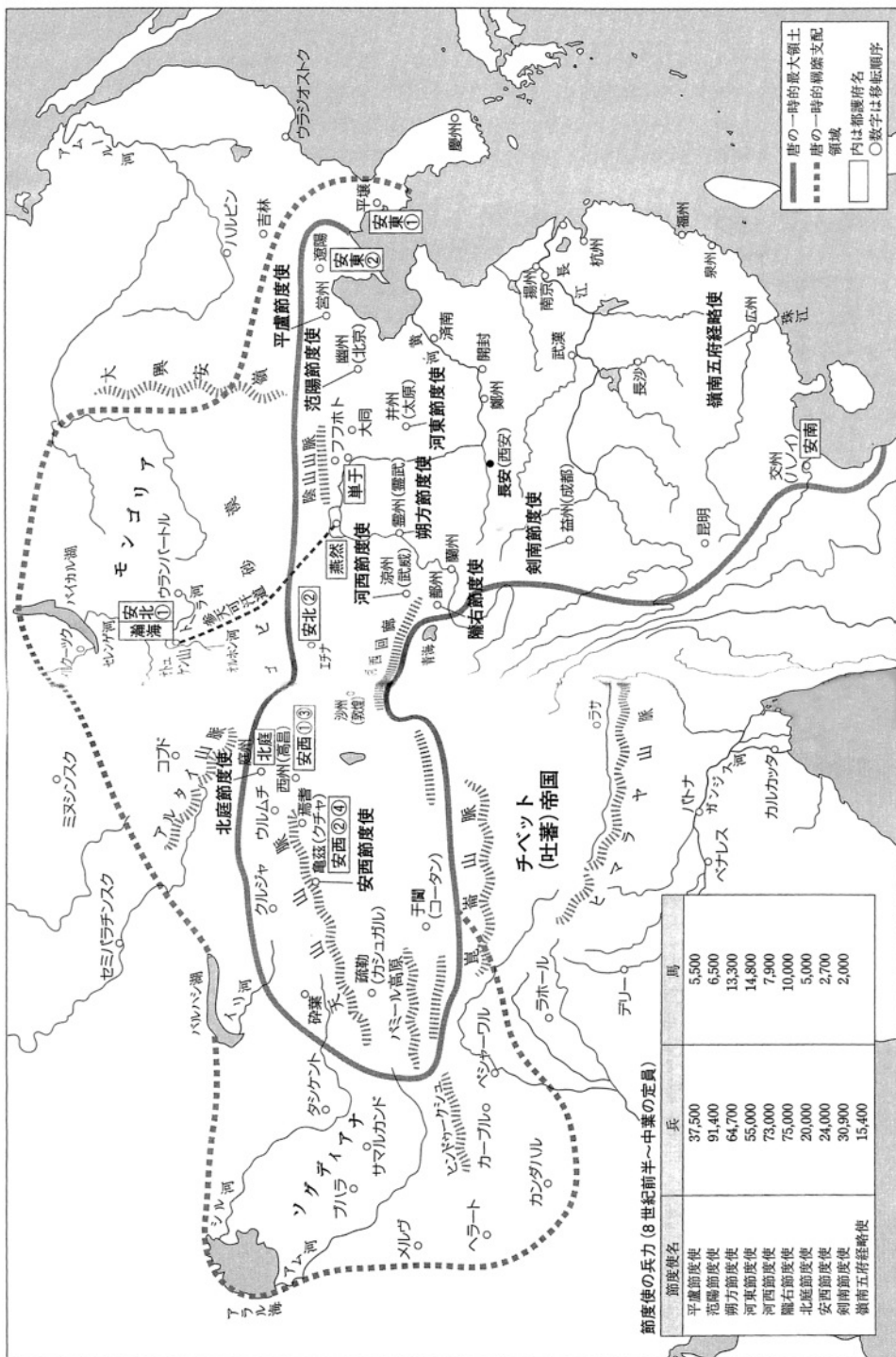
この図-3から窺えるように、唐は李世民の西方経営でそのピーク時に破線の囲いに示されるように世界帝国の版図を築くのである。こうした世界帝国の統治は唐の李世民に二つの資格を与える原因となる。一つは中茸の皇帝（天子）という地位であり、他方、二つ目は西方経営の天可汗という異民族の支配者の立場である。天可汗の称号は630年に唐軍が東突厥を破り、漠北モンゴリアの九姓鉄勒（廻紇・拔也古・同羅・僕骨、突厥（頡利・突利）を服属させたことから、これらの族長、君主から奉ったものである。これら草原の遊牧民族以外に服属する14人は太宗（李世民）の陵墓（九嶼山）の北面にその石像として並べられている。その14人とは次の族長・君主である。

- 1 頡利可汗（突厥，阿史那咄苾）
- 2 突利可汗（突厥，阿史那什針苾）
- 3 阿史那思摩（突厥）
- 4 阿史那社爾（突厥）
- 5 金真徳（新羅女王）
- 6 林邑王（ベトナム）
- 7 笈頭黎（インド王）
- 8 阿那順
- 9 薛延陀（夷男，真珠田比伽可汗）
- 10 烏地也拔勒豆可汗（吐谷渾）
- 11 贊府（吐蕃）
- 12 麴智勇（高昌王）
- 13 龍突騎支（焉耆王）
- 14 訶黎布朱畢（龜茲王）
- 伏闐信（于闐王）

服従する14人は図-3での大興安嶺、モンゴリアの遊牧騎馬民族（中心は東突厥）と新疆ウイグル地方、ソグディアナ、チベット（吐蕃）の遊牧騎馬民族（中心は西突厥）とに半分ずつ分れる。特に西突厥の中心は遊牧トルコ族系（高車・突厥・鉄勒・西突厥）であり、東突厥のモンゴリア系・鮮卑系と相違する。が、これら遊牧騎馬民族は「控弦」の騎射兵を中心にする部隊編成であり、現代でいう機甲戦闘師団を編成するが、この騎射兵軍団の破壊力と機動性について『旧唐書』西突厥伝で以下のように伝えている。

「統葉護可汗は勇にして謀有り、攻戦を善くす。ついに北は鉄勒を并せ、西は波斯を拒ぎ、南は罽賓に接し、悉く之に帰せしむ。控弦（騎射兵）は数十万にして、西域を覇有し、旧の烏孫の地に拠る。又、庭（宮廷）を石国

図-3 李世民の郵駝(○印)と西方経営の範囲



唐の最大勢力圏と都護府・節度使の分布図 7世紀の太宗・高宗時代が唐帝国の絶頂期で、8世紀には勢力圏も領土も縮小に向う (森安孝夫, 前掲書, 174-175頁より引用)

の北（実際は東北）の千泉に移す。其の西域諸国の王には悉くイルテベル頡利鞬（間接支配下の国家ないし民族の首長に与えられる称号）を授け、並びに吐屯一人を遣わし、之を監統し、其の征賦（徴税）を督せしむ。西戎の盛んなること、未だこれ有らざる也。」

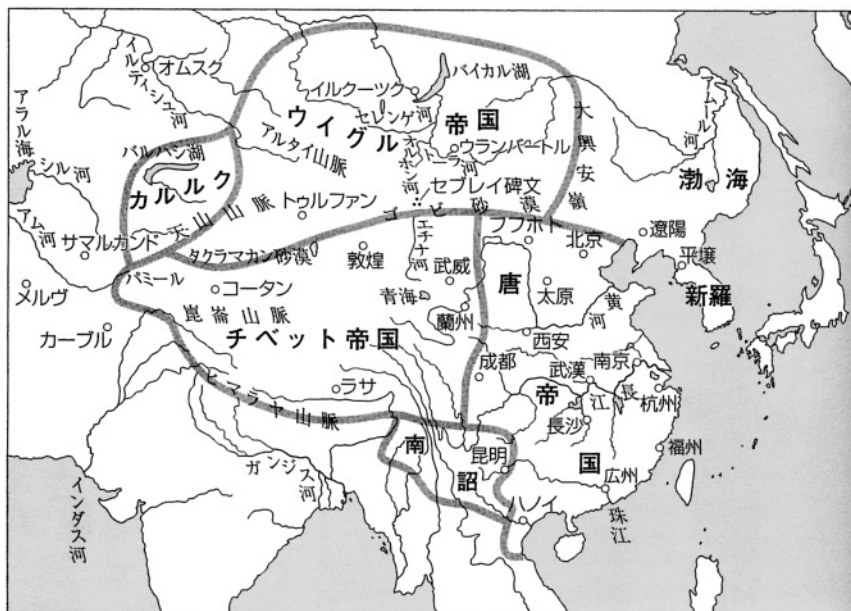
この『旧唐書』に記されるトキヤフグ統葉護可汗は617年兄の射置可汗に代わって西突厥の中心勢力となつて「西域を覇有」するのである。その騎射兵は「数十万」で唐の西方経営を脅やかすのである。後に、モンゴルのフビライ汗が元朝帝国を築き、西のオーストリアのウイーン迄版図を拡大したのもこの騎射兵の機動性に由るのである。後に述べるウイグル帝国、チベット（吐蕃）帝国が勢力を拡大したのも遊牧民族の騎射兵による征服によってである。

唐の西方経営を巡って中央ユーラシアが唐・チベット・ウイグルの間で三等分され、所謂三国会盟を821～822年に組織するのであるが、この三帝国間の国境は次の図-4に示される。

この図-4に示されるように、唐の西方経営がウイグル帝国とチベット帝国の版図拡大によって大幅に縮小され、中国本土にまでその侵入を受け、中央アジア国家像を消滅させているのである。ウイグル帝国とチベット帝国の版図が拡大したのは騎射兵の機甲部隊に由るのである。

森安孝夫は唐・ウイグル・チベットの三国会盟を実証する資料として敦煌文書版片ペリオ3829番「盟誓得使三国和好」を掲げ、さらに中国研究者（李正宇）の敦煌文書断片（Dx.1462）とて裏付けするのに成功する。この三国会盟の版図は前述した図-4のように中央ユーラシア大陸を三等分する。しかし、森安孝夫が「中央アジアにおけるチベット」を実証分析し、チベットを世界史の中に位置づけたことは、チベット研究への新しい方法論を提起したという意味で画期的な成果

図-4 唐・ウイグル・チベットの帝国版図



（森安孝夫，前掲書，353頁より引用）

である。

他方、森安孝夫はチベット帝国を遊牧騎馬民族として位置づけることなく、「ソグド人の行方」を中央アジア国家の盛衰を握る民族として握え、そのソグド人のシルクロードにおける商人兼武人の役割を明らかにする。したがってチベットを遊牧騎馬民族国家として位置づけることが次の課題となる。

2章 遊牧騎馬民族王朝としてのチベット帝国

森安孝夫の『シルクロードと唐帝国』で中央アジア国家の一角を占めるほどに成長するチベット帝国の勃興を見てきたが、ここではこうしたチベット帝国の形成を遊牧騎馬民族に求め、騎射兵のチベット民族を究明することを課題とする。このチベット民族を遊牧騎馬民族として実証する手懸りをリンチェン・ドルマ・タリンの『チベットの娘』(三浦順子訳 中央公論新社 2003年2月15日)に探り、比較経営史の立場からチベットの騎馬民族像を浮き彫りにする。

この問題の解明への切り口としてチベット民族像の通説から入るのが一番周知の事実として理解されるものと考え。すなわち、『地球の歩き方・チベット』(株式会社ダイヤモンド・ビッグ社、2001年12月)は冒頭にチベットの祭として青海省玉樹で行われる玉樹賽馬会について次のように騎馬民族像を描いている。

「チベットでは1年を通じてさまざまな祭が催される。チベットの祭は、チベット暦によって開催時期が違うが、7月、8月の夏の間がもっとも祭の多い時期だ。なかでも遊牧民が短い夏を謳歌するように、おのおのの乗馬テクニックを競い合い、娘たちが煌びやかな衣装に身を包んで踊りを披露してくれる賽馬会(ホースレース)は華やかだ。この時ばかりはふだん何もない草原に、一大テント村が出現する。夏の間、それこそ各地の草原で開催される賽馬会だが、玉樹の賽馬会はとにかく規模が大きい。さらにカム地方の影響を強く受ける地元の人々は、チベットの中でもっとも派手で贅を尽した衣装を身にまとう人々でもある。」(『地球の歩き方・チベット』6～7頁より引用)

この資料に描かれている青海省玉樹チベット族自治州はタラン山脈南端を占め、4～5000mの高地草原で、チベット族で人口の97パーセントを占める遊牧騎馬民族の中枢を形成する。賽馬会は(1)馬上の鉄砲打ち、(2)馬上の射手(弓矢)打ちを地方チーム毎に競うものである。

この大祈願会は1938年にはチベット暦1月22日から27日まで行われ、(1)大祈願会、(2)賽馬会(ホース・レース)、(3)武者行列、そして(4)最終日の流鏑馬式弓術大会等を中心に構成され、チベット政府官吏＝貴族層の騎手戦を特徴としている。つまり、大祈願会は中世チベットの遊牧騎馬民族像を再現し、チベット帝国の軍隊編成と軍事力を誇示するものであり、ここにチベット民族の遊牧騎馬民族説を裏付けるものとして儀式化されているのである。すなわち、大祈願会はチベット帝国の政教一致制のダライ・ラマ体制を浮き彫りにする側面をも担っているが、その軍事力を担

う貴族＝政府官吏の騎手兵をチベット帝国の主体勢力として次のように3点にわたって位置づけている。

第1は大祈願会がチベット仏教のストラ（顕教）とタントラ（密教）の儀式としてジョカン（大昭寺）寺院で営まれる宗教的儀式である。この祭りは仏陀が夢の中で誘惑する魔女を下したことを祝する儀式で、チベット中の僧侶を動員して行われる宗教界におけるグライ・ラマの宗教支配力を誇るものである。

第2は賽馬会、武者行列がチベット政府官吏＝貴族の遊牧騎馬民族としての軍事演習であり、チベット民族の遊牧騎馬民族としての性格を象徴している点である。チベット帝国の中枢であるポタラ宮の政府官吏＝貴族を総動するこの賽馬会、武者行列はチベット政治体制とその身分序列を表すのであり、ここにグライ・ラマの行政支配を見出すのである。すなわち、最初の賽馬会（ホースレース）はポタラ宮及び政府（地方を含む）官吏が全て動員される「階級にみあった数の馬」を5キロ（騎手付）、8キロ（馬だけ）の距離を競争させる競技大会である。次の武者行列は1938年チベット暦1月22日に行われ、2組に分れて騎馬戦を挑み、騎手兵の戦いを再現し、チベット帝国の遊牧騎馬民族像を窺わせるのである。つまり、リンチェン・ドルマは『チベットの娘』の中で1938年の大祈願会（新年の3日）の行われるチベット暦1月21日と1月22日の武者行列を次のように記し、中世の遊牧騎馬民族像を明らかにする。

「チベット暦の一月二十一日、例年の競技大会のリハーサルが行なわれます。人の徒競走もあれば、騎手をのせた馬の、また馬だけの競走もあります。官吏は、それぞれの階級にみあった数の馬をこの競技に参加させることになっています。参加する馬の首には、最終レースが終了後で検分できるよう、焼印が押されています。リハーサルの四日後に、本番の競技大会が実施されます。人だけの徒競走なら約三キロ、騎手を乗せた馬は約五キロ、馬だけの競走の場合は八キロの距離を競います。スタートの合図に銃が発射されると、三つのグループがそれぞれ異なる出発点から異なるゴールめざして走りだします。ゴールには監視人が待ち構えていて、勝者や勝ち馬を判定します。滑稽なのは老人から小さな子供までがいりまじって参加する徒競走です。徒競走の参加者の胸か背中には、参加者をレースに送り込んだ貴族の名が記されています。政府の馬が競技大会で一等をとれないと、厩舎の責任者には罰金が科せられます。グライ・ラマ法王も閣僚たちもチョカン大聖殿の一室からこの競技大会を見物されます。チベット人の博打好きときたらそれこそ有名ですが、この競技大会は政府主催ですから、賭けるのはご法度です。一度ギャツォという名のツァロンの持ち馬がこの大会で優勝したことがあります。後にツァロンは、この馬を十カ国語を流暢にあやつる高名な仏教学者で親友でもあるミスタ・ラデン・ラに贈りました。後に名馬ギャツォは、ダージリンで総督賞を幾度となく獲得しました。

チベット暦の一月二十二日には武者行列があります。青年貴族たちは毎年交替で騎馬行列の指揮官を務めなくてはなりません。これはかなりの出費をとまなうものの、避けられない義務なのです（ジグメは、個人の荘園を所有していないという理由で、どうかこれをのがれました）。武者行列を率いるのは二人の有力な貴族で、行列は右列と左列のふたつのグループにまとまっています。指揮官をつとめる貴族と大臣は甲冑を身につけた騎馬兵を二十四騎、將軍は十三騎、貴族の子弟は七騎、この行列に提供しなければなりません。この武者行列には千騎以上が参加し、それぞれがべつべつに技量を競い合います。

下級官吏は、三年か四年に一度、この競技会に参加することになっています。これはまた、官吏の勅任の日でもあります。官吏たちは数ヵ月前から練習に励んで競技会にそなえます。なにせなかなか難しい競技ですから。乗り手は、手綱に手を触れることなく、高い土手沿いの真つすぐな道に（こういう場所なら馬が勝手な方向にそれるおそれはありません）馬を疾駆させ、十メートル先に固定された三つの標的を撃ちぬぎます。騎手はまず口

装銃で最初の目標を撃ち、その銃を肩の後に放り投げ、次にそれぞれの入れ物から弓矢を取り出し、二番目の標的をねらい、弓矢をもとにもどし、槍で三番目の標的をねらうのです。

競技に参加する青年官吏の馬には上等な鞍がつけられ、たてがみと尻尾は、色のついた絹のひもが編みこまれ、きれいに飾りたてられています。さて、一九三八年には、夫のジグメの番がまわってきて、この競技会に出場することになりました。ジグメは練習にはせっせと励みましたが、馬を飾りたててはまったく興味がありません。こちらは私の役目となりました。とかく競技会となると、むきになるのは妻や親戚縁者のようです。

競技会の締め括りに、指揮官二人も同様のわざくらべを演じてみせることになっていますが、こちらの方はやらないですませることも可能です。競技会の日、俗官たちは、朝の九時から夕方五時まで専用のテントの下で見学します。昼食も出ますし、特製のチャンやバター茶も飲み放題です。ラサ市民もまた、この見せ物を楽しみます。季節は初春、だれもがこの競技会を見物しつつ田園の空気を満喫するのです。」

(「リンチェン・ドルマ『チベットの娘』185-186頁より引用)

武者行列の騎馬軍団はポタラ宮の官吏＝中央貴族を総動員して編成される。すなわち、大貴族層は騎馬24騎、將軍は13騎、下級貴族は7騎とそれぞれ供出する。こうした貴族の大・中・小は騎馬部隊の大きさに応じて荘園を下付され、領主としての地位を確立している。チベットでは1950年代中国の占領と農地改革まで中世の荘園と騎馬貴族(領主)とを中心に編成されるダライ・ラマの政教一致体制を特徴としている。この武者行列の次に騎手戦と競馬戦とが行われる。すなわち、その騎馬・騎手戦は(1)馬上から口装銃で標的を射ち、(2)次に馬上から弓矢で標的を狙い打ちし、そして(3)最後に馬上から槍で標的を差し突く等の3競技を争うのである。したがって、政府官吏＝貴族(地方を含めて)は荘園でこれら馬を放牧し、訓練を日常的に行ってこの祭りに備えなければならなかった。

第3に大祈願祭の最終日1月27日に余興として流鏑馬式弓術大会(騎手戦)を行うのである。この弓術大会には2種類の弓矢戦が行われ、(1)笛矢での25m射手及び(2)大弓での遠距離射手とである。リンチェン・ドルマは1938年1月27日に行われた流鏑馬式弓術大会について次のように記している。

「大祈願会は、一月二十七日に終了します。政府は最終日に大臣と俗官のための、まる一日パーティーを開きます。余興に弓術大会もあり、的を射た者にはカタが与えられることになっています。

チベットには、馬を走らせながら的を射る流鏑馬式(やぶさきめ)の弓術のほかに、二種類の弓術があります。晩春から夏にかけて、官吏たちは役所がひけると老いも若きも公園に赴き、「笛矢」を射て楽しめます。この矢は、先端近くに穴の開いた小さな箱がついており、射た時に笛のような音を響かせます。この笛矢の響きは、ラサの夏の風物詩の一つになっています。タリン邸はラサの郊外にあったため、よくこの笛矢のうなりを耳にしたものです。笛矢の標的は直径二十五センチほどの砂袋で、ピンで厚い布にとめられています。二十五メートルほどはなれたところから矢を射て、標的にあたるとこの砂袋が下におちるのです。

もうひとつの弓術は、誰が一番遠くまで矢を飛ばせるかを競うもので、正月と大祈願会の間に行なわれます。矢は、古ければ古いほど軽くなるという特質をもつ竹をよく乾燥させて用い、弓術大会の場合には、射手の名を矢に記します。弓術大会の勝者は、いならば大臣たちの前に出て、政府より馬一頭を賞品として受け取ります。賞品の馬には、錦の鞍かけがつけられ、首にはカタがまいてあります。大祈願会中におこなわれる弓術大会になら、少額の賭けもゆるぎされているため、大臣たちは、そこそこの興奮を楽しみます。この日は、大臣たちも官吏の従者の帽子であるモンゴル帽子をかぶることになっています。これは階級にへだてなく、全員がリラックスし

て一緒に大祈願会を締めくくるためです。夜もふけたころ、それぞれの邸宅に帰っていく大臣たちの後を追って、新居に花嫁を連れ帰るときさながら、政府の楽団が踊り、歌います。大臣たちの首にカタがまかれています。」
（リンチェン・ドルマ、前掲書、186-187頁より引用）

以上見てきたように、この大祈願祭がチベット帝国を遊牧騎馬民族国家として中世の生息を現代に伝える儀式であることが窺えるのである。しかし、チベット帝国を支えたのは遊牧騎馬民族としての側面ともう一つのチベット仏教とに由るのである。それゆえ、このチベット仏教は唐の中央ユーラシア征服王朝を支える大乘仏教の一宗派であり、と同時に古代律令国家の日本の仏教と同根である。したがって、チベット仏教と日本仏教は唐の宗教思想を取り入れ、ここに東南アジアの共通の宗教思想を現出するのである。これら唐、チベット、日本に共通する大乘仏教は観音信仰の結＝絆を荘園の地主＝小作人の家族主義関係に求め、宗教的勤労観を育くむ。次にこの仏教的家族主義勤労観を取りあげる。

3章 チベット仏教と勤労倫理

チベット帝国が遊牧騎馬民族とチベット仏教を両輪にして発展することはここでの主要課題であり、東南アジア史における新しい方法論を提起することを意味する。こうした課題への切り口と手懸りは、これまでと同様にリンチェン・ドルマの『チベットの娘』に求めることとする。このため、ここでは(1)リンチェン・ドルマのチベット史に占める役割と活動を明らかにし、(2)リンチェン・ドルマを支えているチベット仏教観を探り、そして(3)最後に荘園（＝地主手作）における地主＝小作人の仏教的家族主義勤労観をチベット仏教の宗教倫理として取りあげる。これらの作業の積み重ねはチベット仏教と日本仏教に共通する家族主義勤労観を抉り出そうとする試論の一つとなる。

(1) リンチェン・ドルマの家系とチベット史

リンチェン・ドルマは父ツァロン・ワンチュク・ギェルポ（ポタラ宮の官吏＝貴族）と母ヤンチェン・ドルマとの間で1910年に生まれ、次の図-5のような家系図を展開するが、この家系図そのものがチベットの現代史（1910-2000）の縮図となる。

この図-5に依れば、リンチェン・ドルマはツァロン家の出自であり、チベット貴族の中でも最高位に登りつめ、ダライ・ラマ法王の二重統治、つまり、チベット仏教法王の家系と婚姻関係（デキー・ドルマの夫ツェリン・トウンドゥブ（ダライ・ラマ八世のブンカン家）、孫クンサンクンサンの夫クンチョク・ギェンツェ（ダライ・ラマのラル家）とジグメ・ワンチュクの妻ツェリン・ドルマ（ダライ・ラマのランドン家）を有するチベット貴族の名門出身である。さらに、父ツァロン・ワンチュクはダライ・ラマ13世政府の官吏＝貴族として行政内閣の中枢を占め、将軍から1903年に

内閣俗官長老大臣に就任し、1912年に暗殺されるまで外交を担当し、イギリスのチベット侵入、さらに清のチベット侵攻を防ぎ、チベットの独立に全力を注ぐが、この間チベットの権力闘争に巻き込まれ、終に1912年ポタラ宮殿の大臣執務室から引きずり落されて殺害されるのであった。中国の清朝は1910年にラサを占領し、中国領の一部としてチベットの領土編入を主張し、1950年の完全占領までチベットに介入し続け、このためリンチェン・ドルマの生涯に暗い影を刻むのである。チベット現代史の縮図はツァロン家とリンチェン・ドルマの生涯に暗く投影され、中国に翻弄される歴史となる。リンチェン・ドルマは中国に翻弄される中で無常観をチベット仏教の悟りとして目覚め、「思いやり」をチベット仏教の宗教倫理として学ぶのである。

こうしたポタラ宮のダライ・ラマの政教一致体制は法王の統治を僧官と俗官の二元統治を生み出し、ダライ・ラマ1世から14世へのチベット帝国の支配構造を形成するが、とりわけ1903年以降その枢軸貴族としてツァロン家とリンチェン・ドルマの支えるところとなる。父ツァロン・ワンチュクが亡くなってからツァロン家の主人になったのは婿養子となるダサン・ダンドゥル（1885-1959年）である。父と同じ日に暗殺された末弟サムドゥブ・ツェリンはダライ・ラマ13世内閣の渉外官を務めていたが、親中国派の疑いをかけられて暗殺され、妻リンジン・チュードゥンを後に残すのである。この未亡人となったリンジン・チュードゥンに婿養子になったのがチェンセル・ナムカン（後のダサン・ダンドゥル）であり、ツァロン家の家長に就くのである。ダサン・ダンドゥル（以下ツァロンと略す）はダライ・ラマ13世の内閣の中枢である軍総司令官としてチベットの富国強兵を進め、対中国戦に備えることを国策として担う中心人物に成長する。このため、ツァロンは陸軍の近代化と増強に全力を注ぎ、その国家予算を増額するため増税政策を立案し、実施するのである。増税の中心は大僧院と貴族の荘園に対する徴税の強化であった。このため、パンチェン・ラマの中国への亡命を生み、チベット帝国の分裂を決定的にする危機を生んだが、リンチェン・ドルマは増税と富国強兵の矛盾と分裂について次のように記すのである。

「軍総司令官としてとった政策ゆえに、ツァロンは多くの敵をつくりました。けれども、その人柄は多くの人に愛され、尊敬されていました。陸軍の維持費用がかさんだため、法王と内閣は、税金の徴収制度を改訂し、これまではさしたる納税義務のなかった大僧院や貴族からも税を徴収することに決め、新たに納税事務所を設立しました。

この新たな納税政策に従うと、広大な荘園を有しているパンチェン・ラマのタシルンポ僧院は多額の税金をおさめることになります。これが、パンチェン・ラマの行政府の怒りをまねきました。パンチェン・ラマ六世（数え方によっては九世）自身は、温和で礼儀正しい人物で、およそ諍いなどおこされない方でしたが、何世紀にもわたってチベットを支配しようと企ててきた中国人たちは、パンチェン・ラマとその取り巻きに、あることないことふきこんで、ダライ・ラマの宮廷に対立させようとしきりに煽っていたのです。一九一〇年にダライ・ラマ法王がインドに亡命した後、パンチェン・ラマ六世の官吏たちは中国ときわめて親密な関係を保っていました。パンチェン・ラマ自身は、協力を拒まれたのですが。この新税を中国に協力したことへの罰にちがいないと思ひ込んだ官吏たちは、チベット政府からさらに迫害をこうむることを恐れ、一九二三年、癸亥年のチベット暦十一月十五日、御年四十歳だったパンチェン・ラマともども中国に逃亡したのでした。

パンチェン・ラマの逃亡は、チベット全土に動揺と不安を引き起こしました。パンチェン・ラマ派の不満に乗り

て、中国人が再びチベットを侵略するのではないかと誰もが懸念しました。パンチェン・ラマとダライ・ラマの両ラマが、常に友好関係を保っていたことを考えあわせると、これは実に悲しむべき事態でした。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、96-97頁より引用)

チベットでは地方族長や貴族が荘園或いは地主手作地、牧草・山林を政府に供出し、官位に就くことで官吏＝貴族の爵位と官位を授けられ、給料源として荘園を貸し与えられ、或いは下付されることで中央集権国家を築いてきたのである。それゆえ、大僧院、寺院及び有力貴族は僧官と俗官に就き、最大の荘園を保有する地主層を形成し、同時に納税者階層となった。このため、パンチェン・ラマのタシルンポ僧院は経営上危機に落ち込み、近代化改革者としてのツァロンの失脚を図る勢力の中心となるのである。ツァロンは財政改革と軍隊の増強を同時に進め、富国強兵に務め、とりわけ、イギリス軍人から近代的な軍事教練を受け、チベット軍の近代化に成果をあげていたが、軍総司令官を罷免され、ダライ・ラマ13世の弟のドゥムパ・ザサーに替わるのであった。以後、ツァロンは交易商人としてチベット経済に貢献し、その収益で鉄橋と道路建設を進め、チベットの富国論を実践する実業家として人生の後半を歩むのである。

以上見たようにリンチェン・ドルマとその実家ツァロン家は1903年から1950年までチベット帝国のダライ・ラマ13世及び14世とを支える名門貴族として政治活動を行い、富国強兵、チベットの独立に全力を注ぎ、また、犠牲の血を流すのである。

(2) チベット仏教と仏教的家族主義勤労観

チベット仏教の中枢を占める貴族の名門に生まれるリンチェン・ドルマはダライ・ラマ13世、14世のランドン家、ラル家と婚姻関係で結ばれ、他方、ラサ西方シガツェ(日喀則)地区サキャ(薩迦)県に広大な荘園を有するツァロン家の娘として生まれる。シガツェはラサから西方280kmに位置し、標高3900mにあり、「土地が豊かな荘園」(「地球の歩き方・チベット」102頁)と云われチベット農業の先進地帯で畑作兼酪農の中心地である。さらに、このシガツェはチベット仏教の発祥地の一つであるパンチェン・ラマとサキャ・ラマの住んでいるところであり、ツァロン家の荘園のあるところでもある。

母ヤンチェン・ドルマはサキャ・ラマから魔女の守護神(リキーラ)を憑けることを進められ、その結果10歳の時に母を亡くす宗教体験をする。彼女はこの事件でチベット仏教のボン教主義を深く胸に刻む経験となるが、魔女守護神のチベット仏教における密教的側面を次のように描いている。

「ツァロン荘園へのみちすがら、母シガツェに立ち寄って、パンチェン・ラマに拝謁しました。パンチェン・ラマは、あたかも大臣とでも会見しているかのように、敬意を払って母に接してくれたそうです。母は、さらに娘のノルブ・ユドゥンのデレク・ラブテン邸に滞在しました。ツァロン荘園への訪問を終えた母は、サキャにむかいました。ここではサキャ・ラマが親切に母を迎えてくれました。サキャ・ラマは、母に「魔女」をひとりひ

きとってみてはどうかと提案しました。サキヤの魔女ならこれからの長旅にふさわしい守り神になるだろうというのです。そこで母はリキーラをひきうけることにし、魔女の小さな仮面をもらい、ツァンパと葉草を焼いて、リキーラに食事を捧げる方法を教わりました。サキヤ・ラマは、ドゥモを支配するだけの宗教的な力が母にそなわっていると思われたのです。サキヤには、魔女の集まる特別な寺があります。魔女はまた、カンドーマ（空行母）とも呼ばれます。もっともこれは丁寧な呼び方ですが。魔女は怒りを抱いて死んでいった女の魂で、死後サキヤに送られます。というのも、サキヤ・ラマだけが彼女たちを支配でき、サキヤ・ラマの導きのもと、魔女たちは徐々に己れを浄化し、覚りへの道を歩むことができるからなのです。ナンカルツェ出身の私の友人も死後サキヤに送られました。魔女はすべて、実家から送られて装身具をつけた自分の像をもっています。彼女らはサキヤ・ラマの厳しい統制下にありますが、ときには服従しないものもいて、ラサや別の場所にさまよいます。すると、サキヤ・ラマはその魔女を呼び返すよう請われるのでした。サキヤ・ラマの統制下にはない魔女は、少々人の肝をひやすような存在です。

母は、リキーラの面を銀製の小さなお守り箱に入れて、ツァロン邸に持ち帰ってきました。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、55頁より引用）

チベット仏教が地方神（仏）である悪魔を調伏し、人間の守護神に変え、密教とシャーマニズム、或いは精霊主義（アニミズム）との融合一体化（神仏習合、或いは本地垂迹論）を図ることを特徴とする一面を有することがこの文脈から窺えるのである。さらに、リンチェン・ドルマは42歳の母の突然死とその葬式を通してチベット仏教のカルマの業と輪廻観を垣間見ることによってチベット仏教の本質に迫るのである。すなわち、リキーラの魔女が母に憑き、その血と人肉を食われ、突然死を遂げる。そして、次に葬式が営まれる。その際、チベット仏教の高僧が死体から魂を完全に離し、死後49日で生まれ変わらせる魂の輪廻を行う。また、善人の場合には苦しみから解放される涅槃へ行って輪廻を絶つことになる。涅槃への道の工程表は信仰の目標に掲げられ、清浄心の現れである「思いやり」の宗教倫理を悟りの境地にするのである。これが観音信仰であり、自力本願を旨とする。

こうした人間の死と葬式はチベット仏教のシャーマニズムと大乘仏教の極楽観の融合として行われ、さらに無常を鳥葬の清浄で悟り、善の中心に「思いやり」の心を植えつけ、チベット仏教の宗教的悟りの儀式となる。この葬式におけるチベット仏教の儀式は死の無常さを人間に悟らせ、「思いやり」の心で善行を積む反面教師の側面を有するが、この点チベットにおける鳥葬儀式について次のように記す。

「チベットでは、伝染病にかかって死亡した者は土葬にされますが、それ以外の者は禿げ鷲に遺体を投げ与えられる鳥葬です。茶毘にふされるのは、ラマ僧だけです。一家の者は、母の突然の死に動転しており、葬儀の準備も自分たちで行なえないようなありさまでした。そこで、友人たちは、単純に一般の風習に従って、母の遺体を鳥葬にしたのでした。占星術師が、遺体を解体するにふさわしい日時を定め、召使がラツァク寺に遺体を運びました。遺体を移動させる際には、ペマ・ドルカーが、ツァロン邸から少し離れた地点まで行列の先導役を務めました。家族のなかの誰かがこの先導役を務める義務があるのです。

遺体が禿げ鷲に投げ与えられる光景は、見ていて身の毛のよだつような光景です。私は大人になってから一度だけ鳥葬を目撃したことがあります。ある朝早く、私は友人たちとラサ近郊のセラ僧院の裏手に出かけました。そこには、友人に背負われて運ばれてきた三人の庶民の遺体が、平らな大岩の上に載せられていました（遺族は

鳥葬の儀式には加わらず、友人を代理におくります)。遺体切断係の男六名はまず、岩の傍らに座ってチャンを飲みます。それからおもむろに遺体の服を剥ぎ、大岩の上にうつぶせに横たえます。十メートルほど離れたところで、何百羽という秃げ鷲が待ち構えています。鷲のいきとどいた秃げ鷲たちは、呼ばれるまでは動こうとしません。まず、手足が切断され、次に髪が引き抜かれます。この髪は後で燃やされます。髪は簡単に引き抜かれ、白い頭蓋骨があらわになります。内臓が抜かれ、隠されたところで、秃げ鷲が呼ばれます。秃げ鷲たちが食いあさっている間に、男たちは秃げ鷲の尻尾の大きな羽を引き抜きます。この羽で、子供たちの羽根つき遊びの羽根をつくるのです。次に秃げ鷲たちはしりぞいてしばらく待つように命ぜられます。しばらくして、再び秃げ鷲がよばれ、遺体の残りを食い尽くすことを許されます。最後に骨が砕かれ、脳味噌や内臓と混ぜ合わされます。遺体が一片も残らないことが肝心なのです。この重労働を終えると、男たちは手も洗わず、飲み食いを始めます。

それまでは一度はぜひ見たいと思っていた遺体解体作業も、実際に目撃してみると恐ろしいショックでした。一般にこうしたことを観察するのは、心の発展に役立つと考えられています。いかに幸せや成功を享受していようと、私たちはいつかは死に、こうした屍になりはてるのです。チベット人のある者は、私たちがだれしも死にゆく運命にあることを想起するよすがとするために自宅に頭蓋骨を飾っておきます。死を思えば、大それた野心を起すこともなくなります。鳥葬を目撃してからというもの、数日間食物が喉を通らず、約一カ月はこの恐るべき光景が目の前にちらついて肉に手を触れられませんでした。数日の間は関節という関節が痛み、頭皮がひどく痛んだため、髪に櫛が通らなかつたものです。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、60-62頁より引用)

かくて、「死を思えば、大それた野心を起すこともなくなります」と悟るリンチェン・ドルマは母の死とその鳥葬で存在の無常さ、野心の無^むなしさ、生への業欲(カルマ)とその因と果の縁起、そして人間の苦からの救いとしての輪廻観等を中心にするチベット仏教を幼くして10歳の時に体感するのである。

次に、リンチェン・ドルマがチベット仏教への悟りを体験するのは1958年中国によるチベットへの軍事占領の際、チベットからブータン、さらにインドへ逃亡する途中で死に直面した時である。チベットからブータンの国境であるブータン側のシャブジェ・タン村に着いたリンチェン・ドルマはブータンの親戚ブータン首相ジグメ・ドルジェ(1957-64)と結婚した姪ツェリン・ヤンゾムに会う間、1ヶ月近く待たされている間に、泊まっている寺にある仏教経典の多くを読み続け、特にカギユ派の『クンサン・ラマの教え』(ニンマ派)、『ミラレーバの十万歌』(カギユ派)から悟りのインスピレーションを心の奥で感じる。

彼女は1954年ダライ・ラマ14世の中国訪問への出発の時、大洪水でギャンツェ全市を押し流されて多くの知人を失うが、その中にいたインドの通商部代表ベンパ夫妻を思い出し、ミラレーバの狩人を悟らせた説法詩を次のように記し、悲しみの中に自己の悟りを重ね合わせた。

「いざすすめ、狩人よ
たとえ雷鳴が轟いても
その音は空
色とりどりの虹も
たちどころに色褪せる
この世の快樂は夢のごときものなのに
一時の享樂に酔い、罪をつくる

恒常にみえるものも
たちまちのうちに崩れ、四散する
昨日、この手が満たされても
今日はすべて失われ、何一つ残らない
去年生きていた者も、今年には死に
ご馳走も毒と化す
己れの罪によって傷つくのは己れ自身
人百人いても、いちばん大切なのは自分自身
十本指があっても、その一本でも傷つくと、痛い痛い和大騒ぎ
なによりも大切なのはこの自分——。
ならば、この「自分」を救う時は今
人生は瞬く間に、すぎさっていく
すぐに「死」がおまえの扉をたたくであろう
だから信仰の道に入るのを先へ先へとのはずすのは愚か者のすること
いとしき者たちよ
お前たちは、人を悲しみに突き落とすこと以外なにもやっていない
これからは幸せを求めて精進せよ
今、大切なのはそれを求めること
「導師」にたよるべき時は今、
「仏法」を修めるときは今」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、258-259 頁より引用）

この説法詩の中でミラレーバは存在の無常さ、快樂、享樂、馳走等の空しさを歌い、迫る死から自分を救い、死の罪から幸せを求めるに「仏法」を修めることで果されると説き、カルマの業と輪廻観をカギユ派の宗教倫理とする。

リンチェン・ドルマは既に述べたように 10 歳での母の死、この 1952 年での友人の死、そして、1958 年ダライ・ラマ 14 世のインド亡命の後を追って国境越えの際、自分自身の死に直面し、その死への追体験からチベット仏教への帰依と信仰を深め、殊にカギユ派のミラレーバにその心の響きを重ねて一体化していくが、この点について次のように告白する。

『クンサン・ラマの教え』を読みおわると、次には『ミラレーバの十万歌』を借り出しました。これまた、よい教えが詰め込まれており、私にはずいぶん助けになったものです。『ミラレーバの十万歌』の中の一節には、「出逢いも別れも避けがたい」とあり、この一句を読んで私は、愛する者ともいつかは別れなければならないという真理に気づきました。このようにお経を読み耽ることによって一ヶ月の長き間、ずいぶん心が慰められたものです。思いはつねにジグメと子供たちのところにとんではいましたが。

私たちチベット人は、ミラレーバの中にあらまほしき聖人の姿を見えています。ミラレーバは、西暦一〇五二年、チベットとネパールの国境沿いのキロンキロンの近くに生まれました。彼の父親は裕福な商人でしたが、ミラレーバがまだ幼いうちに亡くなりました。トバガ（聞くのを喜ぶという意味）と名づけられた少年とその母は、伯父夫婦の保護の手に委ねられました。ところが、伯父夫婦は母子の面倒をみるどころか、財産をすべて奪い、奴隷同然に働かせ、最低の食事をあてがい、ボロをまとわせ、凍えるにまかせました。夫婦はしばしばトバガを殴り、母子はひどい苦勞を堪え忍びました。思い余った母親は、息子に黒魔術を習うように命じます。ミラレーバは母親の言い付けに従い、黒魔術によって伯父夫婦を破滅させ、二人の村に恐るべき災厄をもたらし、復讐に成功しま

す。のちに自分の行ないを悔いた彼は、真実を求めてさまよい、翻訳官マルパに会います。マルパはミラレーバに数ヵ月に及ぶ肉体的労働を強い、それによって彼の罪障が浄化されつくされるまで、教えを授けようとはしなかったそうです。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、341-342頁より引用)

カギユ派は翻訳僧マルパによって創られ、弟子ミラレーバによって普及され、チベット仏教4宗派の一つを形成する。マルパはミラレーバへの仏法修業として黒魔術を清浄し、守護神に転換する清めとし「数ヵ月に及ぶ肉体的労働を強い」て「罪障」の浄化を行わせるのである。ここでは勤労観が「罪障」の浄化手段として働いていることが窺えるが、リンチェン・ドルマはこの仏教的勤労観を「思いやり」の労働(=仕事)へ昇華させることで仏教的家族主義労働観に発展することを悟りの境地とする。こうした「思いやり」労働観はリンチェン・ドルマの悟りの境地として、「我」(インドのアルトマン)に対する「無我」(大乘仏教)の表れとなる。すなわち、リンチェン・ドルマはシャブジェ・タンでの悲嘆さ(ラサに子供達と夫ジグメを残し、その生死不明)、性格の癩癩持から生じる怒りの罪深さからの救いを仏陀の教えである「慈しみの心」、つまり「生きとし生けるものすべてに思いやりの心」を持つことを「悟り」とし、「真理」そのものであった点を体験する。こうした悟りの仏法における真理が「慈しみの心」、さらに「思いやりの心」で労働する「勤労」観であると、リンチェン・ドルマは次のように記す。

「シャブジェ・タンで足止めをくっていた数週間のあいだ、私の仏教理解もかなり深まったに違いありません。それもこれも貴重なお経が手近なところにたくさんあったのと、それに集中できる時間があったからでした。これは仏法を学ぶとない機会でした。悲嘆にくれているこの時こそが。今こそ私にもわかったのです、すべてが無常であることが。富を増やすために、財宝の数々を獲得するために、いかに自分があくせく働いたかを思い浮かべてみました。ところがいざ時が来れば、誰もが自分のカルマに従って、すべてから、自分の子供たちからも別れなくてはならないのです。苦悩の中で、私はひたすら考えを巡らし、誰もがカルマの定めのとおりにはかならないと気づくに至りました。腹を痛めて生んだ子供でも、子供は子供自身のカルマを有しており、独りそのカルマを背負っていく他ないのです。両親は言ってみれば、果物の木のようなものです。果物は熟れると自然に木から離れて落ちていきますから。

私は若い頃ひどい癩癩持ちでした。けれども、義姉のリンジン・チュードゥンの感化をうけて、それをだいたい克服することができるようになりました。リンジン・チュードゥンは、私に怒りを抑制しなければならないこと、それは祈りを通して達成できることを教えてくれました。それからジグメと結婚してみると、ジグメの家族はみなたいそう性格がよく、癩癩をおこそうにも、その理由が見当らないほどでした。ジグメが忍耐強い性格だったのも助けになりました。後年私は仏法を一心に学び、それによると怒りの心を抑制するのは最大の美德とされてきました。癩癩をおこせば、一生の間ひたすら積んできた功德も、一瞬のうちに失われてしまうと言われるくらいです。

シャブジェ・タンで、私は仏陀の教えが真理そのものであると悟るに至りました。怒りを克服できるのは、慈しみの心であること、生きとし生けるものすべてに思いやりの心をもつことが仏法の本質であること。仏陀の説く真理を信頼しなくてはならないこと。もちろんこの真理は苦いものであり、それ故に人はめったにそれを理解できないのですが。そしてまた私たちが「我」と呼んでいるものは、一時の仮の姿のものにすぎず、真の幸福への道は「無我」を正しく解するところにあること。私は、他人の苦しみを想うことによって、自分の苦しみを減じることができることに気づきました。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、342-343頁より作成)

このように悲惨さ、また、死に直面し、その苦しみの暗黒から光に照らされて抜け出るのは「他人の苦しみを想うことによって、自分の苦しみを減じることの」できる「慈しみの心」、或いは「思いやりの心」であり、「無我」の労働（＝勤労観）であると見なす。

かくて、リンチェン・ドルマはインドに亡命したダライ・ラマ 14 世の下でこの「慈しみの心」、或いは「思いやりの心」に徹し、教育と介護への奉仕労働（＝勤労観）に後半の生涯を注ぐのである。既にこうした後半期の仏教への悟りである「思いやりの心」、或いは「慈しみの心」は前半期における、特に子供の時のツァロン荘園での小作人ととの間に築かれる家族主義的農作業労働において潜在的に育はぐまれることになるものと考えられる。したがって、リンチェン・ドルマは子供の時からツァロン家の荘園で地主手作経営を手助けし、小作人と地主の間の仏教的家族主義勤労観を体験しながら成長するが、この点を次の課題とする。

(3) チベットの荘園制度とチベット仏教の倫理

チベットが政教一致体制を統治制度として採用するに致ったのは 1642 年のダライ・ラマ 5 世の時からであり、以来 1950 年の中国軍によるチベット武力占領に致るまで続き、中世封建制度（荘園を基礎にする）の時代であったと云える。したがって、荘園はチベット封建制度を支える経済基盤であり、貴族、王室及び僧院、寺院、將軍、官吏等の支配階層を養う顕密体制の経済基盤を形成し、チベットを農業国として発展させる土地制度となっている。

こうした荘園を経済基盤の上に築かれる統治の構造はチベット仏教法王兼君主（所謂政治一致体制）の仏教鎮護国家（顕密体制）のシステムを発展させる。このチベットの顕密体制の統治は仏教法王を代表する僧官（175 人）と君主の行政を代表する俗官（175 人）の勅任官組織（350 人）とをダライ・ラマによって統合化され、政治を行うのである。さらに、法律の制定は貴族、商工、財界、僧侶、遊牧民、地主、小作人等の職種を代表する国民議ツォンドゥ会（50 人）によって提案され、内閣へ報告する。内閣は法王に奏上し、法王の承認を受け、他方その行政執行は 4 人の内閣大臣によって法王への奏上とその承認によって実施される。司法（最高裁）は内閣に属し、大臣 4 人の合同協議で判決を下す。内閣は宮内大臣を筆頭にし、財務、長老大臣（外交、軍事）を置き、俗官 3 人と僧官 1 人とから構成される。この大臣は政治、財政、宗教、教育、軍務、市政、司法の各局を所轄する。日本の中央官庁・省にあたる局は僧官 1 名と俗官 1 名とで組織される。軍隊は師団の將軍によって指揮され、軍総司令官によって統轄され、軍務局に属する。

父ツァロン・ワンチュクが將軍から軍総司令官へ出世し、さらに内閣の長老大臣に任命されるが、チベットの独立を巡って対英及び対清との外交交渉の際中の 1912 年に暗殺されたことは既に述べたところである。リンチェン・ドルマがダサン・ダンドル（ツァロン家婿入り）と結婚するが、ツァロン家の長となったダサン・ダンドルはツァロンを称し、軍総司令官及び内閣大臣へ就任し、ルンシャー、クンペー・ラ等と共に 3 人で内閣を構成し、富国強兵を進め、財政改革（貴族・荘園への増税）と軍備近代化改革を強力に実施したため、パンチェン・ラマのタシルンポ僧

院の反対と怒りによって1923年に罷免されてしまうが、この点についても前に述べたところである。

このようにツァロン家はダライ・ラマ13世の政教一致体制を支える有力貴族の一つとしてチベット史に刻み込まれるが、こうした官吏＝貴族として政府に仕える報酬として荘園を国家から貸与され、世襲化することを許されるのである。

貴族が政府に官吏として仕えることはダライ・ラマ法王の恩顧（荘園貸与）に対する軍役奉仕及び役奉仕の義務を果す封建領主（大名）の務めであり、「封建の制」（深谷克己『百姓成立』、19頁）に由るのである。こうして貴族は政府の官吏となることで報酬（給料）として、或いは愛国行為の褒賞として、さらに貴族同志の婚姻関係等によって幾つかの荘園を所有できる点について次のように記す。

「チベットでは土地はすべて政府の所有物になっています。貴族や僧院には、荘園が貸し出されます。時には貴族でないものにも貸与され、彼らは直接政府に税金を支払います。大僧院には、出費に見合うだけの広さをもった荘園が与えられますが、小さな僧院のなかには、一片の土地も所有しないところもあり、そうなるとすべてを布施に頼るほかありません。一家の男性が代々俗官として政府に奉職しているかぎり、その家は何世紀でも荘園を所有しつづけることができます。官吏として給料はありませんが、荘園からの収入が出費をまかないます。けれども、小さな荘園ですと一家の出費をまかなうどころでなく、そこで、貴族はしばしば交易に手をそめることとなります。荘園の規模はいろいろです。というのも、相当数の貴族が、愛国行為の褒賞として、特別に土地を授けられているからです。また、婚姻関係によって、二つか三つの、時にはそれ以上の数の土地を所有することになった大地主もいます。その場合も、人々の利害が一致しなくなり、荘園を再配分しなければならなくなった時にそなえて、土地関係の文書はきちんと保存されます。土地の分配も共有も難しいことはありません。政府がこういった取引をべつに規制してはいないからです。貴族も農民も、家族の絆を強めるため、ごく普通に一夫多妻制・一妻多夫制を行っていました。私たちは、皆、荘園を利用させてもらっていることに感謝しており、チベットの貴族たちは、ひとり残らず政府に仕えるべく全力をつくしていました。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、19-20頁より引用)

チベットの「封建の制」は貴族、地方豪族、部族長、僧院・寺院、富農等がその所有地を国家に寄進し、官吏に就くことでその所有地の荘園（地主手作）を報酬として貸与（領地化）され、年貢として農産収穫物（穀類、羊毛、酪農品）を本家である僧院及び国家（地方のゾン長官）に支払う。荘園は領主が官吏＝貴族として中央政府に奉仕する場合、荘園の管理は差配人に委ねられ、地主直営地を小作人に耕作させ、その年決算を領主＝貴族の現地視察での承認か、或いは差配人のラサ・ツァロン邸での報告するかで年度毎に決算されるのである。時には、年貢の搾取率を高めることで小作人が地主＝荘園領主と争議を起し、ゾン長官に訴訟するケースが生じる場合、ゾン長官は調査官を命じ、その調査報告書に基づき公平な裁きをする役割を果し、荘園の地主＝小作関係を搾取のない仏教的家族主義の「思いやりの心」、或いは「慈しみの心」で結ばれ親子関係を築こうとする。

リンチェン・ドルマはダライ・ラマ13世の末期、過渡期のティン・リンポチェ摂政時代、そし

てダライ・ラマ 14 世初期において既に見たようにツァロン家の父ワンチュク・ギェルポの暗殺、最初の夫である軍総司令官ダサン・ダンドゥルの政治的失脚、さらにパンチェン・ラマの中国亡命等全て内閣及び軍務局の派閥対立、野心的独裁者の横暴さに原因し、チベットを内部分裂に陥し入れ、荘園の寄進及び没収を厳しく増加する原因となる。その結果、リンチェン・ドルマは荘園の地主＝小作関係を家族主義から経済的搾取関係へ転換し、小作争議の激増となり、ついに中国の介入によるチベット占領と農地改革を育くむに至った点について危機感を深める。その代表としてデーブン僧院、セラ僧院が挙げられるが、これらの荘園では荘園の小作人に種籾を貸し付けてその利子として収穫物の 5 割を取る高利貸し（日本の古代の出挙制にあたる）を行い、搾取率の高さから僧院の財政収入増にするが、しかし、他面では小作人の没落と逃亡、さらに訴訟に踏み込む小作争議を生じ、荘園の衰退と小作人、小農の窮乏化を育くみ、その救済を緊急課題とするに至る。こうした大僧院での荘園小作人の没落と衰退がチベットのダライ・ラマ体制を崩壊に導く要因になると考えるリンチェン・ドルマはその救済に全力を注ぐ夫ダサン・ダンドゥルの活動を次のように記す。

「ジグメは建築の才能があり、絵もうまく、およそ実際の技術が要求されることならば何にでも長けていました。戊寅年（一九三八年）、彼はツァロンを手伝ってラサから約十キロの地点にチベット初の鉄の橋をかけました。ツァロン自らすべての作業を監督し、ジグメは、まるで実の父につかえるようにツァロンに対して従順につき従っていました。橋の建設工事中、ジグメとツァロンは、ティサムにキャンプしており、その地には、デーブン僧院、セラ僧院所有の荘園が数多くありました。僧院長と小作人は、年毎に利子がかさんでいまや莫大な額にふくれあがっていた古い負債を解決してくれるよう、ツァロンに依頼してきました（こうした負債の場合、公式の金利は十二パーセント、穀物の場合は借入量の五分の一もしくは六分の一が利子になります）。世話好きのツァロンは、快く調停役をひきうけ、債務者たる小作人たちが元金のみ返せばすむように話をつけました。彼は、この単調でながたらしい調停役を建築作業の監督のかたわらやっていたのです。それもきわめて熱心に。また、橋の建築に携わっていたジグメや政府の官吏たちも、ツァロンのこの調停作業に手を貸したようでした。

橋が完成すると、ツァロンは次に、ラサより約十六キロの、インドへの交易路にもなっているニェタンの断崖にそって自動車道路建設に着手しました。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、173 頁より引用）

こうした経済基盤の荘園の衰退、小作人の没落が深刻化し、チベットのダライ・ラマ体制を弱体化する原因となるが、その上に前に述べた政治支配を巡る内閣と軍務局での派閥抗争、イギリスと中国の介入に伴う分裂と派閥の形成による統治の脆弱化を深め、チベット国家＝ダライ・ラマ政教一体体制を崩壊へ導くことになるが、こうしたチベットの解体と崩壊を予言するダライ・ラマ 13 世は失意の中に 1933 年次のように遺言を残し亡くなる。

「法王はお亡くなりになる数ヵ月前に、政府に対してこんな遺言を残されていました。「誠実に一致協力して政務にあたり、チベットの独立を守るべし。『金めつきをほどこした真鍮のように』今日すべき仕事を明日にのぼすなかれ」と。法王はまた、外モンゴルに広まりつつある共産主義は、チベットにとって大いなる脅威になるであろうと警告し、現在モンゴルでは僧院が破壊されつつあり、モンゴルの共産党の役人たちがジェブツンダンパ・

ホトクト(モンゴルにおける最高位の活仏)の転生を認めなかった経緯を述べ、もし政府の官吏たちが仕事をなまけ、内部抗争ばかり行っているならば、最終的にはチベット内外から共産主義が到来するであろうと予言されたのでした。

グライ・ラマ法王の突然の崩御は、行政機関を完全に混乱に陥れました。財務長官^{ツィンペン}ルンシャーはすべての権力をわがものにしてという野心にもえていました。その行く手を遮っていたのがクンペー・ラです。クンペー・ラを追いおとすには、まず彼の連隊「トンター・マカル」(ジグメはこの連隊の^{ダツン}将軍でした)を解散させる必要があるとルンシャーはふみ、自分の意志に反して徴兵されていた兵士千名をひそかに扇動して脱隊するようそそのかしました。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、157頁より引用)

グライ・ラマ13世が「内部抗争ばかり行っているならば、最終的にはチベット内外から共産主義が到来する」と予言し、チベットの独立を喪失する予言を遺言するが、しかし、現実にはグライ・ラマ13世の予言が的中し、1950年中国軍のラサ侵攻となって実現するのである。とりわけ、財務長官ルンシャーは独裁者への道を辿り始め、政敵視する大臣クンペラーとその直属軍隊「トンター・マカル」に属する将軍である夫ジグメを罷免する。他方、ルンシャーは摂政となったレティン・リンポチェ(レティン僧院活仏)と内部抗争を深め、その結果追放されるが、このことがチベットの弱体化を促した。

中世以降チベットの「封建の制」は荘園制度とグライ・ラマの政教一体制とを特徴にして発達したが、1950年の中国軍によるラサ侵攻で崩壊し、漢民族国家の自治区に編成されて独立を失う。しかし、チベット「封建の制」が荘園を経済基盤に持続的に発達するに至ったのはチベット仏教のカルマの業と輪廻観に支えられる仏教的家族主義とその勤労観に依ってであり、ここにチベットの歴史的特質を見るのである。と同時に、日本を含む東南アジアに共通する仏教的勤労観の形成はマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で描かれるカルヴィン派職業倫理観(禁欲的産業労働観)に対比されるものとして確立するのである。

リンチェン・ドルマはチベットの荘園の地主=小作関係の中で育まれる仏教的家族主義とその勤労観の成立をチベット仏教の宗教倫理、とりわけカルマの業と輪廻観を中心にして次のように明らかにする。

「チベットの護教王の一人ムネ・ツェンポ(紀元八〇四年ごろ)は、貧富の差をなくすため、大臣に土地と富の分配を命じました。しばらくたって王が、改革の様子を尋ねると、富めるものはますます富み、貧するものはますます貧しくなっていると返事が返ってきました。ムネ・ツェンポ王は、さらに二回改革を試みたものの、いずれも失敗に終わりました。失意の王はインド人の密教行者パドマサムバヴァに相談しました。それに対して偉大なる密教行者はこう答えたと言われます。「何事も、汝らの前世の行為に依っており、貧乏人と金持ちの間隙をうめることは誰にもできない。物事の仕組みを変えることはできない」と。チベット人は、金持ちや運のよい人を見ると、前世の行ないがよかったのだとみなします。といっても、せっかく富を所有していても活用するすべを知らなければ、富も逆に苦しみの種になるだけであり、身の程をわきま満足することを覚えた貧乏人は、金持ちの吝嗇男よりも幸運だとされます。自分の人生に満足できないのは大きな罪です。チベット人はカルマ(業)を信じており、来世でよりよい生をうけられるように精進します。金のなかにも砂がまじっていることがあるよ

うに、チベット人のなかにも悪い人がいます。けれども、大半のチベット人は笑みを絶やさず、正直で、忠実で、自分の人生に満足しています。こうしたことはみな仏教のおかげといえましょう。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、21-22頁より引用）

森安孝夫が『シルクロードと唐帝国』で遊牧騎馬民族の征服王朝である唐の太宗の時代に中央ユーラシア大陸を三分割し（唐・ウイグル・チベット）、チベット帝国の発達を唐王朝を上廻るものとして実証した点については前に述べたところである。リンチェン・ドルマの言及するムネ・ツェンポ（紀元804年頃）の時代はチベット帝国がウイグル帝国と唐帝国と対立し、その覇権を確立する時期であり、中世チベット帝国の版図を新疆ウイグル地方から甘粛・青海モンゴル地方にかけて拡大し、その上に中央アジア征服王朝を樹立するのである。チベット帝国の中央アジアへの進出は663年モンゴル系の吐谷渾王国を侵攻して滅亡させ、唐の太宗の西方経営への対抗、さらにウイグル帝国との間にも北庭争奪戦を操り広げるのである。チベット帝国は唐の安史の乱での衰退を機に河西・隴有^{らくゆう}地方を攻め、次いで763年唐の都長安を侵攻し、786年河西回廊（敦煌・澤州）を占領する。さらにするチベット帝国は789～792年にウイグル帝国と北庭（トゥルファン・ロブノール（楼蘭・北庭））争奪戦を行い、789年東部天山山脈トゥルファン地方、また北庭からコートアン（于闐）への所謂タリム盆地南縁部（西域南道）へ進攻する。ウイグル帝国に敗れはしたものの、チベット帝国はタリム盆地南辺一河西回廊^{らくゆう}～隴有^{らくゆう}を領有し、シルクロードの一角を占めるのに成功する。チベット帝国はこのシルクロードの絹・馬交易で莫大な富を手に入れて黄金時代を築く。821～822年には唐・ウイグル・チベットの三国会盟、すなわち「盟誓得使三国和好」が締結され、チベット帝国が中央ユーラシアにおいてその騎馬民族征服王朝を樹立したことは前に述べたところであるが、しかし、1950年の中国軍のラサ侵攻の結果、ついに中央ユーラシア大陸は漢民族中央アジア国家によって掌握され、三国会盟の遊牧騎馬民族型征服王朝から転換する新しい世界史の時代を迎えるのである。

こうしたチベット帝国が中央ユーラシアを三分割し、天山山脈からパミール高原、コートアンにかけて遊牧騎馬民族王朝を樹立しえたのは、対外的にはシルクロードからの交易による利益と対内的には荘園制度と遊牧民牧畜の発達に由来するのである。この意味で、荘園制度は財政基盤であると同時に騎馬・兵士の供給基盤となり、まさに「封建の制」を支える経済システムとして国家の要^{かなめ}に発達するのであるが、その荘園制度が持続的に発達するのは、チベット仏教によって秩序の維持を計られることに由るのである。

リンチェン・ドルマは荘園の地主＝小作関係の秩序を支える要としてカルマの業に注目する。すなわち、荘園の中に形成される地主＝小作人関係は「富める者」（地主領主）と「貧しい者」（小作人）とに両極分解し、その格差をますます大きく広げる傾向となる。が、この人間不平等を是正する改革を護教王ムネ・ツェンポ（紀元804年頃）はインド人密教僧パドマサムバヴァにその救済策を要請する。チベット仏教の始祖の一人であるパドマサムバヴァはカルマの業に由る地主

と小作人の転生の仕組みの表れで、因と果に基づく「物事の仕組みを変えることはできない」と答える。したがって、パドマサムバヴァは来世でよりよい生をうけられるよう地主は地主として、また小作人は小作人として精進する」解脱の道を歩むべきであると地主＝小作関係を宗教倫理から位置づけ、この世（世俗）の秩序＝「物事の仕組み」として捉える。こうしたカルマの業を受け入れ、地主＝小作人は「身の程をわきまえ満足する」生活を仏教徒として送り、この世での善行を積み重ねてあの世で涅槃＝極楽浄土に昇天する輪廻観を人生哲学とする。

荘園の地主＝小作人はチベット仏教始祖の一人であるパドマサムバヴァによってカルマ（業）、つまり業苦の宿命で輪廻転生の運命であるとチベット仏教の宗教倫理に包摂される。地主＝小作人は業苦（罪）を善に昇華する勤労を担うことで清浄され、その結果、聖人に転生することができると考え、その禁欲的産業労働、つまり仏教的勤労観を育くむ。カルマの法則はチベット仏教の密教的側面を形成するが、同時に家族主義の中に地主＝小作関係を包み込み、荘園の地主＝小作人を親子関係へ昇化する「思いやりの心」、或いは「慈しみの心」を信仰心として生み出す。こうしたチベット仏教がカルマの法則の因と果の結果、荘園の地主＝小作人を親子の関係へ転生し、仏教的家族主義の現れと考えるリンチェン・ドルマは、チベット封建制度を支える荘園制度の仏教的家族主義的経営をチベット帝国建設の父と云われるソンツェン・ガムボ王の十三カ条にその起源を次のように求める。

「チベットの封建制度は、約千年前、チベットの護教王時代に遡ることができます。ソンツェンガムボ王によって定められた十三条の法には、必要なすべての法が含まれており、その主旨は、「貴族は、小作人に対して両親のごとくふるまうべし」でした。地主の一家の誰かが荘園に住みこんでいるならば、地主と小作人の間には、友好的な雰囲気生まれます。逆に荘園が他人に貸し出されたり、差配の手に委ねられたりした場合には、小作人への搾取は珍しくありませんでした。現在のダライ・ラマがまだ幼くあられた時、レティン・リンポチェとタクタ・リンポチェという二人の摂政が権力争いをし、高官の多くが自分のゾンを貸し出しました。そして貧しい人々は、新たな借り手によってさんざん搾取されたのでした。

小作人は賃貸料の代りに主人の土地を耕作しなければなりません。というのも主人は政府より土地を借り受けており、政府の役人として忠実に働いているからです。小作人は、主人の畑を耕すことによって賃金を得、食物を手に入れることができます。主人の畑で働く日、自分の畑で働く日は厳密に区別されており、灌漑用水の水さえもが均等に分けられます。政府の物資が、ラサに運搬される際には、小作人が荷役としてかきだされます。こうした賦役は、ゾン中のすべての荘園に課され、荘園の差配は、小作人の仕事が多くなりすぎないように監視します。荘園はまた、軍隊に兵士を何人か送り込む義務があります。兵士たちの給料は政府が持ちますが、特別手当ては小作人持ちです。つまり、兵士一名につき、長靴一足、手織りの上下一揃い、故郷を離れている一年の手当てとして約八十サン（サンはチベットのお金の単位）を支払うのです。

チベットの封建制度は、世界の他の国々に例をみない特異なものです。主人と小作人の生活水準にはかなりのへだたりがあったにもかかわらず、人々が満足し切っていたのは、興味深いことです。仏陀は行為とその果という法を説かれました。いかに無知なチベット人でも、この教義を理解し、常に念頭においています。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、20-21頁より引用)

ソンツェン・ガムボ王は国法として制定する十三カ条で荘園の地主＝小作人を親子、或いは小

作に対する地主を両親として明文化し、それぞれの生活を満足するように規範化する。ここにインドのカースト制、或いはヒンドゥ教と相違するチベット仏教が形成されることはリンチェン・ドルマによって次のように指摘されることとなる。

「チベットには、ヒンドゥー教の社会にあるようなカースト制はありません。なぜなら仏教の教えのもとではすべての人は平等とみなされているからです。けれども、仏教では「衆生を傷つけ、害をなす者を、衆生に対して慈悲の心を欠いた者を下等の者と知れ」とも説かれており、それゆえチベットでは、それと知っていて彼らと結婚するものはいません。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、23頁より引用）

インドのヒンドゥ教がカースト制度を宗教倫理として包摂し、人間の鎖を上下身分関係、つまり垂直関係として位置づけることに対して、チベット仏教では人間関係を平等主義に水平的に捉え、人間の鎖を横に展開される絆として把握し、大乘仏教の宗教倫理とする。日本での宗教革命が平安時代の密教の即身成仏と鎮護国家宗教から念仏によるナムアミダブ（南無阿弥陀仏）での極楽往生と浄土成仏への転生は大乘仏教としてチベット仏教と相違するものとし現れる。

チベット仏教が「衆生を傷つけ、害をなす者を、衆生に対して慈悲の心を欠いた者を下等の者と知れ」と説くが、この結果、ここに荘園の地主＝小作人はチベット仏教の観音信仰に導かれて「慈しみの心」又は「思いやりの心」から仏教的家族主義と種姓の階層制度を生むのである。かくて、この荘園の伝統的家族主義的経営は、さらに、荘園を基礎におく生産物地代の徴収（年貢と役奉仕（賦役））と兵の供出（軍役奉仕）とでグライ・ラマ法治国家を両輪として支える。こうした荘園の生産物地代と兵供出母胎との上に形成されるグライ・ラマ法王の「封建の制」は宗教儀礼＝祭列に国家予算の半分以上を支出することを余儀なくされ、1950年の中国によるラサ侵攻まで持続し、チベットの近代化を後らせる統治構造となる。チベットのラサ寺院で仏教を学んだ多田等観は1912年から1923年まで11年余りチベットで留学するが、その間チベットで体験したチベットのグライ・ラマ政教一体制国家の特異性とその脆弱性について「仏教・ボン教」の中で次のように指摘する。

「チベットはラマ教を国教としている国で、国王グライ・ラマは同時に法王である。政教両権を掌握して、チベット国に君臨している。この両権が主権となって形造るチベット政府は宗教統制の中心で、また行政上の機関を兼ねていると考えねばならぬ。国には古来国家的法律すなわち国法がある。いわゆる十六条憲法(Zhal lce bcu drug)と称し、書写して伝えられ、大臣の引き継ぎに受け渡される宝典で、一般に広く展示することを禁ぜられている。その内容は歴代王統譜、宮殿ならびに国民との関係、法律ならびに掟、止悪作善の条目、口碑・口伝等を序説において叙述し、つぎに本項に入りて、第一条用兵の法則ないし第十六条辺疆統治の概要に終わっている。現下の行政・司法はすべてこの憲法を標準として国家の秩序を維持せんとするものである。政府に四名大臣がいる。シャペ(zhabs pad)と呼ぶ。「シャ(ブ)」とは御足という語、「ペ」とは蓮華という語で蓮台の謂である。けだし法王グライ・ラマの蓮台下に奉仕する者という義であらう。この四名のうち一名は僧侶であることを注意せねばならぬ。元来僧侶が行政に参与するのは宗教上違法であるけれども、チベットは法王が統制する法治国すなわち仏法をもって統治する国であって、宗教的理解なくしては国家の統治ができないという理念からである。

行政官・司法官にはいずれも宗教的監視官としての僧侶が付き添っている。地方長官またしかりである。国家財政は宗教的使途にあてるを主たる目的とする。財政は国税で始末するが、税に二種ある。血税と物税である。血税は労働奉仕で、物税は各地方の物産税である。僧籍にある者にはいかなる理由からしても課税されることはない。ここにも仏教国としての特質を発揮している。かくして国庫に入った税の半ばはラマ教行事や、寺院の経費、僧侶の給与等にふりむけられるのである。以上のごとくその組織において徹底的な宗教国である。チベット人は常にラマありてのチベット国であると言っているのもゆえありというべきである。

単に政治ばかりでなくチベット人の日常生活がすべて仏教思想によって支配せられていることは言うまでもなかろう。しかしてチベットの慣習はラマ教ときりはなしてはとうてい考えられない。その一例としてチベットの国祭日であるが、それはすべて仏教関係のもののみである。一月の初めから三週間行われる無遮の大誓願会、一月十五日釈尊の誕生日、四月八日釈尊の出家、四月十五日釈尊の入胎、菩提樹下成道、入涅槃、六月四日釈尊の初転法輪、九月二十二日兜率下生、十月二十五日ツォンカパ (Tsong kha pa) (元順宗至正一七～明太宗永楽一七、西暦一三五七―一四一九) 大師の忌日等である。その外祭日に準ずべきは六月三十日と十二月二十九日に行われる各ラマ寺の除魔の行事がある。」

(多田等観『多田等観全文集』, 白水社, 144-145頁より引用)

この資料から窺えるように、グライ・ラマはチベット国家の政教一致制 (顯密体制) の中枢に法王として位置づけられ、僧官の俗官に対する優位の上に統治する。このため、チベットの「国家財政は宗教的使途にあてることを主たる目的とする」こととなり、その国家財政の支出は大部分「ラマ教行事や、寺院の経費、僧侶の給与等にふりむけられる」のである。こうした仏教国家チベットは、年間のうち半分以上を祭礼、宗教儀式、冠婚葬祭等にあてがわれるが、その主なものを列挙すると次のようになる。

- (1) 1月中の無遮の大誓願会 (モンラム・チェンモ)
- (2) 1月15日釈尊の誕生日
- (3) 4月8日釈尊の出家
- (4) 4月15日釈尊の入胎, 菩提樹下成道, 入涅槃
- (5) 6月4日釈尊の初転法輪
- (6) 9月22日兜率下生
- (7) 10月25日ツォンカパ大師の忌日
- (8) 6月30日, 12月29日各ラマ寺の除魔の行事

グライ・ラマ13世に仕えたツァロン家はチベットの有力貴族としてこれら国家儀式、祭例に参加する。が、リンチェン・ドルマは1903-1912年まで内閣の俗官長老大臣 (首相) に就き、その間、これら儀式、祭例への参加に伴う重い財政負担について次のように苦しい家計事情を告げる。

「大臣の地位には苦勞がつきものです。行政能力が必要なのはもちろん、どの大臣も多額の出費を強いられます。四年毎に官吏全員を対象に一大パーティーをひらき、毎年、大祈願会の折には、駿馬にうちまがった甲冑姿の騎馬兵二十四騎を武者行列に出場させ、常時、公式に騎馬の召使を七名雇っておかなくてはならず、チベット暦の一月十五日には、巨大な固形バターでできた高さ十二メートルもの供物を寄付しなければなりません (この供物は絵心のある僧侶の手でつくられ、色つきのバターで美しい模様が描かれています)。また、大臣は、就任を祝って、ラサの名刺チョンカパ大聖殿の主な仏像に新しい衣を奉納する義務があります。錦、縞子、絹、綿を使って仏

像それぞれの衣を作るには、十五人の仕立屋が総がかりで一ヵ月はかかり、なおかつ、出費も八百英ポンドを下りません。また、チョカン大聖殿の本尊である釈迦牟尼像にも金製か銀製の法輪を奉納する必要があり、これまた大きな出費です。法輪の輻は清浄なる行ないの象徴、法輪の輻の長さがそろっているのは公正であることの象徴、輪は智慧の象徴、真理の象徴である不動の心軸が固定されている箇所は、考え深さと謙遜を意味します。この法輪をもし銀と金メッキでつくるならば百五十英ポンドはかかります。毎月のように行なわれる政府主催の行事やお祭りの出席するには、錦の衣服をそろえなくてはならず、これまた大きな出費になります。重い責任のわりに、大臣の給料は薄給でした。時に前任者が必要な衣装を貸してくれることもあります。こうした余分の出費は荘園からの収入でまかなえるのが普通ですが、ツァロン荘園からは年に、穀類が十一万キロ、バターが七百二十キロ、羊毛が千八百キロしかとれませんでした。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、31-32 頁より引用）

ツァロン家はこの1月に行われる大祈願会には(1)貴族の軍役奉仕として騎馬兵 24 騎を供出し、このため常時騎馬の召使 7 人を雇い続け、(2)供物として高さ 12 メートルの固形バターを寄付し、(3)ジョカン（大昭寺）寺の主要仏像への 800 英ポンドを要する豪華な衣裳を奉納し、と同時に本尊の釈迦牟尼像に金製法輪を寄進し（150 英ポンド）、(4)毎月の政府主催行事や祭例月の絹製衣服を用意するのであるが、「多額の出費を強いられ」、給料として下付される荘園（ツァロン荘園）収入で賄えないほどである。仏教国家として貴族に課せられる軍役、儀式、祭例への支出はツァロン家に見られるように荘園収入を超えるものであり、その不足分を交易（インドとチベット間取引）で補填するのである。ちなみに、「ツァロン荘園からは年に、穀類が 11 万キロ、バターが 720 キロ、羊毛が 1800 キロ」とれるのである。さらに、貴族の生活を圧迫し、窮乏化する要因は上に述べた国家行事、宗教儀式、祭例の大きな負担と並んで貴族生活を支える召使・料理人・女中・及び庭師、織布工等の 15～20 名に及ぶ使用人の多さである。下級貴族を借金地獄に陥入れる貴族の使用人の多さ、とりわけツァロン家の場合には 20～30 名に及ぶのであるが、この点についてリンチェン・ドルマは次のようにその惨状を指摘する。

「都市部の貴族の使用人は——もちろん家の規模によりますが——召使が十五名から二十名、執事が一名、料理人一名、お茶作りの料理人一名、チャン娘（チャンを醸造し、客人に注ぐ役目の娘）数名、馬丁二名、水運び一名、掃除人一名、女中六名、そして庭があるなら、庭師が一、二名というところです。またそれほど金持ちでなくても、使用人が数名いるのがふつうです。こうした使用人は、給料こそ支払われないものの、家族と寝食をとみにします。

政府の官吏は少なくとも四頭の馬を飼う必要があります。ラサ郊外に荘園があり、定期的に食料と馬の飼葉を送ってもらえるならば、使用人を大勢雇ったり、馬を飼うのも簡単ですが、そうでなければ、出費がかさんでたまりません。借金地獄におちる貴族もいるほどです。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、66 頁より引用）

仏教国家を支える貴族と荘園制度はその宗教的負担に押し潰されつつあるが、しかしその負担は地主＝小作人を搾取関係へ転落することなく、むしろこの危機に共同して乗り切ろうとする仏教的家族主義の絆を強めることに帰結する。危機への悲劇に直面する地主＝小作人は、観音信仰

の「慈しみの心」、或いは「思いやりの心」を発揮し、むしろ家族主義経営を強化しようとする。荘園での小作人は、地主との共同経営のパートナーとして位置づけられ、(1)地主から借りる保有地への報恩として地主手作地を年間一定期間耕作と収穫労働に従事し、(2)残りの時間を自作地で農業を営み、(3)役＝賦役として荷物運搬に従事し、時には都会の地主＝貴族邸での使用人、召使として奉行し、(3)兵士として動員され、(4)荘園の結として共同作業に従事して地主＝領主と折半の農作業、牧畜、冠婚葬祭、家の建設、山林管理、入会地作業、公共工事、とりわけ道路、灌漑工事を負担する。リンチェン・ドルマは、荘園における地主＝小作人の家族主義関係を「満足し切っていた」と捕え、その原因をチベット仏教のカルマ(業)に求めている。同様に、多田等観は荘園の地主＝小作人に代表される国民の窮乏化、さらに重税に苦しむ農民、その中で1人の農家の老婆にその苦しさ、惨めさに対して問いただしたところ、この苦しみをカルマ(業)の報いであってこの重罪を一枚づつはいで軽くするのに喜びで一満であると観音信仰を告げている点について次のように記す。

「人間でも畜類でも観音さまの世界に生を享けている者は、その生活のすべてが観音さまの慈しみであると考えないではいられないのです。このように観音さまに依存した生活を喜ぶチベット人は幸福である。この喜びがあればこそ、来世もふたたびこの世界に生を享けたいという思想も湧いてくるのであろう。私がおったころのチベットは庶民階級の上に貴族が存在し、国家の課税も二重三重の負担がかかる。それゆえに、下層の人々は重税に苦しむ。その上匪賊の横行する地方では、苦の上塗りという状態である。貧しい農家のほりにまみれて働いている一老婆に、その苦しい実状を聞いた。婆さんの言うのに、今のうちにせつせと罪業の皮を一枚づつはいでしまわないと、来世は幸福になれない、重税の苦は罪業の報いである。われわれは何にもわからぬが、観音さまである王様がよくその重い罪業をわかってくだされて、負いきれないほどの課税を言い付けられるのである。重税は自分らの罪の重いのを軽くして下さるためのものであるから有難い、と嬉々たる態度にむしろ驚きをすら感じたのであった。ひがみの心をおこしているのではなからうか、とも疑った。しかしそうではなかった。老婆の心の底に、観音の国土に生享けている喜びがいっぱいに流れておった。チベットの人々は政治の欠陥を国民銘々がいただいている宗教的精神で補っていかうとする気持はまことに尊い。こうした完全な政教一致の国である。世界の人々はチベットを野蛮国だとか、非文明国だとかけなしているが、実状からすれば、いずれの国が文明国家であるかが判断に苦しむことが多いように思う。チベット人は自分の国をチョデン・キ・シンと称している。その言葉は、「仏法が具わっている国」という意味である。すなわち仏教国である。仏法の筋金通っている国で、国の政治や、社会組織、文学、芸術、習慣の総てが仏法の理解なくしては考えられぬ国である。」

(多田等観、前掲書、101-102頁より引用)

リンチェン・ドルマ、さらに多田等観が述べているようにチベットは仏教国であり、しかも農業国であるが、荘園の地主＝小作人はカルマの報いによって結びつく親子＝家族関係であることから、グライ・ラマ(＝観音)の重税を罪業として捕え、その罪業の皮を一枚づつはいで軽くする宗教的精神で生を実感する喜びに包まれている光景に直面する。こうしたチベットでのカルマの業で結ばれる荘園の地主＝小作関係は、ブータンでも日本の東北における名子制度においても見出され、東南アジアに普遍化する仏教(大乘仏教)国の現象である。

リンチェン・ドルマが人生の前半におけるツァロン家のツァロン荘園で、後半にはタリン・ラ

ジャの長男ジグメとの再婚によってタリン荘園で送ることになるが、これらの荘園における地主＝小作人及び牧畜業について次に取りあげる。

（4） ツァロン荘園， タリン荘園と牧畜業

最初にツァロン荘園の地主＝小作人について見てみると、ツァロン荘園の年収入は前に述べたが、穀類 11 万キロ、バター 720 キロ、羊毛 1800 キロで、チベットでは中位規模の荘園である。リンチェン・ドルマはこのツァロン荘園を西チベットのサキヤ近くの先進農業地帯ツァロンに位置し、ダライ・ラマ政府によって下付される先祖代々世襲相続してきた荘園として次のように記す。

「ツァロン家の田舎の荘園は、西チベットのサキヤ近くの、ラサから馬に乗って十二日のところにありました。そもそもツァロンの名はこの地方の名に由来しているのです。ツァロン荘園は、父から息子へと代々受け継がれてきましたが、一家の者がこの荘園に住むことはなく、小作人のなかから差配に選ばれたものが、この荘園の管理をしていました。収穫時には、一家の誰かが大麦、小麦、豆の出来高を検分にいき、帳簿を調べます。その後、差配はラサにやって来て、年間の決算を行ないます。ツァロン家では、飢饉に備えて、毎年、家族と小作人のため余剰穀物を備蓄していました。また、年に二回、荘園からラサのツァロン邸に、ラバやロバの背にのせられて穀物と酪農品が届けられていました。

ツァロンは、中規模の荘園でしたから、私たち一家は決して裕福ではありませんでした。けれども、八世紀に活躍した名医ユトー・ユンテン・ゴンボの、そして十八世紀の宮内大臣ケルサン・チューダクの末裔という、世に名だたる家系でもありました。ツァロン家の者は、この何百年の間、ラサに定住していました。代々の当主がさまざまな役職で、チベット政府に仕えていたからです。私の祖父、財務長官ツァロンは、当時の貴族のなかでも一頭地を抜く豪胆な性格の持ち主でした。一八八六年、チベット政府は、チベットとシッキム国境確定のため（当時英国はこの問題にからんで揉め事を起しかけていました）、この祖父をシッキム国境に派遣しています。祖父は、大臣に任命された直後、就任を祝うひまもないうちに亡くなりました。」

（リンチェン・ドルマ，前掲書，16-17 頁より引用）

ツァロン家は 8 世紀インドに留学して医者資格を取ったユトー・ユンテン・ゴンボの末裔で、18 世紀宮内大臣ケルサン・チューダクの系譜を有し、祖父も財務長官を努め、シッキム国境を巡ってイギリス側と外交交渉を進め、有力貴族の俗官を代々努め、その禄高＝知行地としてツァロン荘園を代々世襲するのである。このため、ツァロン家は古くから首都ラサに居住をかまえ、ポタラ宮に將軍、軍総司令官、或いは内閣の長老大臣として仕えてきた。したがって、不在地主としてツァロン荘園は荘官として差配人（支配人）によって代々管理され、小作人も代々世襲されている。この荘園では牧畜（羊毛・ヤク）、畑作（大麦、小麦、豆）、酪農（チーズ、食肉）を中心に営まれる。年に 2 回これらの農産物、特に穀類と酪農品は小作人の役（賦役）でラサまで運搬される。また、荘園の決算は現地で家族によって監査されるか、或いは差配人がその監査をラサ邸宅で受けるかのいずれかによっている。前に述べたように、「貴族は、小作人に対して両親のごとくふるまうべし」とソンツェン・ガムボ王の制定した十三条の法がその後も継続され、このツァロン荘園でも守られている。ツァロン荘園はツァロン・ゾンの長官によって徴税されるが、生産

物地代として穀物、バター、チーズ、羊毛、紙、油、肉等を納税する。この他に、ゾン長官は血税=役(賦役)として小作人、農民を動員して運搬、公共工事を課す。この荘園への課税についてリンチェン・ドルマは次のようにその実態を明らかにする。

「税金は、穀物、バター、チーズ、羊毛、紙、油、肉、現金の形で政府に支払われます。作物の出来が悪かったり、灌漑用水がこわれたりして地方当局から税金の免除を受けた場合は、ラサの財務局にそのことを報告しなければなりません。毎年、財務局は、収穫物を優劣を競うコンテストを開き、一等の地方のゾン長官(ゾンと呼ばれる行政区分の長官)に賞が贈られます。チベットには約七十のゾンがあります(チベットは人口密度の極めて低い、面積約千二百万エーカーの広大な国です。人口統計がとられたことはありませんが、チベット人はいつでもチベットの人口は六百万と信じてきました)。荘園はすべて、ゾン長官の管轄下にあり、紛争の解決も税金の徴収もすべてゾン長官の手に委ねられています。どのゾンも僧官一名と俗官一名が共同で統治します。ゾン長官が、民衆を搾取したような場合は、民衆が代表団を組織してラサに送り込み直接陳情を行なうか、陳情書を送ります。すると、政府は官吏の中から善良な者を選んでその地に派遣し、実態を調査させ、搾取をやめさせます。調査官が公平な取り調べをしなかった場合には、民衆はそれに不服をとなえることができます。その結果調査官のすげかえが行なわれることもあります。このような紛争の多くは、親戚か家族の者によって調停が行なわれることも多いのです。公式の手続きをふんで政府の調査を受けるとなると、何年もかかる上、両方が多大な損害をこうむることになります。というのも、政府がしばしば係争中の地主と小作人の双方の納屋を封印してしまうからです。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、20頁より引用)

ゾン長官は管轄下の荘園を競わせて農産物の収穫高を急増させ、年貢額の増額を計ろうとする。他方、ゾン長官は地主=小作人間の争議を調停し、親子関係の維持に努める。多田等観も荘園への課税(物税と労役に血税)とその重税化傾向について留学中の経験を次のように記す。

「それからチベットにおける課税は物税であります。物を税金として取る。チベットには今こそ貨幣ができましたが、昔は貨幣というものはありません。で、牧畜の盛んなところからはバターとか羊毛、毛皮類などを税金として取る。また糸や織物のできるころからは、そういう物を税金として徴収することになっておりますから、政府の倉庫の中は、荒物屋か乾物屋のようになんでもあります。そういう物税の外に血税というものもあります。すなわち労働税であります。田一町歩耕者に対しては、これだけの人間を出さなきゃならぬとか、馬ならば何頭出さなければならぬとかいうふうに、人間や馬の労力が一つの税金になっておるわけであります。政府が道路を修復する時などは、何々部落から人を何人出せということで、それが労働税としてかかるわけであります。それです。それから政府の役人の俸給も物税で集められた物を給与する。大臣始め皆そうです。麦何升とかバター幾らとかいうような具合で、どこかへ旅行すると、その旅行の費用もやはり物によって給与される。例えば十日の旅行に対しては十日分の麦、十日分のバター、茶、塩というようなふうにくれる。乗物はどうかというと、昔の東海道の駅伝の制のようなものがあって、それは血税となってでてる。その馬に乗って駅から駅へと行く。ですから役人が出張するとなるとなかなか大変なのであります。」

(多田等観、前掲書、56頁より引用)

父ツァロン・ワンチュク・ギェルポが1912年に内閣の長老大臣として対イギリス、及び対中国とチベットの独立問題について外交交渉をしている際に暗殺され、同時に兄サムドゥブ・ツェリンも渉外官として外交交渉に加わっていたが同様に暗殺されてしまった。このため、官位とし

て下付されているツァロン荘園が政府に取り上げられる可能性が強まり、このため兄の妻で未亡人となったリンジン・チュードゥンは軍総司令官 Chancellor・ナムカン（ダサン・ダンドゥル・ツァロン）を婿養子にしてツァロン家を嗣がせ、ツァロン荘園を相続する許可をダライ・ラマ 13 世から 1913 年次のように許可されるのである。

「ダライ・ラマ法王は一九一三年にインドから帰国する際、チベット軍が中国兵を一掃するまでの一時、ラサから馬で二日のチューコル・ヤンツェに滞在なさっていました。法王の一行の中に、法王の寵臣で博学をもって知られる活仏のツァワ・ティトゥルがいました。ツァワ・ティトゥルは、私の姉ノルブ・ユードゥンの夫デレク・ラプテンの兄弟にあたります。デレク・ラプテンの妹リンジン・チュードゥンは、先年夫であるサムドゥブ・ツェリンを殺されて未亡人になっていました。そのころ、チェンセル・ナムカンは、法王に謁見するためチューコル・ヤンツェ僧院に足しげく通っており、また、リンジン・チュードゥンも兄のツァワ・ティトゥルに会うために（信者として）よくこの僧院を訪れていました。まもなく、ツァワ・ティトゥルは、私の母とツァロン家の召使に手紙をよこし、チェンセル・ナムカンとリンジン・チュードゥンの結婚を、そしてチェンセル・ナムカンにツァロン家を継がせる許可をダライ・ラマ法王にお願いしてはどうかと提案してきました。次兄のケルサン・ラワンはすでに僧籍にあり、チベットの慣習では、家を継ぐ男子がいない場合には、娘もしくは娘たちに婿をむかえます。また、一家のなかに、俗官として政府に奉職するものがいなければ、一家の荘園が親戚に乗っ取られたり、政府に取り上げられて僧院などに与えられてしまうおそれもできます。ツァロン家の召使やツァロン荘園の小作人たちもこの考えに賛成で、母はツァワ・ティトゥルの提案を呑むことにしました。こうして、チェンセル・ナムカンはわが家に婿養子入りし、ダサン・ダンドゥル・ツァロンと名乗るようになりました。そこでこれからは彼をツァロンと呼ぶことにしましょう。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、40-41 頁より引用）

だが、ツァロン家を嗣ぐにはツァロン家の家族と結婚することが社会慣習上（女系家族）求められることになるが、このため、ダサン・ダンドゥル（ツァロン）はツァロン家の 3 人の娘と結婚することとなり、その 1 人がリンチェン・ドルマである。

リンチェン・ドルマはツァロンとの間に娘ツェリン・ヤンゾムを生み、ツァロンの事業を秘書として手伝っていたが、娘の誕生祝いの手紙をシッキム（王）のタリン・ラジャの長男ジグメから受けとり、その手紙に妹チャンチュブ・ドルマへの結婚申込みを記していた。結果として、リンチェン・ドルマがこのシッキム公子ジグメと再婚することになるが、その原因はダージリンのヌウント・ハーモン・スクール（アメリカ・メソジスト系）に 1922 年に入学した同期生で互によく知っていたからである。かくて、1929 年リンチェン・ドルマはジグメと再結し、タリン家のタリン荘園で生活を始める。

タリン荘園で人生の後半の生活を送るリンチェン・ドルマはタリン荘園がシッキムから亡命したタリン・ラジャにダライ・ラマ 13 世から 1893 年に下賜された小規模の荘園であり、ギャンツェ僧院を本家とするため、ギャンツェ・ゾンの長官とこのギャンツェ僧院に年貢を納めている点について次のように指摘する。

「一八九三年に、タリン・ラジャとその叔父がシッキムよりチベットに亡命したとき、チベット政府から下賜さ

れたのがタリン荘園でした。そのむかし、給与代りに^{ダブン}將軍たちによって使用されていたこの荘園は、由緒のある貴族や大僧院のそれとくらべると相当小さく、ここはよくとも、収穫量はいつも不足していました。主なる収穫物は、大麦、豆、小麦など、年間の収穫量は、種蒔き量の六倍、約六万キロほどでした(穀物箱四千箱)。これはまことにたよらない収穫量でした。米、砂糖、布地、マッチ、石鹼、鉄はインドより輸入でした。

この収穫量の中から、ギャンツェ・ゾンとギャンツェの僧院に地代を払わなくてはならず、またくりかえし襲ってくる伝染病や雹の厄除け供養の費用も捻出しなければなりません。供養の施主はタリン一家ですが、荘園の小作人たちもいくらかの布施を行ないます。そして二十人の僧侶が呼ばれ、百八巻のカンギュル(仏の説かれた教え)が誦経されるのです。その他にも何種類かの供養をとり行なう必要がありました。じつのところ、自分のカルマに、運命にしっかり縫いつけられた禍いを避けるすべはないはずなのですが……。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、133頁より引用)

このタリン荘園は地主＝小作人関係で営まれ、収穫量で穀物(大麦・小麦・豆)4000箱で、その他に酪農品、羊毛等がある。宗教儀式、祭列、及び供儀の支出が荘園収入を上廻って赤字すれすれの状態である。リンチェン・ドルマはツァロン荘園に較べて生活の苦しさをカルマの報いと感じるのである。タリン荘園は2頭牛(ゾ)畜鋤で土を掘り起こす耕作を行い、人糞肥料を使用し、牧畜にヤク、ゾ、羊、ロバを飼い、バター、食肉、ヨーグルト等の酪農品を加工して作り、販売してインドから「米、砂糖、布地、マッチ、石鹼、鉄」を輸入する小商品生産段階に発展しつつあることが次のように記されている。

「タリン荘園では、耕作にはもっぱらゾを用い、牛は乳しぼり用でした。ゾはヤクと牛の混血で、雄のゾは耕作に適しています。私たちは約三十頭のゾを持っていました。荘園の小作人たちは、ゾの所有を許されなかったので、私たちのところからゾを借りうけ、現金もしくは賦役でその賃貸料を支払います。ゾは二頭でペアになって耕作します。その角には、赤いウールの房と時には小さな鏡が飾り付けられ、遠くからもこの鏡が光っているのがみえます。ゾにつけられる木製や鉄製の鋤(これはインドからの輸入品)はもろく、深く掘り起すには適していません。耕作は春もしくは秋におこなわれます。冬場は、大地が凍りついているからです。畑は収穫量を増加させるために、一年ごとに休閑地にすることが多く、また化学肥料は使用しません。最良の肥料は人糞とされているからです。人糞は、便所で灰と土をかぶせておき、一年に三回畑に運ばれます。牛と羊の糞もよい肥料になるものの、中央チベットでは、木が不足しているために、薪代りに使用されています。

雌のゾは牛の乳より濃い品質の乳を出しますが、雌ヤクの乳にはかないません。雌ヤクの乳はきわめて濃く、たいそう滋養に富んでいます。というのも、雌ヤクは高山できわめて滋養に富んだ草を食べているからです。デーブン僧院の上には、ゲベル・ウツェと呼ばれる小さな僧院があり、そこでは八人の具足戒をうけた僧侶たちが雌ヤクの群れを飼っていました。彼らは、土壘に雌ヤクのヨーグルトを入れ、封印して施主たちに贈っていました。この山の草は最も滋養に富んでいると言われていました。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、133-134頁より引用)

2 編 ブータン仏教と人間像

序

「チベットの娘」としてリンチェン・ドルマを取りあげたが、「ブータンの娘」としてドルジェ・ワンモを取りあげてブータンの原像を解明したい。

ここではブータンのドルジェ家を取りあげ、ブータン王家ワンチュク家との関係を明らかにし、さらにブータンの「国民総幸福」GNH が東南アジアにおける共通の価値観として形成されることを比較経営史の立場から探る。

しかし、チベットの娘リンチェン・ドルマはブータンの首相ジクメ・ドルジェの親戚である。すなわち、ブータンのジクメとはリンチェン・ドルマの姉ツェテン・ドルカーの長女ツェリン・ヤンゾムの嫁^{とつ}ぎ先であるブータン首相ジクメ・ドルジェ家のことである。1編でリンチェン・ドルマを取りあげたが、リンチェン・ドルマは姪のツェリン・ヤンゾムを通してブータンのジクメ家の親戚となる。1958年にリンチェン・ドルマが中国軍のラサ侵攻のため、ブータン経由でインドへ逃れる際、ブータン国境で保護してくれたのがブータン首相ジクメ・ドルジェであったが、このことについて1編で述べたところである。他方シェブドンの化身系譜を継ぐドルジェ家の娘であるドルジェ・ワンモはブータン4代国王ジクメ・セング・ワンチュックと結婚し、王妃となり、国王の国策である「国民総幸福」GNH（General National Happiness）を推進し、その内実を『幸福大国ブータン』（今枝由郎訳、NHK 出版）として出版した。したがって、ここでのブータンの分析はこの文献を中心に進められ、仏教国ブータンの「国民総幸福」をチベット、さらに日本との関係からも多角的に掘り下げる。

1 章 リンチェン・ドルマとブータンの関係

リンチェン・ドルマは1954年ダライ・ラマ14世の通訳として中国訪問に同行し、その中国の豊さから貧しい中世チベットを侵攻することに疑問をいだきながら次のように自問する。

「中国はこれほど富んだ美しい国なのだから、チベットなど必要としていないのではないかと、この旅行の間私は思ったものです。しかし、中国人たちは、戦略的観点からチベットをとることが肝心だとみなしたのでした。諸外国は、地理的に離れていたため、中国人のこの意図に気づかず、チベットをチベット人の手に残すため手をかしてくれようとはしませんでした。これもまたカルマというものなのでしょう。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、279頁より引用）

中国のチベット侵攻は「戦略的観点からチベットをとる」ことに踏み切るのであり、国際的に

援助の「手をかしてくれようとはしませんでした」のである。そして、この中国のチベット侵攻はダライ・ラマの政敵となったパンチェン・ラマのチベット改革案を背景に進められた。そして、そのチベット改革案はチベットの民主主義化として具体化され、(1)「^{チベット}西藏自治区準備委員会」の発足と(2)農地改革による荘園制度の解体である。リンチェン・ドルマは中国からの帰国後、チベット政府の崩壊と農地改革の^{うし}後ろにパンチェン・ラマの姿を次のように垣間見る。

「(「西藏自治区準備委員会」発足の)祝典が催されました。ラサ市政ホールには、たくさんの旗が飾られ、舞台の中央に据えられた長いテーブルには、高官たちが顔をそろえました。中国軍の楽隊の伴奏のもと、おきまりの共産主義讃歌が歌われました。私は、愛国婦人連合会のオブザーバーとして、階上の席に招待されていました。ダライ・ラマ法王、パンチェン・ラマ、サキヤ・ラマ、その他のチベット人高僧、陳毅元帥、西藏自治区準備委員会のメンバー、それにツァロンがチベットの有力者として、演説を次々に行ないました。中国側の打ち出した土地制度改革案がチベット人大半の賛同を得ていないことは、演説からも明らかでした。正面きって中国を批判しようとする者こそいませんでしたが、パンチェン・ラマを除き全員が、私たちチベット人は共産主義改革を好まないと礼儀正しく述べました。そしてパンチェン・ラマの、改革を歓迎するという演説も、中国側の意向にそったものと考えれば納得できました。

ツァロンが壇上にあがると誰もが身を乗り出しました。中国人たちでさえ、お互いを肘でつつきあいをしていました。ツァロンは、みんなの注目をあつめるなか、「私たちチベット人は、侵略者にたいし常に抵抗してきましたし、この国を誰にも譲りわたしはしませんでした」とごく手短かに述べるや、さっさと舞台を降りてしまいました。私たちは、お互いに顔を見合わせ、にやりとしました。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、280-281頁より引用)

ツァロン家の当主ツァロンがチベットの独立のために闘う決意を表明し、ダライ・ラマ14世の意志を代弁するが、この後(1958年)、中国軍はラサ侵攻を開始する。戦闘は1957年カムパ族の反乱で始まるが、その背景にはチベット東北地方の甘肅、青海省での農地改革による荘園の解体のチベット全土への拡大に由るのである。リンチェン・ドルマは中国の侵攻とチベットの農地改革の同時併存的進行を次のように告げる。

「一九五七年八月にラサに戻ってみると、カムパ族の反乱は激しくなる一方という噂でした。東チベットのカム地方にやってきた中国人たちは、最初のうちはごく友好的にふるまっていました。ところが一九五六年に、中国人たちは突然、カムパ族に武器引渡し要求を突きつけました。カムパ族は、ピストルや^{リヴォルヴァー}連発銃や短剣をこよなく愛する民族です。カムパ族はこうした武器を他国との戦争に用いるわけではなく、旅の身の安全のために、あるいは勇猛さを誇示するために身に帯びているのです。また駿馬や上等のラバに目がなく、美しい鞍と鞍敷きに多大な興味を示します。カムパ族はなにがあろうと決して自分の武器を手放したりしません。そこで、中国人たちは、小作人たちをそそのかして、反乱を起させました。そして小作人に、主人である地主を打擲させ、また数々の屈辱を加えさせたのです——主人に馬用の手綱をつけ、背中にうちまたがって走らせるなどの。中国人たちは、また僧院を、仏像を、仏典を破壊し、仏陀の教えを汚したのです。カムパ族はこれに我慢できず、ついに武器をもって立ち上がり、ゴンポ・タシ・アンドックツァンの指揮のもと、カム全土にゲリラ隊を組織し、中国人に戦いを挑んだのでした。

中国人は重ねて中国のゲリラ討伐軍にチベット軍も加わるよう、チベット政府に要請してきていました。チベット政府がこれを拒絶すると、中国人たちはかんかんになって怒り、大臣たちにあたりちらしました。愛国婦人連合会の会合にやってきた譚冠三將軍は決まってこう罵ったものです。「チベット内閣の大臣たちときたら、あんな

方よりたちが悪い」。愛国婦人連合会には、大臣夫人も何人かおり、もちろん主任のツェリン・ドルマもその場に同席していました。けれども、將軍のこの言葉にあえて反論できるものは一人もおらず、將軍がテーブルを叩きながら、私たち一人一人をねめつけている間、みな黙したままでした。」

（リンチェン・ドルマ、前掲書、301-302頁より引用）

1958年中国軍はチベット東北地方カム、アムドからラサへ侵攻を進め、1958年3月18日ノル布林カ離宮への攻撃を開始した。グライ・ラマ14世がインドへの亡命を執行するや、後を追うチベット人がヒマラヤ山脈を必死の思いで越えた。その中の1人がリンチェン・ドルマであり、彼女はブータンのジクメ家の援助を求めブータン経由のルートを選択する。カムパ族がグライ・ラマを警備するが、その検問所の1つでカムパ族指揮官チャンリ・ラギエルは、リンチェン・ドルマにブータンを通り抜けるかと詰問する。それに対して、「もちろん通すはずです。ブータンの総理大臣の奥方はツァロンの娘ですし、王妃はタリン・ガサーの従姉ですから」と、彼女は答える。

ブータンのシャプジェ・タンに入ると、リンチェン・ドルマは「姪のツェリン・ヤンゾムとラニ・ドルジェ（ジクメの叔母）に早くインドに出たいから、助けてほしい」と使いを送ると、2日後にブータン首相ジクメ・ドルジェから手紙を受け取る。他方、彼女はツァロンと夫ジクメの行方を探り続け、ジクメの無事を確認するがツァロンの死を後で知るが、日本に帰っている多田等観にも行方を次のように問いあわせる。

「わが友ツァロンの行方

十日あまり東北地方を旅行して帰ってみると、家に二通の航空便が届いていた。一通はインド・シッキム州の首都ガントクから、もう一通はカリンボンからであった。いずれもチベットの友人からの手紙である。

読んでいるうちに、私は次第に不安の念がきざしてくるのを抑えることができなくなった。私がチベットに在住していた時代から三十数年にわたって親交を続けてきたチベットの元総理大臣ツァロン氏の行方がわからないと、その手紙は伝えてきたからであった。手紙には、こんなことが書いてある。「昨年[一九五八年]暮れまでインドにいて、最近帰国したツァロン氏が、動乱で消息が絶えているということを、あなたにお知らせすることは、まことに心苦しい。ツァロン氏は生きているかもしれないが、あるいはすでに葬り去られたかもしれない。チベットにおける有名人の消息は、大体インドに伝わっているが、ツァロン氏のだけは伝わってこない。……」

そして、チベットに乱入した中共軍が、あるいは仏殿を破壊し、無防備都市であるラサで暴力をほしいままにしている状況が刻明に手紙には書いてあった。インドに逃げ出してくるチベット人は、いずれも命からがらの有様であるという。

ツァロンは、今年七十三歳、チベット有数の政治家であり、文化人である。彼の息子や娘はインドに留学し、英語も巧みだ。昨年暮まで、ひっきりなしに手紙をくれ、写真を送ってくれたのに、それが跡絶えたと思っていたら、この不幸な消息だ。私は幾度もこの手紙を読みかえし、年来の友人の安危を焦慮した。」

（多田等観、前掲書、282-283頁より引用）

多田等観は、チベットの内閣長老大臣（首相）であったツァロン家のワンチュク・ギェルポとダサン・ダンドゥル（1885-1959）の援助を受けて留学を終了することができた経過から、73歳のダサン・ダンドゥルに感謝の念を抱いていたのである。しかし、ツァロンは中国軍によってポタ

ラ宮で捕われ、投獄中の1959年5月14日ベットの中で亡くなるが、その経過について次のように記されている。

「(リンチェン・ドルマが) カリンボン滞在中に、ツァロンが一九五九年五月十四日に獄中で亡くなったとのニュースがツェリン・ヤンゾムのもとに伝えられてきました。中国人たちは、砲撃を終えると、たちどころにポタラ宮殿にいたツァロンとチベット政府の高官多数を逮捕しました。ツァロンは投獄され、重労働を宣告されました。ツァロンはこれを怖れたりしませんでした。働くことの好きな人でしたから。囚人仲間の一人に高僧のトモ・ゲシェー・リンポチェがいました。シッキムの貴族の息子であったトモ・ゲシェー・リンポチェは、献身的な信者の尽力のおかげで、のちに釈放されてインドに出てくることができました。その彼の語ってくれたことによると、刑務所で彼は毎朝ツァロンのもとにお湯を運ぶ役をつとめたそうです。ツァロンはいつも彼に労働にはげむよう忠告してくれていました。刑務所の食事は、きわめてひどかったものの、誰もが課せられた一日分の仕事をこなしていかなければなりません。ある日中国人はツァロンの召使たちに、翌日ツァロンを辱めるようにと命じました。翌朝、ツァロンはいつものように労働に出てこようとはしませんでした。そこで別の高官が彼を起しにいき、そしてベッドの中で死んでいる老いたる英雄を発見したのです。彼の遺体は実の妹のツェリン・ドルマに引き渡されました。

このニュースを耳してみな沈痛の思いでした。ツァロンはどの子供にも自分の特別なベットであるかのよう
に思わせるこつを心得ていました。娘のツェリン・ヤンゾムは心も張り裂けんばかりでした。けれども、彼女は雄々しくそれに耐えました。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、354-355頁)

ツァロンは投獄中に重労働を課され、その中で73歳の高令も影響し、ベッドの中で息を引きとるのであった。夫のジクメはダライ・ラマ14世のインドでの亡命を支える中心人物として活動し、リンチェン・ドルマと再会するが、ここにチベットのジクメの活動は終焉するのである。

次に、ブータンのジクメ家とブータンとの関係が対象となる。特に、ブータンの原像は村落共同体における小農経営と「結」労働を草の根にする。

2章 ブータンの原像—1 中世ブータンの村落と「結」的 絆

最初に、ブータンの原風景を概括し、その全体像を描く。

多田等観はインドからチベットへ行く途中、ブータンを経由することになり、1912年の中世ブータンについて次のように「野蛮」な途上国として記す。

「そこでブータンへ入った。このブータンという国の人間は、チベットの人間と同じ系統のものでありますが、チベット人よりさらに獐猛でありまして、日常の生活儀式もチベット人以上に野蛮の儀式を持っておる。まず第一に私がブータンへ入って困ったのは、ブータンという国には道路というものが全然ない。そうしてこのブータンの人間というものは猿のようなものでどこを歩くにも履物を履かない。履物は全然履いていない。素足で歩いておる。川の流ればヒマラヤの傾斜の所にできておる国ですからあちらこちらにある。しかしその川の流れへ橋を架けるといことは全然ない。向う岸へ渡ろうとするには、こちら側の木の上へ登って身体を揺すぶって、そうして向う側の木へ飛び付いて川を越す。面倒くさい橋など架ける必要はないというわけでありまして。そういうように交通機関というものは全然できていない。今もやはり英国人は入っていないようですが、その当時は全然

英国人は入っていなかった。英国人などが入るとさっそく殺してしまうというふうである。そこで私も仕方ない、乞食坊主のような姿をして履物も何も履かない。草履は持っておるけれども履くわけにいかない。素足でブーツを横断した。所々に部落があるが、その部落といっても一軒か二軒である。そこへ行って宿を借りたいと言ってもなかなか家へ入れて泊めてはくれません。軒下に宿を貸してもらって、野宿をして休ませてもらうというくらいな程度でございます。その生活状態というものも実に低い。とても日本内地では想像できないような所でございます。そういう所を一か月かからないで通り越して、ヒマラヤの本脈へかかった。そこを過ぎてようやくチベットへ入って行ったのでございます。」

（多田等観，前掲書，71頁より引用）

多田等観が1912年インドからチベットへの途中、1カ月近くかけてブータンを経由するが、その行程中においてブータンの経済段階、生活レベル、さらに環境開発状況について直接歩くことでブータンの文明への実感を確かめることになる。彼は、その結果、中央部を南北に縦断するブラック・マウンテン山系（インナー・ヒマラヤ山脈）と東西に横断するグレーター・ヒマラヤ山系が交叉するため、急傾斜溪谷と河川、森林の自然環境を歩くことから猿のように河川、森、さらに急溪谷を通り過ぎることとなり、「野蛮」（＝中世）で且つ「チベットよりさらに獐猛」であると感ずる。また、1912年段階でのブータンは多田等観にとって経済、生活段階について「その生活状態というものも実に低い。とても日本内地では想像もできないような所」と中世にとどまっているブータンを位置づけている。

リンチェン・ドルマが1958年にグライ・ラマの後を追ってインドへ亡命するが、彼女は途中、ブータンを経由路としてブータン国境シャブジェ・タン→プムタン→トンサ→ティムプーへ進むが、ブータンの中世段階、特に荘園を中心にする地方領主＝貴族の活動についてチベットの荘園貴族と重ね合わせにするが、次のように記す。

「ブータンの首都ティムプーに着くまでは、竹でできた小屋に泊るかテント泊でした。けれども、トンサ・ゾンでは、河のうえにせりだした小さなレスト・ハウスに泊ることができました。といってもレスト・ハウス自体、非常に小さかったため、部屋の方は十人の男性に譲り、私はベランダでツェリン・ヤンゾムが送ってくれた新品のベッド・シーツをかぶって寝ました。ベランダのひび割れを通して、たかだか数メートル下で河の水が逆巻き、泡立つ様子がよく見えました。

ブータンは、村落さえ少なく、小道は勾配がはげしく、しばしばヒルが人や動物に吸いつきます。山々は松の木と赤と白のシャクナゲの花におおわれ、ところどころで大きな滝がありました。鹿にもよく出会いました。設備の整ったレスト・ハウスもいくつかありましたし、どこかの荘園につけば、決まってその地の貴族たちが、私たちを厚遇してくれました。小さな峠をいくつも越えていき、最後にタラと呼ばれる孤高をほこる高い峠を越えました。ジャイゴンという名の国境沿いの小さな村で、私たちはブータン人の地方官吏に会い、姪のツェリン・ヤンゾムと娘のツェヤンがレスト・ハウスで私を待ち受けていることを告げられました。」

（リンチェン・ドルマ，前掲書，354頁より引用）

グライ・ラマ14世のインド亡命はブータンを鎖国から開発の近代化へ、さらに立憲君主制への移行を促し、現代のGNH（国民総幸福）（＝環境立国）への転換を促進する遠因となり、中国側（チベット）国境を固く閉ざしてインドへの開国を強める今日のブータンを築く契機となった。

ブータンでは環境開発と近代化を巡って内部対立が2代国王ジグメ・ドルジェ・ワンチュック(1928-1972)と首相の間で深刻となり、内部分裂を深め、終に首相ジグメ・ドルジェへの暗殺となる。リンチェン・ドルマは1958年チベットからブータン、さらにインドへの亡命途中、首相ジグメ・ドルジェと国境シャプジェ・タンで会って助けられ、姪である首相夫人ツェリン・ヤンゾムの世話を受けるが、その首相暗殺について次のように述べる。

「一九六四年、ブータンの首相ジグメ・ドルジェは無惨にも暗殺され、妻のツェリン・ヤンゾムは悲しみのどん底につきおとされました。それでも、彼女はいつも明るい表情を崩さず、チベット難民のために奉仕していました。子供たちに対しては愛情深い教師であり、大人には自活を励まし、賃仕事を与えました。また老人には、編物機で衣服を編んでやりました。ジグメと私にとって、彼女はカルマでつながれた娘のようなものでした。彼女はまだ四十代前半で、誰もが彼女のことを褒めそやしていました。そんな彼女の再婚相手は、サムチョーという一文なしの難民でした。彼は初婚で、ツェリン・ヤンゾムより数歳年上でした。」

(リンチェン・ドルマ、前掲書、367頁より引用)

首相ジグメ・ドルジェと妻ツェリン・ヤンゾムの間に生まれる男の1人ケルデン・ドルジェは国王の娘ツェリン・ペムと結婚する。このことからリンチェン・ドルマはブータン国王と婚姻関係を有することとなる。

3章 ブータンの原像—2 「幸福大国」への歩み

1960年代におけるブータンは2代国王ジグメ・ドルジェ・ワンチュックの下にインドの援助を受けて5カ年計画を策定し、第一次五ヶ年計画を推進して環境開発と近代化を本格的に進め、とりわけ農地改革によって荘園の地主＝小作人制から自作農制へ移行し、さらに義務教育の導入を中心とする教育改革や識字率の上昇と人間の育成＝開発(人的能力)に全力で取り組む。ドルジェ・ワンモはその著『幸福大国ブータン』で2代国王ジグメ・ドルジェを「近代ブータンの父」と位置づけ、ブータンの近代化への離陸(take off)を次のように記す。

「かれ(ウギェン・ワンチュック)の息子ジグメ・ワンチュック〔一九〇五—一九五二〕が跡を継いで第二代国王となり、平穏と隆盛の治世が続き、一九五二年に亡くなると、その息子ジグメ・ドルジェ・ワンチュック〔一九二八—一九七二〕が第三代国王となりました。かれは先見の明があり、ブータンの孤立に終止符を打ち、計画的な開発の道を歩み始め、「近代ブータンの父」とみなされています。かれの治世下で、初めて自動車道路が建設され、わたしたちの生活に大きな変化をもたらされました(第三章参照)。国民は、初めて近代的教育を受けるようになり、インドをはじめとする諸々の国からの技術援助の下で共同事業が始まり、農業、水力発電が開発され、近代的行政システムが整備されました。かれはまた、全国民、官僚、仏教界の代表から構成される国会、省庁、高等裁判所、通貨、銀行および郵便制度を設立しました。一九七一年には、ブータンは国連に加盟しました。ほんの二十年というジグメ・ドルジェ・ワンチュック国王の短い治世下に、ブータンは中世から一気に二十世紀に突入しました。」

(ドルジェ・ワンモ・ワンチュック『幸福大国ブータン』(NHK出版、2009.6.5)、44頁より引用)

以上見たように、ブータンは2代国王の近代化路線とインドの援助の下に「中世から一気に二十世紀に突入し」たのである。したがって、3代国王ジクメ・センゲ・ワンチュックは1974年国王の就任に際し、GNPよりGNH（General National Happiness）への立国方針を宣言する。ここにブータンは『幸福大国』（GNH）として生まれ変わり、新しい^{くにづく}国創りに国際社会の援助と協力を次のように求めた。

「第三代国王は一九七二年に急逝し、その息子ジクメ・センゲ・ワンチュック〔一九五五年生まれ〕が十六歳で第四代国王に就任し、世界最年少の国家元首となりました。二〇〇七年にブータンは王制百年を迎えますが、現国王の治世がその三分の一以上におよぶこととなります。

一九七四年の国王戴冠式の際、世界の視線はブータンに注がれました。初めて国際メディアがブータンに入り、見惚れるほどにハンサムな若い置^{とぎ}く王が統治するお伽の王国として、世界の新聞雑誌に写真入りで紹介されました。戴冠後まもなく、国王はブータンの発展および進歩の指針・尺度は、国民総生産（GNP）ではなく、国民の総幸福であると声明しました。それは革命的な新しい概念で、当初多くの経済・開発の専門家は懐疑的でした。GNH（国民総幸福）はすばらしいキャッチフレーズだが、それを量る尺度、指標はあるのか、あるとすれば何なのか。多くの人々がいぶかりました。三十年後の今日、GNH理念は世界的に注目されるようになり、世界中の経済専門家、計画担当者にとって、一つの新しいモデルとなっています。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、46-47頁より引用）

3代国王ジクメ・センゲ・ワンチュックの妃となったドルジェ・ワンモはGNH（国民総幸福）立国となるブータンの新しい環境開発とブータン国民の幸福（＝充足度）の調和＝均衡を分別のある、或いは身の丈^{たけ}の生活レベルに合ったものと考え、ブータンの産業構造（農業と林業、電力）に基礎づけられる地に足のついた立国構想であると位置づけ、と同時に新しい価値観（国民の精神的豊かさ）を従来のGNP（物の豊かさ）に対比しようとする。

現代のブータンは農業・牧畜・山林の生態的循環構造、すなわち自給自足的経済と国民的宗教（ドゥク派＝ゲルク派）を両輪にする幸福立国（GNH）を国際的な新しい^{くにづく}国創りのモデルとして歩みを続けていることから注目される。ドルジェ・ワンモは九州の1.1倍の大きさのヒマラヤ王国の人口（60万人）と自作農中心の仏教国であるブータンの産業構造（農業・牧畜・山林・電力）について2005年段階の状況を次のように描く。

「ブータンの面積は六五〇〇平方キロメートル——ほぼスイスと同じ——で、人口は約五十五万人〔二〇〇五年の人口調査による〕です。ですから人口密度は一平方キロメートルあたり十二人ときわめて低く、ブータン人は全員土地を所有しています。現在でも農業が主で、全人口の七九パーセントが農業により生計を立てています。しかし、農耕地は全国土の八パーセントしかなく、七二パーセントが森林で、二〇パーセントは万年雪に覆われています。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、22頁より引用）

かくて、ブータンは「全人口の79パーセントが農業により生計を立ててい」て、「農耕地は全国土の8パーセント」にしかすぎない小農＝自作農経営を一般的に形成する。そして、全国土の

72パーセントが「森林」で占められるが、ブータンは森林に家畜(牛(ヤク)、羊、馬、乳牛)が放牧され、牧畜と酪農を営むことで、畑作・稲作を加えて自給自足経済を展開するが、経済段階で云うなら小商品生産の段階であり、農民層分解を伴わない資本主義経済へ移行するかどうかが問われようとしている。こうしたブータンが小商品生産と小農経営を発達させるが、その典形はノブカン村に見出される。すなわち、ノブカン村はブータンの先進農業地帯の中心に位置し、現在、自給自足経済を商品経済へ移行する過程にある。こうした資本の蓄積過程を^{はら}孕みながらドルジェ・ワンモの生まれたノブカン村(プナカ・ゾンの南側)の経済的発展については次のように描かれる。

「父は、家族が所有する馬とラバに米、唐辛子、ザオ(母と祖母が作った煎り米)を背負わせ、チベットのパリで干し魚、塩、茶と交換するために、長い間家をあけることがありました。また、一年に一度、インド西ベンガルのカリンボンに出かけ、布、砂糖、石鹼、食用油、アレカヤシの実(ドマ)を買ってきました。わたしたちは、父の帰りと土産のキャンディーを指折り数えて待ち、新しい服を仕立てるための工場製の布地に眼を瞪りました。これ以外には、わたしたちの生活は自給自足でした。すべて自分たちで作ったもので賄っていました。調理および照明に用いる油は、芥子菜の実を絞ったものですし、バターもチーズも自家製で、お茶にも、今ではその薬効で世界中に知られているオトギリソウ(セントジョンズワート)など、近くに自生している植物の葉を用いていました。どの家でも、薬草による治療の基礎的な心得があり、多くの村には薬草に関する百科事典的知識を持った伝統的な治療師がいました。しかし当然ながら、かれらは手術や抗生物質を必要とする重病から人の命を救うことはできませんでした。近代医学は、まだなかったのです。」

(ドルジェ・ワンモ、前掲書、80-81頁より引用)

ドルジェ・ワンモの父はブータンの女系家族制度のためプナカからノブカン村の母の所に婿入りをし、小農経営の自給自足と小商品生産の市場取引を営むが、このためチベットのパリとインド・カリンボンの交易に従事し、さらに畑作、酪農、牧畜を営む本百姓(小農経営)として活動する。

このノブカン村は小農50軒ほどで村落を形成し、山林、入会地での薬草取り、薪伐り等での共同作業と並んで、畑作での共同体作業、つまり、日本流の「^{ゆい}結」労働組織で相互扶助、集団農作業を伝統的に次のように営んでいる。

「収穫時期は、村人全員が集まり、一軒一軒の畑ごとに順を追って作業します。一つの家の畑での作業が終わると、参加者全員にご馳走がふるまわれます。若者の間にロマンスが芽生えるのも、多くはこうした陽気な雰囲気の中ででした。村で誰かが家を建てるときも、同じく共同作業で、全員が加わりました。この時代には、大勢で一緒に作業して、仕事を軽いものにしていました。」

(ドルジェ・ワンモ、前掲書、80頁より引用)

田植、麦捲き、或いは収穫の農作業は「村人全員が集まり、一軒一軒の畑ごとに順を追って作業をします」という村落共同体の相互扶助労働で行われ、チベットで見られた観音の信仰に基づく親子、つまり大家族主義の「思いやりの心」或いは「慈しみの心」の現れであり、日本流の名

子制度での「結」に相当する集団作業で営まれる。したがって、村落の「結」労働はこれら村人全員の共同体労働で家の新築、村落の宗教祭り、さらに冠婚葬祭を営む。したがって村人は「共同作業で、全員が加わる」のであり、こうした「結」労働は村落の共同体を自給自足的に営む社会的機構、つまり、P.F.ドラッカーの云う「マネジメント」労働となる。それゆえ、村人全員の共同体労働（結）は村落共同体を大家族主義の禁俗的労働、つまり、仏教的職業倫理或いは仏教的勤労観の現われとなる。ドルジェ・ワンモは村人全員の共同作業（結）が冠婚葬祭に応用され、村落の年中行事と宗教祭りを営む社会的機構、つまり、マネジメントとして機能すると次のように描く。

「ノブカン村ののどかな生活は、四季の移り変わりに従って流れ、一年を通じて折々に法要やお祭りがあり、時が刻まれていました。こうした行事は、心の糧であるとともに、娯楽でもあり、村人の中の親密な絆を深めていました。同時に近隣の村々の人たちとの交流の場でもあり、商売と取引が行われ、土地や家畜が売買され、物々交換がなされました。そして当然のことですが、晴れ着に着飾った若者たちには、ロマンスが生まれる絶好の機会でもありました。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、85頁より引用）

村落全員の祭りは(1)ブータン暦11月に行われる家の法事であるチョコク、(2)ブータン暦の1月でのブナカ・ドムチョ、(3)タロ僧院のツェチュ祭、(4)ノブガン村とタロ村の弓對抗試合を中心に行われる。これらの仏教祭りと弓術試合については後に詳しく検討する。

2005年段階でのノブカン村が環境開発と近代化を背景にGNHのモデル村として発展するが、この村では物の豊かさ（年所得額の増大＝余剰生産物の増大）と精神的豊かさ（教育、医療施設の無料、農業技術指導）の均衡は拡大再生産され、「農家の平均年収約5万ヌルタム」に達すると次のように記される。

「現代ノブカン村には教師三名、生徒六十名のコミュニティ・スクールがあります。また村人に初歩的な医療や、妊婦にたいする出産前の健診を施す基礎医療施設があり、助産師の訓練を受けた看護師が一人います。農民にたいして新しい種類の種の入手、家畜の品種改良、新しい農業技術の導入といった面で援助する農畜産出張センターがあります。野菜、果物、余剰米穀などの販売から得られるノブガン村の農家の平均年収は約5万ヌルタムです。週に一回バスによる運搬サービスがあり、こうした農産物をブナカのクルタンの町まで運びます。

村で自動車を持っているのは一人だけで、その他の人は依然として徒歩です。ノブガン村が属するタロ・ゲラク（地区）の六十一歳の首長も、県庁所在地であるブナカとタロの間の険しい坂道を三時間かけてよく歩いています。一九九七年に自動車道路が開通してからは、村人はもはや馬を買ったり育てたりはしなくなり、使われなくなった馬が一頭だけ、村の周りで草を食べています。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、131-132頁より引用）

ヌルタムを日本円で3円の外国為替相場で算出すると、農家の平均年収5万ヌルタムは約15万円となり、1ドル=100円でドル換算すると1500ドルで飢餓線上の1日1ドルをはるかに上廻っ

ている。

山田 勇は「ブータンはなぜ人をひけつけるのか」(科学(岩波書店)2011年81巻6月号)の中でブータンのGNH(国民総幸福)の草の根を自給自足経済、つまり村落共同体での自立的な生活(小農経営と小商品生産)に次のように求めている。

「ブータンは世界一満足度の高い人々が住む国だといわれている。決して金持国でもなく、資源にめぐまれていることもなく、かつ、熱帯の楽園のようなところでもない。ほとんどの人々が急斜面か、谷間の狭い土地に畑をつくり、生活するに足るだけのキチキチの生活をしている。毎日の畑への往復だけでも大変な労力であるが、地元の人々は、うしろ手に手をくんで、ヒョコヒョコといとも気軽に登ってくる。若い女性達は、畑を耕したり、バターやチーズをつくったりしている。老若男女あわせて、自分達の生活すべてを自分達の力でまかなっている、という。まさに地に足のついた実感が、満足度の高さを示すのであろう。」

(山田 勇, 科学81巻6号, 579頁より引用)

さらに、山田 勇は村落共同体での小農経営を担う「老若男女あわせて自分達の生活すべてを自分達の力でまかなう」「地に足のついた実感」を「満足度の高さを示す」として幸福の尺度にするが、こうした小農経営の幸福モデルを東南アジアに共通するものとして位置づけ、とりわけ日本の原像として次のように描く。

「このような生活態度は、ふりかえてみると、どこの国でもあったはずだ。私のよくゆく東南アジアでは、ほんの数十年前まで同じような充足感を感じる日常的生活があった。また、日本でも、私の子供の頃には、京都のすぐ周辺で、しっかりと地に足をつけて農業や林業にたずさわる人々がいた。

それがいつの間になくなってしまったのであろうか。戦後の復興をへて、豊かになった日本は、金がすべてを支配するかのようなバブルがやってきて、やがて、それがはじける。そして、今はグローバル化の中で、皆がアブアブしている状態である。外圧の大きさに圧倒され、これまでせっかく築いてきた日本独自の良さを失おうとしている。ひなびた農村は過疎となり、老人のみが寂しく暮らす世界になった。古き良き日本の姿は消えつつあり、外に向かって、かつての面影を求めている。」

(山田 勇, 前掲書, 579頁より引用)

日本の原像は現在においてGNP(国民総生産=物の豊かさ)の為にGNH(幸福大国=精神の豊かさ)を失い、農村の過疎化と農業人口の5パーセントへの減少の中に伝統的精神、小農、そして村落の大家族主義による人間の鎖を断ち切ってその姿を消しつつあるが、山田勇はこうした日本の原像モデルを東南アジア、とりわけブータンに求めようとする。

日本の原像が東南アジアに共通する騎馬民族の征服王朝の一角を形成するが、この点についてはチベット帝国を支えたチベット遊牧騎馬民族の騎手兵の役割を前に述べた。次に、ブータンも同様に東南アジアに共通な遊牧騎馬民族である点を次に取りあげ、明らかにしたい。

4章 ブータンの原像—3 遊牧騎馬民族の系譜

ブータンが遊牧騎馬民族の系譜を引くのはチベットの影響に深く懸り、殊にチベット帝国の一部として、或いはチベットからの移民を中心としての国創りを進めた結果に由ると考える。こうした歴史を背景にして遊牧騎馬民族の中核を成す騎手兵は弓矢、槍をその武器とすることから弓矢の射手を極めるのに努力する。このため、弓術競技がブータンの国民的競技（スポーツ）として位置づけられることになるが、この点について、『地球の歩き方・ブータン』（2009-10年版）ではブータンでの「弓は男のたしなみ」として次のように紹介している。

「弓は男のたしなみ

ブータンは伝統的なスポーツが特別扱いはされなく、何気なく人々の間に息づいている国である。特に国技でもあるブータン式の弓（ダツェ）は競技人口も多く、大人から子供までが楽しむ。弓は古来ブータン男性の「たしなみ」であり、ほとんどの村に射場がある。ティンプーで最も有名なのはチャンリミタン競技場隣の射場で、週末ともなればよく試合が行なわれている。また、平地の少ない村でも道路をまたいだり、傾斜地を利用したりしてなんとか場所を確保しているのがおもしろい。

試合は6～10人を2組に分け、130mほど離れたお互いの陣地に置かれた的を狙う形式で行なわれる。公式試合の場合はその的の周囲をシリカチュと呼ばれる針葉樹の枝で囲む。弓は2本の竹の棒を繋ぎ合わせて作ったものが伝統的であるが、現在は洋弓を使用する。

矢は1人2回射ることができ、的の中央に当たれば3点、それ以外の部分なら1点が与えられ、25点先取した組が勝つ。的に矢が当たる度に、味方のチームは歓声を上げ、勝利の歌と踊りをひとしきり披露する。射手は的の後ろにかけていた絹のスカーフを受け取り、名誉の印として帯にはさむ。1試合に数日を費やすことも多い。場合によっては、スポンサー付きの冠大会になることもある。

用具は違えどルールは同じ

弓を本格的に楽しむには装備に金がかかるし腕力も必要だ。子供たちはブータン式ダーツ（クル）で遊ぶ。遊び方も弓とよく似ていて、数人で行なう個人競技の性格が強い。弓と違う点は的の距離が20mくらいとやや近いことだ。矢は木の軸に釘のような鉄の芯をつけ、羽で安定させたものだ。それ以外のルールは弓とほぼ同じだ。」（『地球の歩き方・ブータン』（2009-2010年版）、60頁より引用）

ブータンの弓術は「古来ブータン男性の「たしなみ」であり、ほとんどの村に射場がある」ほどの国技となっている。チベットでは1月の大祈願祭における弓術競技で2チームで射手を競い、ダライ・ラマ治世の国民的祭例となっていた点について既に述べたところである。ブータンでも国教であるドゥク派（＝チベットのカギュ派）のツェチュ祭では最終日に村と村との弓術競技大会として争うことになるが、この弓術競技で140メートル先の目標を当てると、ドルジェ・ワンモは次のように述べる。

「しかし、（ツェチュ祭の）楽しみはまだ数日続きます。直後にノブガン村とタロ村の毎年の弓〔ダツェ〕の対抗試合が始まり、陽気な雰囲気の中にも真剣に競われます。この試合に勝った村にとっては、その年は吉年であり、負けた村にとっては凶年と信じられていますから、真剣にならざるを得ません。ノブガンとタロで一試合ずつ行われ、おのおの一勝一敗の場合には、選手たちの合意により、どちらかの村で決勝戦が行われます。両チー

ムともに女性応援団が付き、かのじょらが踊り、歌って試合を盛り上げます。かのじょたちの目的は、相手チームの射手を皮肉ったり、からかったり、あるいは単に笑わせたりして集中できないようにすることです。わたしの父は弓の名手で、よく的を射ました。わたしたちは、射手の技、試合の展開、そして試合の雰囲気を楽しみ上げるからかいや冗談を楽しみました。

わたしは、六歳のとき、つまり一九六一年の試合を鮮明に覚えています。わたしは目を閉じ、父の放つ矢が一四〇メートル先の的の中心点に当たりますようにと祈りました。矢はみごとに的中し、これが決勝点となってノブガン村が勝ちました。父は何本もの絹のスカーフを帯に差し込まれ、戦勝戦士のヘルメットを被らされ、白馬に乗せられて、弓の試合場の周りを英雄のように行進しました。」

(ドルジェ・ワンモ、前掲書、96-97頁より引用)

これら弓術は遊牧騎馬民族の騎手兵とその貴族の武術となり、国王の「たしなみ」でもあった。ディンブーのチャンリミタン競技場は国王の弓道場として有名である。父ウゲン・ドルジェが1961年ブナカ・ツェチュ祭の弓術競技会で140メートルの^{まといぬ}的を射抜いて勝利に導いた点については前に述べたところである。

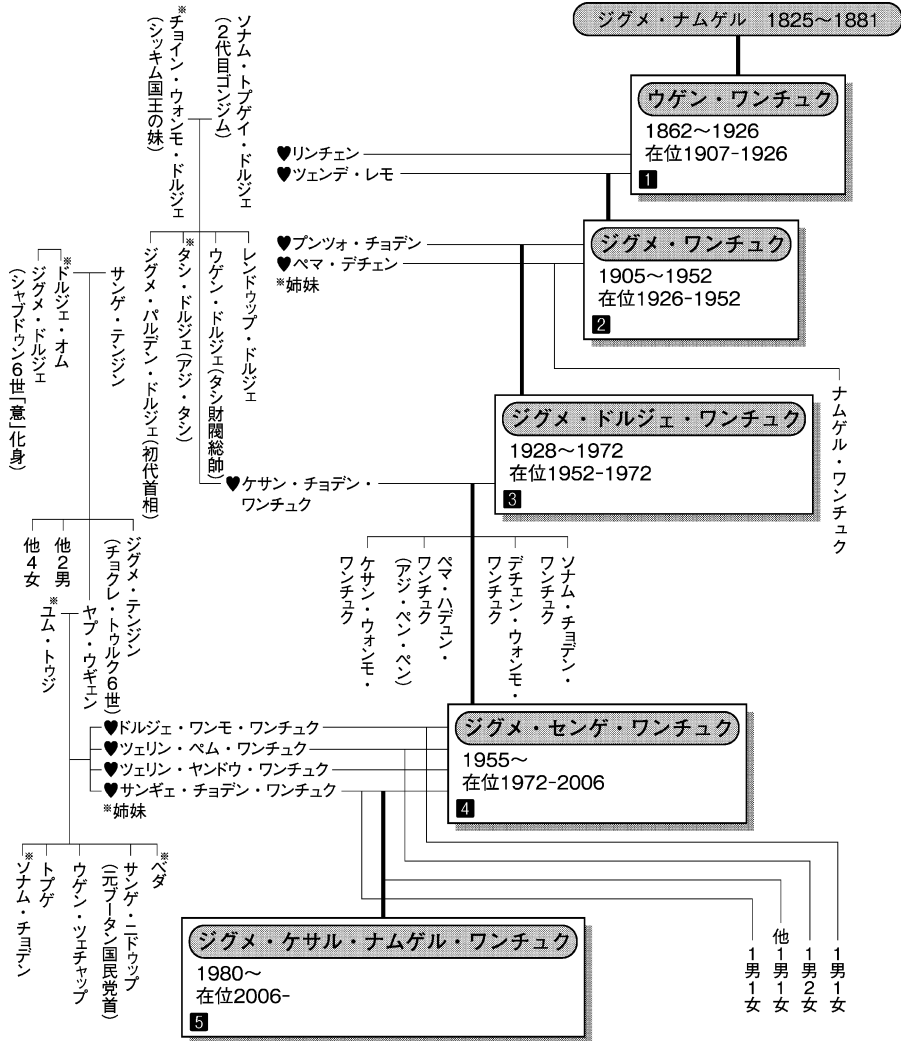
5章 ブータンの原像—4 王室の出自とジクメ家、ドルジェ家

ブータン国王は初代国王ウゲン・ワンチュクの出身家ワンチュクを世襲する系譜から成り、2006年5代国王ジクメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュクでほぼ100年を経るが、しかし2008年の憲法制定によって立憲君主制へ転換する。これまでの5代に亘るブータン国王の歴史は次の図-6「ブータン国王の家系図」に要約される。

この図-6から窺えるように国王はワンチュク家によって世襲化され、一世紀を経過している。そして、ドルジェ・ワンモは4代国王ジクメ・シング・ワンチュクの第一妃となるが、父ウゲン・ドルジェの出身家ドルジェ家から嫁いでいる。このワンチュク家とドルジェ家の間で婚姻が結ばれ、ワンチュク家の王権に正統性を与え、国王の地位を不動のものにするが、ここに4代国王の正統性は歴史上初めて確立することになる。ワンチュク家とドルジェ家との対立と和解がブータン仏教の特異性に由来し、この延長線上にブータンの現代史の歩みとなる。国王の下でブータンの歴史は主に2人の首相を中心に築かれることとなる。1人はジクメ・バルデン・ドルジェ(1914-1964年)であり、もう1人は5代国王ジクメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュクの下で2008年3月2日の総選挙で圧勝したブータン調和党(DPT: Druk Phuensum Tshogpa)の党首で同時に議院制内閣を率いるジクメ・イエゼル・ティンレイである。この2人の首相を軸にするブータンの現代史は次の表-1に要約される。

この表-1に示されているように、ジクメ・バルデン・ドルジェが首相として果たした役割は大きく、このため3代国王ジクメ・ドルジェ・ワンチュクと深交を深め、1964年に暗殺される。既に述べたように、チベットのリンチェン・ドルマの姪ツェリン・ヤンゾムがブータン首相ジクメ・ドルジェと結婚したことから、インドへの亡命の途中、ブータンにたどり着くや、リンチェン・

図-6 「ブータン国王の家系図」



ドルマはブータン首相ジグメ・ドルマに救いの手を求めたのであった。

ここではブータンの現代史を特徴づけるもう一つの問題、つまり、ワンチュク家とドルマ家との対立と和解をブータン仏教と絡めながら以下探究する。

結論を言うならば、ドルジェ・ワンモはワンチュク家とドルジェ家との対立を解消して和解すべく4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュクとブータン仏教ドゥク派の儀式にのっとり結婚する。ドルジェ・ワンモはドルジェ家とワンチュク家の対立を初代国王ウゲン・ワンチュクのブータン統一過程に遡って明らかにする。すなわち、ブータン仏教の求める正統国王の資格は17世紀にブータン王朝を成立させたシャブドゥン・ンガワン・ナムギェルの化身系譜(身・口・意の3つ

表-1 「2人の首相とブータンの現代史」

	できごと	その時代の代表的な政治家
1885	チャンリミタンの戦い	ゴンジム・ウゲン・ドルジェ
1907	初代国王ウゲン・ワンチュク戴冠 龍王の王国の建設者	?~1916 ドゥンカル・チョジェの家系に生まれ、国王側近としてチャンリミタンの戦いを終結させる。王朝成立後はゴンジム(侍従長)として権勢を誇った。財閥としても成功したハの名門ドルジェ家の始祖。
1910	英国領インドとブナカ条約締結	
1914	46人の少年がシッキムに留学	
1927	2代国王ジグメ・ワンチュク戴冠 王権による統治を完成	
1928	トンサ・スルバン宮で3代国王誕生	
1949	インド・ブータン友好条約締結	
1952	3代国王ジグメ・ドルジェ・ワンチュク戴冠 近代国家の父	ジグメ・バルデン・ドルジェ 1914~1964 ブータン初の首相として、3代国王に仕えた。コロンボ計画や近代化への改革などに尽力。ブンツォリンで暗殺された。
1955	ティンブーで4代国王誕生	
1959	ダライ・ラマのインド亡命	
1964	ジグメ・バルデン・ドルジェ首相暗殺	
1970	4代国王ロンドン留学から帰国	
1971	国連加盟	
1972	4代国王即位	
1974	4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュク戴冠 世界最年少の君主	ナムゲル・ワンチュク 1943~ 3代国王の弟君として国連加盟のためにニューヨークを訪問し、世界にブータンの存在を知らしめた。3代国王亡き後は、若くして即位した4代国王の父代わりとなって支えた。
1979	GNH宣言	
1980	5代国王誕生	
1988	4代国王成婚	
1999	国王在位25周年	
2003	南部ゲリラ掃討作戦	
2004	5代国王トンサ・ベンロブに就任	
2005	4代国王譲位宣言	
2006	5代国王即位	
2007	王朝成立100周年	
2008	5代国王ジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク戴冠 民主化時代の国王 全国統一総選挙 民主制議会誕生 初の民主制首相就任 憲法制定	ジグメ・イエゼル・ティンレイ 1952~ 4代国王の学友から側近に。外務大臣のときにGNHの概念を海外に発信。初の総選挙で圧勝したブータン調和党党首であり現首相。

(『地球の歩き方・ブータン』(2009-2010年版), 25頁より作成)

の系譜），とりわけ，「意」の化身系譜を正統王家の条件としている。シャブドゥンの「意」（＝正統王位）の化身系譜がドルジェ家に享受されていることについては次のように記される。

「ブータンは十七世紀にシャブドゥン・ンガワン・ナムギェルにより統一され、行政機構が整備されました。このブータン建国の父は、その在世中ブータンの最高権威でした。かれの死後、俗権を担当するデシ〔摂政〕と、仏教界の長ジェ・ケンポ〔大僧正〕の二頭体制が続きました。さらには、シャブドゥンの身・口・意の三つの化身系譜（序章傍注 21 参照）があり、それが精神的権威であり、このうち、「意」の化身にブータンの最高権力を行使する権威が認められていました。一九〇七年に王制が敷かれ、二頭体制は終わりました。しかし、シャブドゥンの身・口・意の三つの化身系譜は存続し、化身は民衆からの非常な尊崇を享受し続けました。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，70 頁より引用）

シャブドゥン・ンガワン・ナムギェルは「ブータン建国」の父と言われ、政教一致制、つまり、チベットのダライ・ラマの化身系譜をチベットの法王にする化身系譜をブータンに導入し、ブータン国王の正統な資格と決める。ブータン仏教と国民はこの化身系譜を大乘仏教の密教として位置づけ、カルマ（業）と転生の宗教倫理の現れと見做す。そして、シャブドゥンの死後、ブータンは俗権（デシ・摂政）と宗権（ジェ・ケンポ・大僧正）の二頭体制の下に統治される。

俗権はシャブドゥンの「口」を体現する。すなわち、シャブドゥンの「意」と「口」がドルジェ家の化身系譜として集約される。つまり、「意」の化身系譜は「わたしの父」（ウゲン・ドルジェ）の叔父（母の弟）ジクメ・ドルジェ（1905-1931）に、他方、「口」の化身は父の兄であるジクメ・テンジン（1919-1949）に認定され、王位継承権者と見做されるが、いずれもワンチュク家一族によって暗殺され、短命に終る。こうしたシャブドゥンの化身系譜を有するドルジェ家はワンチュク家の武力と陰謀に翻弄されるが、「意」の化身者であるジクメ・ドルジェの 1931 年 11 月における暗殺について次のように記される。

「二十世紀の初期に、この化身のうち二人がわたしの父の家系に生まれました。父の叔父（母の弟）が、ノブガン村から一時間ほど上ったところにあるタロ僧院の座主であり、シャブドゥンの第六代「意」の化身と認定されたジクメ・ドルジェ（一九〇五—一九三一）で、父の兄が、パロのサンチョコル・ゾンの座主であり、シャブドゥンの第六代「口」の化身と認定されたジクメ・テンジン（一九一九—一九四九）です。父は子どものころ、タロ僧院にいる叔父のシャブドゥン・ジクメ・ドルジェの許によく行きました。

第二代国王の治世下、一九三一年十一月に、父の叔父シャブドゥン・ジクメ・ドルジェはタロ僧院で真夜中に絹のスカーフを喉に押し込まれ、窒息死しました。まだ二十六歳の若さでした。かれは世俗権欲がまったくなく、宗教心の篤い人でしたが、国王の有力な側近の幾人かが、かれが国王の権威を脅かしかねないと国王の告げ口し、国王を惑わしました。」

（ドルジェ・ワンモ，前掲書，70-71 頁より引用）

他方、「口」の化身系譜ジクメ・テンジンは 2 代ジクメ・ワンチュク「国王の従兄弟」（パロ・ペンロブ（パロ地方長官））によって暗殺される。ドルジェ・ワンモは父の兄ジクメ・テンジンの暗殺後、インドへ亡命する父の家族とその後 1947 年ブータンへの帰国を許可される経過を次のよ

うに描く。

「当然のことながら、父の家族はこの出来事に深く動揺しました。さらには、父の兄であるシャブドゥンの第六代「口」の化身、ジクメ・テンジン^{テンジン}の命を案じました。ことに、国王の従兄弟で、西ブータンの支配者であるパロ・ペンロブを恐れました。かれは、タロでの暗殺事件の首謀者であるといわれ、わたしの父の家族の地位を快く思っていませんでした。かれはあらゆる機会を利用して嫌がらせをし、パロにあるクंगा・チョリンという父の家族のすばらしい屋敷を安く手に入れようとしていました。父の家族は、幼い化身に危害がおよぶのを恐れ、土地も財産も捨てて、パロを逃れました。父はそのとき八歳でした。それからの十六年間、父の家族は自ら選んだ亡命生活で、チベット、ブータンのハ谷、シッキムのガントク、インドのカリンポンと、各地を転々とさまよひ、非常な辛苦を嘗めました。

一九四七年になり、国王から父の家族に、ブータンに戻るように、そして土地は返却する、との通知が届きました。二十二歳になっていた父は、ブータンに戻り、プムタンのワンディ・チョリン・ゾンで国王に仕えることになりました。」

(ドルジェ・ワルモ、前掲書、71-72頁より引用)

ドルジェ家はシャブドゥンの化身系譜で、且つブータンの正統国王の資格を有する名家であり、ワンチュク家を凌ぐほどである。しかし、ブータンの現代史を正常に戻すことが国民の願望であり、また、ワンチュク家による過去の誤り^{つぐな}を償うため、4代国王ジクメ・シンゲ・ワンチュクは1979年ウゲン・ドルジェの娘4人(二女ドルジェ・ワンモ、三女ツェリン・ベム、四女ツェリン・ヤンドン、五女サンゲイ・チョデン)と結婚する。ドルジェ家はこの結婚で生まれた三女の嫡子を五代国王ジクメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュクにすることでシャブドゥンの化身系譜を実現し、「父方の祖父の祈願の成就」となった。ドルジェ・ワンモは1988年正式の結婚を挙げる前に、和解としてタロ僧院座主^{ぎす}(ジクメ・ドルジェ)の守護神タロ・ギェブの宥しを受けるが、この点について次のように記す。

「公式結婚式のすぐ後に、国王は歴史の過ちを償う勇敢な決断をしました。一九三一年にタロで私の父方の大叔父シャブドゥン・ジクメ・ドルジェが悲劇的に暗殺されてから、ブータン国王がタロに赴いたことはありませんでした。一九八八年に国王はこのタブーを破る時期が到来したと判断しました。かれの子どもは、暗殺されたシャブドゥンの血を引く子孫であるわけで、国王はタロ・ギェブとよばれるタロの強力な守護神の許しを乞い、和解を誓う決断をしました。僧侶や大臣たちは、このタブーを破ると祟りがあるのではないかと危惧しました。この重大なタロ行きを前に、わたしも恐怖におののきました。タロの守護神の乗り物は象なので、わたしたちは宝石をちりばめた金属製の立派な象を一對用意しました。これは国王からの奉納品として、わたしたちが赴く一日前にタロに届けられました。」

(ドルジェ・ワンモ、前掲書、125頁より引用)

1988年4代国王はタロ僧院守護神廟に入り、「タロの王様」(=タロ・ギェブ)と向き合い、和解の儀式(サイコロ振り吉数18)で許され、さらに、シャブドゥン・ジクメ・ドルジェ金像を据えつけたと次のように描かれる。

「タロ僧院に着いてすぐに、国王はタロ・ギェブ廟の中に一時間ほど籠りましたが、わたしたちはその外で待機しました。

どの守護神にも、吉とされる数字があり、タロ・ギェブの場合は18です。守護神廟にお参りするときは、さいころを三度振り、出た目を合計した数字により吉凶を占うのが習わしです。国王がタロでさいころを振ったとき、出た目は最高のものでした。わたしたちはそれがブータン国王と「タロの王様」の和解の印であり、50年以上に渡った不和がようやく終わったと解釈しました。少し後になって、国王が特注した1メートル近くもあるシャブドゥン・ジクメ・ドルジェの金像が、ディシプーからタロにお練り行列で運ばれましたが、沿道にはその加護を求める人が並びました。ブータン史の、そしてわたしの家族の悲しい一頁は、こうして幸せに閉じられました。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、126-127頁より引用）

6章 ブータンの原像—5 農民とブータン仏教＝ドゥク派信仰

ブータン仏教は村落と農家を一体にして、さらに両者の絆を強めるべく機能し、幸福大国GNHの精神的豊かさを表わす草の根となる。それゆえ、ブータン仏教の草の根を見つけるために、村落の僧院・寺院がその単位となるが、これら僧院・寺院はブータン全土で2000を超え、ブータンを網の目の如く結びつけ、ブータンの精神基盤となっている。ドルジェ・ワンモはブータン仏教（ドゥク派）が国教として村落の僧院・寺院を通して農民に信仰されていると次のように描く。

「ブータン人は自分たちの国をドゥク・ユルとよんでいます。言い伝えによれば、チベットでツァンパ・ギャレ・エシェ・ドルジェ（一六〇一—一七〇一）という高僧が新しい僧院の落慶法要を営んでいたときに、大きな雷が鳴りました。雷は、雷龍の叫び声と信じられており、これは仏の真実の教えが広く流布する兆しに違いないとされました。それで、僧院はドゥク（雷龍）と名づけられ、その宗派はドゥク派と命名されました。このチベット系大乘仏教の宗派が十七世紀にブータンの国教となりますが、それ以後ブータンはドゥク・ユル、すなわち「ドゥク派の国」あるいは「雷龍の国」とよばれるようになりました。

ブータンのあちこちに散在するお寺とお堂——その数は二千を超えます——、そして到るところで目にするえび茶色の衣を纏った僧侶、それはブータン人の生活のあらゆる面において、仏教がいかに重要な役割を果たしているかを象徴しています。ブータンの各県には、ゾンとよばれる大きな城塞がありますが、それは国直轄の地方僧院でもあり、中にはいくつものお堂があります。またどの村にもお寺があり、そこが村の生活の中心です。ブータンのもう一つの宗教はヒンドゥー教ですが、これはチェトリ、ライ、タマン、グルンといったさまざまなカーストに属するネパール系住民の宗教です。かれらはロツァンパ〔南部国境地帯の住民〕と総称され、南ブータンに住んでいます。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、20-21頁より引用）

上記されているように、国教としてブータン仏教は社会的機構として僧院・寺院を国の直轄下に置き、僧院の規律・戒律で村落と農民の功德＝善行を導き、開花された人間へ精神的に育成しようとする。この開花された人間の精神的育成にあたる僧院・寺院は村落の僧院・寺院としても機能し、さらに仏教の年中行事、或いは宗教祭、農家の仏間儀式を主催することで通年的に農民、村落の観音信仰を広め、村人の心に深く入り込む。

農家の仏間儀式は国直轄の村落僧院・寺院のドゥク派（＝カギユ派）の営なむところとなり、法事チョコクを中心に実施される。ドルジェ・ワンモはノブガン村の実家（母方エム・トウジ）で

行われるチョコを村民全員の参加する大家族主義の「結」(相互扶助)と位置づける。この法事チョコは(1)村民全員で作られる供物＝トルマ作り, (2)仏壇の捧げ物(7種類), (3)仏間を飾るタンカ(掛け軸式仏画), (4)仏壇と天井のリボンと房の飾り付け等でドゥック派(＝カギユ派)の神仏である(1)観音菩薩(チェンレージ), (2)長寿と繁栄の女神ツェリンマ, (3)ブータン守護神エシェ・ゴンポとバルデン・ラモを祭る農家の法事となるが, 日本で云うお盆, 彼岸儀式にあたる。ドルジェ・ワンモはノブカン村の実家で営まれるチョコ儀式の村落を挙げての大家族主義の祭について次のように述べる。

「チョコは毎年ブータン暦の十一月に行われますが, 西暦では十一月か十二月にあたります。お坊さん三名が二日前に家に来て, 法要用のトルマを作ります。トルマは供物ですが, 米粉あるいは小麦粉とバターを混ぜて粘土のようにしたものに彩色し, 非常に手の込んだ美しい形に仕上げられます。トルマは, 慈悲の菩薩である観音(ゾンカ語でチェンレージ, サンスクリット語でアヴァローキテーシュヴァラ), 長寿と繁栄の女神であるツェリンマ, ブータンの力強い守護神であるエシェ・ゴンポとバルデン・ラモ(サンスクリット語では, マハーカーラとマハーカーリー)に捧げられます。トルマが並べられる仏壇には, いつも七つの閻伽水の器が置いてあります。この七つの閻伽水は, ブータンの仏教徒の家の仏壇には必ずあるもので, それは食べ物, 飲み物, 水, 花, 線香, 光, 香水という神仏への毎日の七つの捧げ物を象徴しています。お坊さんはまた, 法要用の特別な食べ物の捧げ物を用意し, お祈りのときに灯される数百ものバターランプ〔真鍮の器に, 綿で作った芯を差し, 溶かしたバターを流し込んだもの〕を用意します。また仏間の壁一面に色彩鮮やかなタンカ(主要な尊格や高僧を描いた布を緞子で表装した掛け軸形式の仏画)が掛けられ, 仏壇の上には色とりどりの絹のリボンと房が十字に交差して張り巡らされ, 華やいだ雰囲気を作り出します。」

(ドルジェ・ワンモ, 前掲書, 80-81頁より引用)

実家で2日間営まれる法事チョコは毎年一年間の神仏のご加護を感謝し, 来る年の家族の幸せを祈る目的で行われ, ノブカン村在住の63代ジェ・ケンポ(大僧正)ティンレ・ルンドゥップを専任僧侶として依頼する。2日間のうち1日目はジェ・ケンポ(大僧正)のブータン仏教ドゥック派(カギユ派)の金剛乘密教の經典読経と金剛杵ドルジェの拍子とで儀式を進め, 観音信仰を家族全員の胸に刻み, 開花された人間に導く。2日目は「豊かな収穫と繁栄を祝う」目的で村の全員と遠縁にあたる人々を「まる一日家に招き」, 特別料理をふるまうのである。この2日間のチョコ祭は大乗仏教, とりわけ金剛乘儀式(ドゥック派)を次のように村の大家族主義的祭例として営む。

「大僧正はチョコの前日に家に来て, 仏間に泊まりますが, わたしたちは, 家の前で松柏類の葉と小枝を焚いてお迎えます。この香りのよい煙は, 貴賓への伝統的な敬いの印です。儀式は, 翌朝三時に始まります。大僧正は仏壇の前で三拝し, それから高座に座ります。すると九名のお坊さんが仏壇の両側の床に向かい合って一列に座ります。大僧正の前には, 彫刻が施された低いテーブルが置かれ, その上に悟りをもたらす清浄と智慧を象徴するドルジェ(金剛杵), 悪霊を浄め調伏するプルパ(儀礼用の楔), ダマル(小さな両面のでんでん太鼓), 鈴など, 法要に必要なさまざまな法具が置かれます。大きな音で吹き鳴らされる法螺貝とシンバル, そして鈴およびダマルの音とリズムが読経の拍子を取り, 催眠術のような効果を発揮します。わたしたちは仏壇の前に座り, 時が経つのも忘れ, 何時間にも渡って読経に聴き入ります。チョコは神仏に家族全員の祝福とご加護を祈るもので

すから、このときには全家族がそろいます。読経の間には、塩の入ったバター茶、甘いサフラン・ライス、お粥などがふるまわれます。

チョコの二日目〔最終日〕には、ノブガン村の全員と、遠縁にあたる人たちをまる一日家に招きます。大僧正だけには、仏間でお盆に給仕しますが、その他の人は全員、昼食も夕食も家の外の草地の上で食べます。チョコは豊かな収穫と繁栄を祝うものですから、食事は重要な要素です。一年かけて貯えられてきた特別な品々が、このときにふるまわれます。米、生姜、山椒、豚の血が入ったソーセージ、おいしい豚の^{ろっこつ}肋骨肉、ばりばりした卵焼き、生姜と新鮮なチーズで和えたきゅうりのサラダ（ホゲー）、そしてブータンの国民食エマ・ダツィ（唐辛子をチーズで煮込んだもの）などです。畑で採れる野菜——大根、かぶ、かぼちゃ、芥子菜、なす、春たまねぎ——は、格別な味を付けるために、髄のある骨と一緒に煮込みます。わたしの好物は、祖母が得意としていた唐辛子の種と少しのチーズで味付けした骨付き肉のシチューです。豚肉には厚い脂身があるので、すべてが油に浮いていますが、脂が少ししかないのはケチだと見なされていました。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、88-89頁より引用）

チョコ祭の特別料理として一頭の豚が屠殺され、ソーセージ、豚の^{ろっこつ}肋骨肉、骨付き肉のシチュー等の素材となるが、この豚の屠殺は仏教の殺生禁止に反する行為としてブータン人を苦しめる原因となっている。チベット仏教を特徴づける^{アニミズム}精霊主義を信仰するボン教がブータン仏教にも持ち込まれるが、ブータン人は動物、家畜、さらに植物を含め生きる物への殺生を全面的に禁止し、或いは避けることに努める。ドルジェ・ワンモはチョコ祭に豚を屠殺する際の甲高い悲鳴に次のように耳を塞いだ。

「わたしの家族は、プナカ・ゾンに通じる小道の下手に畑を持っており、そこに豚小屋がありました。区画は村のはずれでしたが、村の中心から歩いて数分のところでした。ノブガン村のどの家もそうしていたように、毎年チョコが近づくと、お客をもてなすためにそこに飼っている豚を一頭つぶしました。わたしは子どものときから、これが怖くてたまりませんでした。豚はこん棒で打ち殺されるのですが、そのときにあげる甲高い悲鳴が聞こえないように、森の中に走り込んで耳を塞いでいました。ですからわたしは、一九六〇年代の終わりごろにノブガン村に住み着き、この殺生を禁じたジェ・ケンポ〔大僧正〕・ティンレ・ルンドゥップ聖人にとても感謝しています。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、132-133頁より引用）

チョコ祭は2日目の特別料理の後、村人全員の歌と踊りを行って公式儀式を終え、仏間に戻って最後に家族全員で大僧正から読経とご加護を受け、次年順繰りに隣家に招かれる楽しみを胸に秘めて終了する。このようにチョコ祭は村の中での順繰りの持ち廻りで村の年中行事化し、この儀式を通して観音信仰を刻み、開花した人間を育成する精神的役割を果たす。ドルジェ・ワンモは実家の落慶法要と法事チョコとで村落共同体と家族の絆を強め、ブータン独自の文化＝ブータン仏教に基く幸福大国GNHへ導き、開花された人間を^{はぐく}育むと次のように述べる。

「わたしは仏間から聞こえてくる大きな読経の声で三時に目が覚めました。ベダの家の落慶法要の始まりです。仏間は、トルマ〔彩色した供物〕、タンカ〔軸装仏画〕そして何百というバターランプで美しく飾り立てられていました。仏間での読経と法要の後、家族の者と僧侶が家の周りを回り、家族の幸せと幸運を祈りました。ノブガ

ン村の全員が前の日から来て、祭りの準備、テント張り、家の飾り、来賓の接待など姉の手助けをしていました。

母を先導役にして、村の女衆おんなが歌い踊り出したとき、わたしは一九六〇年代に逆戻りした錯覚にとらわれました。子どものころから慣れ親しんだたくさんの人たちの顔がありました。この村人たちは今でも土地を耕して生計を立て、隣近所にいつでも手を差し伸べ、毎年変わることなく心を込めてチョコを営み、伝統的な歌と儀式を保っています。かれらは近代技術がもたらした快適さと利便性をすばやく受容すると同時に、それに適応しました。しかし、質素で牧歌的な村の生活を楽しむことを忘れず、それを果敢に生きています。

精神的価値を深く重んじ、自然とその諸々の要素との密接な交感関係と、家族と村落共同体との強い絆を保つというブータン独自の文化が保たれ、生き延びていくのは、この人たち、そしてブータン全土の農村部に住んでいる人たちのおかげです。」

(ドルジェ・ワンモ、前掲書、134-135頁より引用)

以上のようにチョコ、或いは落慶法要のブータン仏教は「家族と村落共同体との強い絆を保つ」社会的機構として機能し、P. F. ドラッカの云うマネジメント論の役割を果たすのである。と同時に、ブータン仏教は「ブータン全土の農村部に住んでいる人たち」を开花した人間に育くみ、観音信仰を人間の善＝道徳として実践する智慧の修得へ導く。すなわち、ブータン仏教を精神的支柱にする「幸福大国」は一方で「近代技術がもたらす快適さと利便性」を受け入れて所得の増大に努めるGNP(生産性向上)の推進と、他方で「心を込めてチョコを営み、伝統的な歌と儀式を保つ」ている精神的豊かさ(GNH)の充足を深めることとの、両輪の均衡(バランスオブパワー)の上に達成され、まさに「ブータン独自の文化」として現れる。

ブータン仏教が国直轄の下に社会的機構としてブータン人を开花した人間へ育くむ道德教育の役割を果たすのは日常生活での、とりわけ、家族の共有する仏間での朝・夕における読経と仏壇の7つの闕伽水あか(食べ物、飲み物、水、花、線香、光、香水)の供用儀式によってである。ブータン人にとって仏間と仏壇は日常生活の中心に位置づけられ、ブータン仏教の雰囲気の中で家族を観音信仰に導き、1人1人を开花した人間に育くむ宗教道場として機能する。仏間はブータン仏教のさまざまな神仏をタンカ、仏像、師祖像で飾られるが、この点について次のように描かれる。

「村全体が参加して儀式・法要が行われる寺院には、当然多くの仏像や仏典が安置されていますが、在家信者の家でもまず間違いなく仏間があり、釈迦牟尼仏、グル・リンポチェ、観音菩薩、文殊菩薩、金剛手菩薩、持金剛菩薩、観音菩薩と同じく慈悲の女神であるターラー尊、苦行詩人ミラ・レパ〔一〇四〇―一一二三〕、ブータンの統一者シャブドゥン・ンガワン・ナムギェルといった仏像や師祖像が祀ってあります。慎ましやかな家では、像の代わりに、ポスターやカレンダーが貼ってあり、これは近年ますます多くなりつつあります。」

(ドルジェ・ワンモ、前掲書、238頁より引用)

在家信者の仏間は釈迦牟尼仏、グル・リンポチェ、観音菩薩、文殊菩薩、金剛手菩薩、持金剛菩薩、聖観音菩薩、ターラー尊、ミラ・レーバ、シャブドゥン・ンガワン・ナムギェル像で飾られ、僧院・寺院の延長線の空間を再現し、まさに、家族の一人一人を开花した人間に悟らせ、僧院・寺院の戒律を家族の戒律に重ね合わせるところとなる。仏間には仏壇が設けられ、ここでは読経

と^あ伽水の供用儀式を行なうが、家族、さらに村落の守護神を崇拜し読経する伝統的ボン教の一面を次のように加える。

「一般家庭では、収入が増え、余裕ができると、まず第一にすることは、仏像、仏具、経典といった仏壇に必要なものを整えることです。在家信者の家庭では、毎朝早くに、仏壇に伽水をお供えし、松柏類の香りのいい葉を燃やします。ブータンの森には、香りのいい葉をつけた木々が多いこと、そして清らかなせせらぎが到るところに流れていることから、この二つの捧げ物は、ブータンでは誰もが行うものです。もし皆様がブータンに来られて、田舎に滞在されたら、朝方民家の上には、ヒマラヤの紺碧に澄み渡った空に、真っ白な煙が昇るのをごらんになることでしょう。また仏壇には毎朝、仏教の護法尊や各地に固有な守護尊〔守護神〕のご加護を祈るため、捧げ物が供えられます。守護尊は、局地的なもので、土地土地により異なり、それが崇拜されるのは、ある特定の地域や谷に限られています。いずれにせよ、こうした護法尊とか守護尊は元来仏教に敵対していた神々ですが、グル・リンポチェにより調伏され、逆に仏教を保護する尊格となったのです。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、238-239 頁より引用）

チベット仏教のボン教崇拜がブータン仏教に加えられ、ブータン仏教をより地域仏教に日常化する効果を果し、このボン教崇拜はとりわけ農村部の地域生活を支える精神的支えとなり、ブータン仏教を村落の、そして、家族の一人一人の心奥深く刻む草の根仏教となる。すなわち、ブータン仏教はボン教をドック派に加える本地垂迹説を展開する。つまり、こうした護法尊とか守護尊の神々は元来仏教に敵対していた神々ですが、グル・リンポチェにより調伏され、逆に仏教を保護する尊格と見なされる。ブータン仏教ボン教崇拜は前に述べた生き物の殺生を禁止するアニミズム精霊主義の役割を果すが、殊に農村部での山林と牧畜の生態的循環を^{なりわい}生業とする農民にとって重要な問題となる。こうしたボン教崇拜は農業国ブータンの精神文化、とりわけ生態的循環の保存・維持するのに大きな役割を果す。動物、植物が人間を助け、人間を幸福にすることから、ボン教はそのアニミズム精霊主義からこれら動物、植物を自然神として崇拜し、殺生を禁止する。ブータンのこうしたボン教と似た自然神を崇拜する習慣は北海道アイヌ民族にも見出される。ここにブータン仏教は、日本での北海道における先住民族アイヌの生態観との相同性を見出す。ブータンでは森林が国土の70パーセントを占め、そこでの自然を愛し、聖なるものと位置づけるブータンは「生きとし生けるものを敬う」教えをボン教から学び、「人と自然環境の間に密接で調和のとれた関係」を保つことに全力を注ぐが、この点について年老いたヤクの屠殺について次のように記す。

「仏教の「生きとし生けるものを敬う」という教えは、ブータン人の信仰、風習に深く浸透しており、スポーツのために、あるいは食に供するために動物を殺すことにたいする強い抑制力として働いています。唯一殺生が許されるのは、わたしの父がノブガン村の庭で熊を殺したときのような自衛の場合です。それともう一つは、高地の過酷な自然状況の中で生活するヤク飼いの場合で、飼っているヤクの群れが生き延びるのに十分な食べ物がなくなったとき、年老いてもはや役畜として使えなくなったヤクを殺します。こうした場合を除いては、いかなる状況下でも殺生が禁じられている結果、問題が起こっていることも事実です。たとえば都市部での野良犬の増加がそうですし、野生の猪や熊による作物や果樹園の破壊は、農民にとって非常な損害で悩みの種です。この道徳

的ジレンマは、未だ解決されていません。」

(ドルジェ・ワンモ, 前掲書, 142頁より引用)

「生きとし生けるものを敬う」ブータン人のボン教信仰が、他面野生の熊、猪、犬による農作物の喰い尽しの被害を多くし、時には70パーセント前後の被害を出し、その殺生を巡って道徳のジレンマに陥っているのがブータンの直面している現実である。他面、牧畜と山林との生態的循環の保全は農業国ブータンにとって不可欠な国策として取り組まれ、生物多様性の世界を築く精神としてボン教のアニミズム精霊主義の信仰について次のように描く。

「木にたいする尊敬——崇拜といえるもの——は、ブータン人の心に深く根づいています。ブータン人なら誰でも、ブッダの生涯での四大事蹟——ルンビニでの誕生、ブッダガヤでの悟り、サルナートでの最初の説法そしてクシナガラでの入寂——はすべて、一本の木の下で起こったことを知っています。わたしたちのノブガン村の裏手には森がありますが、村の決まりと慣習で、勝手に木を伐採することは禁じられています。たとえば誰かが家を建てる場合、村全体が協議し伐採する木材の量を決め、その量だけの伐採が許可されます。そして、新しい苗木がすぐに植えられます。森の利用に関してははっきりとした規定があり、家畜を放牧したり、ゼンマイ、きのこ、薬草、香草を採ったり、落ち葉、堆肥、そして薪用の乾いた小枝や細枝を集めるのは許可されています。しかし必要な量だけに限られています。というのは仏教では、節制を説くからです。また水源近くの木は、どんなことがあってもけっして伐採してはいけないことは誰でも心得ています。

ブータン仏教のユニークな点は、木、森に限らず、山、川、湖、岩、洞窟、その他の自然の造形物にも神が宿ると信じる、古くからのボン教の要素を数多く取り入れたことです。」

(ドルジェ・ワンモ, 前掲書, 142-143頁より引用)

山林管理が村落の行政として行なわれるが、そこでの入会地制度は乱伐、乱獲を抑制し、分別ある収穫と伐採を守り、自然の恵みを敬うと同時に、「木、森に限らず、山、川、湖、岩、洞窟、その他の自然の造形物にも」宿る神を崇拜するボン教に支えられて村落共同体と農家の間の絆を育む草の根として機能する。そして、ドルジェ・ワンモは聖なる自然を乱獲し、破壊するとそこに住む自然神(アニミズム精霊)の罰を受け、疫病、飢餓、洪水、地震、凶作が持たられ、農耕社会の衰退を招くとブータン人の信仰を次のように記す。

「わたしたちは、こうした神々の神聖な住まいをかき乱したり汚したりすると、それにたいする神罰として、病氣、不運、洪水、不作などがもたらされると信じています。こうした信仰は、共同体全体に影響をおよぼし、法的な規制に代わって、そうした行為がなされないようにする抑制として機能しています。

わたしたちのような農耕を基本とする社会では、宗教上の信仰、社会的価値および習慣、民衆の智慧の結晶が組み合わさって、生態系を害する行為が抑制され、人と自然環境の間に密接で調和がとれた関係が保たれています。手つかずの自然の美しさを愛でるのは、ブータン人の典型的な国民性です。」

(ドルジェ・ワンモ, 前掲書, 143-144頁より引用)

農業国ブータンにとって聖なる自然との調和を図り、その生態的循環を保全することは国策とし

て中心的環境開発政策によって推進され、ボン教のアニミズム精霊主義信仰をブータン仏教の重要側面として重視することで幸福大国への道を切り開く草の根となる。それゆえ、ブータン仏教を仏壇で読経し、^{あかすい} 關伽水の供用儀式は一面で地域神、或いはその家の守護神を信仰し、観音信仰とボン教信仰の融合と調和を図る。仏壇での密教經典の読経は「真言」（マントラ）の呪文を唱え、「観音菩薩のオーム・マニ・ペメ・フーム」（蓮華（ペメ）の中にある宝珠（マニ）を称える）、或いは「グル・リンポチェのオーム・アー・フーム・パザ・グル・シッディ、フーム」（金剛（パザ）師（グル）の成就（シッディ）を称える）と崇拜し、次のように儀式を行う。

「關伽水と、香木の葉を燃やすお供えに加えて、一般の信者がもっとも力を注ぐのは、片や観音菩薩のオーム・マニ・ペメ・フーム、片やグル・リンポチェのオーム・アー・フーム・パザ・グル・シッディ・フームという、ともに仏教の真髓を凝縮した真言〔マントラ〕を唱えることです。数世代が同居する大家族の老人は、夜明け前に起き、今紹介した真言あるいは念仏、さらにはもっと長い經文を唱えることを日課としています。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、239頁より引用）

仏壇での^{あかすい} 關伽水の供用儀式がブータン仏教ドゥーク派の金剛乗を読経し、真言（呪文）を唱えて密教（＝空觀）の淵へ沈澱する観音信仰を深め、朝の参拝とする。

他方、夕の仏壇での法要儀式は主要に読経を中心に取り行われるが、その密教經典として(1)ゾクチェン、(2)カギユ派經典、(3)極楽祈願文（デワチェン・モンラム）を唱え、さらに食事の煙をお供え、バター灯明を灯して功德の実践を積む。ドルジェ・ワンモは仏壇の夕方における勤行と読経と法要の儀式とその仏教的意義を次のように伝える。

「当然のことですが、寺院での祈りはもっと入念なもので、時間も長く包括的です。その中で法要には、ゾクチェン〔大完成あるいは大究竟を意味する教え〕からカギユ派に到るまでのさまざまなテキストが唱えられますが、十七世紀の著名な詩人僧カルマ・チャクメ〔一六一三—一六七八〕の手になる『デワチェン・モンラム〔極楽祈願文〕』もその一つです。これは、日本でも広く流布している極楽すなわち浄土思想とつながるものです。

日没とともに、仏壇に供えてあった關伽水を捨て、短い夕べのお勤めを行います。朝は芳ばしいお香の煙のお供えがありましたが、夕べは人間が居住する空間をさまよう餓鬼も含めた四グループの「来賓」への食事の煙のお供えがあります。これは、乾いた食材を少し燃やして、仏・菩薩といった高貴な存在と、飢えや渴望に苦しむ生き物に捧げるものです。余力のある人は、一日の最後に仏壇にバターあるいは植物油の灯明を灯し、その光が何千にも何億にも倍増するのを瞑想します。それは、智慧の灯明が灯り、無知の闇がなくなりますように、との祈りでもあります。施しにより功德を積むのには、自分の富を犠牲にすることが必要で、バターランプを捧げることは、その実践です。」

（ドルジェ・ワンモ、前掲書、240-241頁より引用）

すでに第一編でチベットの原像を、第二編でブータンの原像をチベット仏教、或いはブータン仏教から取りあげた。すなわちチベットではグライ・ラマの政教一体制と莊園の地主＝小作人を中心に分析し、ブータンではドルジェ家とワンチェク家の対立と和解を生むブータン仏教を取り上げた。さらにブータンでは村落と農家の絆を仏間と仏壇の供用儀式から育まれる開花された

人間によって築かれる「幸福大国」の精神をブータン仏教に求めた。次には視野を拡大してブータンを探索し、ブータンの現状を次に紹介する。

3編 ブータン探索

サンジャ・アチャヤ著 女澤史恵訳 『ブータン・ヒマラヤ山脈の王国』

はじめに—著者紹介とブータンへの軌跡

著者サンジャ・アチャヤは作家、キャスター、ドキュメンタリー制作者である。カメラを携え、山岳地帯、砂漠、熱帯雨林、河口付近のマングローブの森林、さらには水面下の美しいサンゴ礁の世界へと旅してきた。1980年にブータンへ移り住み、ユニセフのプロジェクトの一環として、ブータン王国の開発支援部局の設立に従事し、2年間ティンプーに滞在した。

現在はデリーに在住し、世論マスコミ研究所、ジャミア・ミリヤ・イスラミア大学、都市計画・建築学校で写真撮影術を教えている。写真や音楽だけでなく、大空高く舞い上がるセールプレーン（高性能軽グライダー）にも夢中だ。

伝説に彩られた雷龍の国ブータン。ヒマラヤ山脈東部のいくつもの高峰によって隔離され、インドの蒸し暑く河川の多い平野と、寒冷で乾燥したチベット高原に挟まれて存在している。冠雪した高峰、緑で覆われた溪谷、水しぶきを上げる溪流、野生の蘭が咲き乱れる森林。ここには、唯一無二の美しい風景が広がる。

温帯樹林と熱帯雨林があるだけではない。熱心な仏教徒であり、自国の歴史に誇りを持っている国民を、国王自らが民主主義へと導く。発展途上国ではあるが、独自の価値観を尊重し、環境を破壊することなく、開発を進めている。目を見張る写真と解説で、読者は雷龍の国のあらゆる面について知るだろう。

図-1 東南アジアにおけるブータンの位置

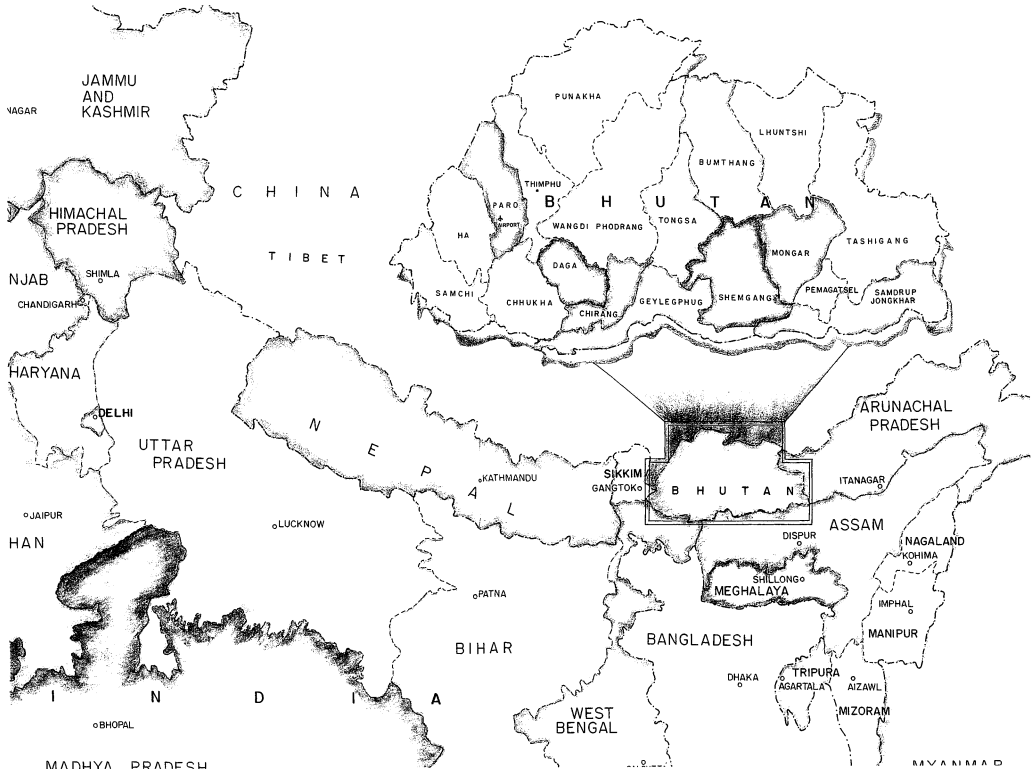
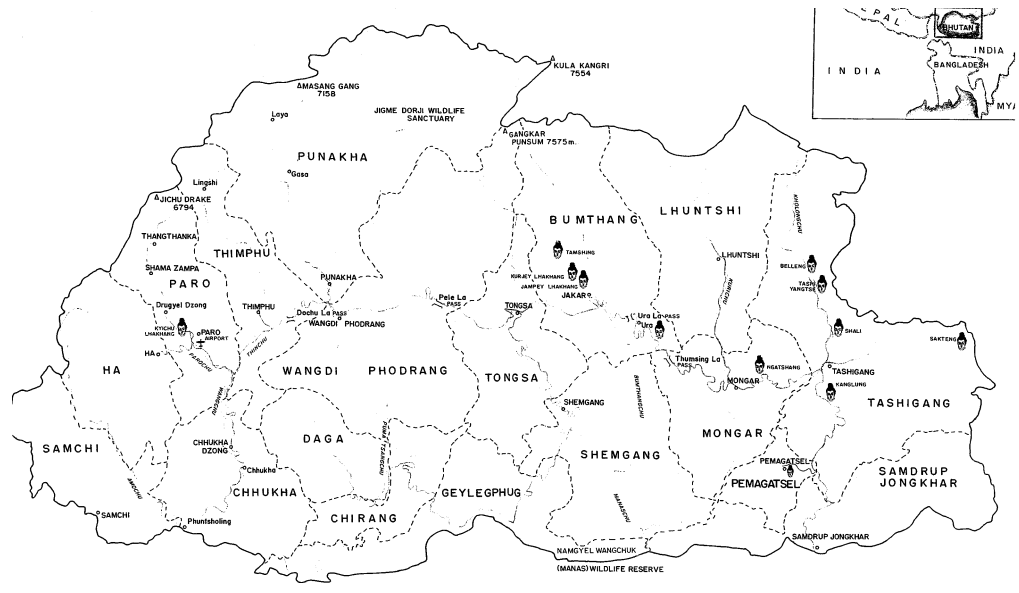


図-2 ブータンの各州と空港パロ



目 次

序文

1章 着陸

2章 環境と開発

3章 雷龍の国

4章 チョモラーリ山：女神の神聖な山

序 文

1980年7月、ニューデリーがモンスーンに襲われている最中に、私は妻ソンヤと共に多数の荷物とゴールドデンレトリーバーを携えて、ティンスキア急行に乗り込んだ。30時間以上の乗車の果てに、私たちは鉄道ニュー・ジャルパイグリ駅の暗いプラットフォームに下車した。ルフスは通りゆく列車や動物にいちいち吠えかかっていたので、疲れきっていた。ソンヤは、降り立った場所の景色が、出発地とあまりに違って茫然としていた。駅まで迎えに来るようになっていた写真家のウゲン・ノルブと出会えて安堵したのも束の間、ブータンへ行くためにはベンガル北部の暑く埃っぽい前衛の山々を車で越えなければならなかった。

そこから更に6時間以上、でこぼこの高速道路に揺られてブンツォリンへと向かい、道沿いに広がるきれいに剪定された茶畑を通り抜けて、ブータンの入り口であるアーチ型の門に到着した。掲示板や多数の青い制服の警官を除けば、途中で通りがかった小さな町となんら変わらないように見えた。ところが私はブータンの神秘性にすっかり虜となり、数年間をここで過ごすことになった！ クエンガ・ホテルのオムレツでも私たちの決心が揺らぎはしなかった。

ブンツォリンから5kmほど進んでカーバンディを過ぎたあたりから、劇的に雰囲気が変わった。狭い高速道路は、木々がうっそうと生い茂る曲がりくねった山道へと続いていく。山腹からは巨大なシダが枝垂れかかり、熱帯雨林の根元にはランやつる草が密生している。標高が上がるにつれ、気温は下がっていく。あっという間に私たちは雲の中にいた。霧を透かして見える光景は、夢のようだった。通りゆく人は伝統的なブータンの衣装を着ていた。建物は未だかつて見たことのない様式のものであった。私たちは別世界へとやってきたのだ。そして立ち去る時には、すっかり感化されているだろう。

当時は通信手段もなく苦勞したものだった。遠距離電話はほとんど繋がらず、電報でさえ数日かかった。パロ空港から離発着している航空便もなく、ティンプーまで行き着くには、鉄道ニュー・ジャルパイグリ駅あるいはインドのバグドグラ空港から車で行くしかなかった。ティンプーから曲がりくねった高速道路を185km進むのに、5時間以上かかったが、その道中退屈することはなかった。

ロバートとフトクシ・チャビには3人の子供ミッシェル、ファード、アディル、それにブラッ

クラブラドルがいて、そこに私たち二人が加わり、大家族を構成した。ティンブーはとてもものどかなところで、通りにはほとんど車が走っていなかった。けれども、思っていたほど静かな所でもなかった。スイス・ベーカーリーで楽しむことができた。ある静かな夕方、チャビのクラブラドルが玄関に向かって激しく吠えだした。フートクシはドアを開けると、びっくりして立ちすくんだ。玄関前の階段に、豹がいたのだ！

ユニセフの事業として、ティンブーに開発支援部局(DSCD)を立ち上げるためにロバートと一緒に活動できたのは、素晴らしい経験となった。開発過程の必要不可欠な組織としてDSCDの活動を具現化するには、創造力が求められた。ブータンでのこうした活動が、社会福祉、教育、公衆衛生、栄養状態、健康問題などを次世代に引き継がれるようになった。

ブータンは特別な場所であり、そこに滞在することは人生において貴重な体験である。私たちの家族生活がブータンで始まったのも、極めて自然な成り行きだった。息子のニキルは、1981年にティンブー総合病院で誕生した。当時は、ある程度お金を持っているブータン人は、外国で出産した。妻ソンの母親が出産の手伝いのために遠路はるばるブータンまで来てくれ、大工や石工を説得して出産に間に合わせて分娩室を造らせた！その後1997年に再びブータンを訪れ、ニキルに誕生した場所を案内できたことは感慨深い経験となった。

ブータンの生活や文化、美しい風景を紹介している本が出版されている。ミハエル・アリス著『ブータン ヒマラヤ王国初期の歴史』、『ワタリガラスの王冠 ブータンにおける仏教の始まり』などは面白い読み物だ。1980年代では、旅行者のバイブル的存在としてG. N. メーラ著『ブータン 静穏な龍の国』がある。幸運にも、私は著者からこの本にサインをもらい、本棚に大事にとってある。

私たち夫婦がブータンで暮らしていた1980年代初めに、ヨシラ・イマエダとフランソワーズ・ポマレと知り合った。彼らはブータンの写真集『東ヒマラヤの王国』を出版したガイ・ヴァン・ストゥリドンクと親交があった。歴史学者で言語学者のチベット専門家フランソワーズは、ブータンに関する本を数冊出版していた。その中には、イラスト入りのガイドブック『ヒマラヤにある仏教徒の要塞』もある。最近では『神々のすむ山間部の要塞』を編集した。この本では、外国人だけでなくブータン人も含む9人の学者がブータンについて記述しており、見どころが満載である。

ケイジ・ニシオカとサスケ・ナカオの『ブータンの花』は、ブータン特有の民族植物学について調査した秀作である。『千の瞳と英雄』の著者カウマ・ウラや、ブータンの民話と女性問題に詳しいクンザン・チョデンは、自国ブータンのことを英語で表現できる新たな世代のブータン人である。こうした書物から多くのことを学ぶ恩恵にあずかり、彼らの業績に敬意を表すとともに、深く感謝している。

ブータンにいる多くの友人からは、惜しめない援助や支援を頂き、どんなにお礼を言っても言い尽せない。ダショー・ベンジは、いつでも温かく迎え入れ、相談に乗り、思慮深い助言をくれ

た。彼は朗らかで、また鋭い感性の持ち主でもあった。ダショー・メグラジは、いつでも頼りになる友人である。郵便・電信省長として、切手を扱う支局へ取り次いでくれ、この本のために切手を提供してくれた。1980年代にブータンに派遣されたインド大使サルマン・ハイダーは、すぐれた見識と寛容な心で、助言してくれた。彼の妻クスムからは、映画『羅生門』を知り、私たちのあり方に新たな考え方をもたらされた。

DSCDの同僚のうち、今でも交流が続いているウゲン・ワンディは、ブータンをトレッキングで旅してまわる時に、彼の専門知識と技術が非常に役立った。それにもまして、一緒にブータン料理を自家製の酒と共に楽しんだ時間はとても楽しかった。ウゲン・ノブは、残念なことに、この世にはもういない。一緒に写真を撮り、暗室で作業したものだった。彼はいつでも冷静沈着だった。私たち夫婦をパジョディン僧院やジミランツォ湖まで連れて行ってくれ、すばらしいトレッキングの旅となった。

ミンボ・ドゥクパとカーガ・バハドゥ・ラマとは、家族同様の付き合いをした。シャンバラーのパブには彼らの笑い声が響き、アイデアや情報交換をしたものだ。

ジョージ・デセレスと初めて会ったのは、シャンバラーのパブだった。飛行への熱い思いに共感し、話題はコンピュータやシングル・モルトにまで及び尽きなかった。彼のブータンへの想いは他の人とは少し違って面白い。BAe 146旅客機を操縦しながら、上空からブータンを眺めているからだろう。

ロビン・ワンディとチョゾムは、いつでも私たちを歓迎してくれた。ロビンは何かと便宜を図ってくれ、旅を快適なものにしてくれた。初めてロビンと会ったのは1980年のことだった。それ以来変わることのない明るく謙虚な態度のおかげで、私たちの心は一つとなった。チョゾムは楽しそうに食事の準備をし、ロビンでさえ行こうとしないところに運転して連れて行ってくれた。

バブチェとドルジェは我々のチョモラーリへの険しい登山に同行し、重い荷物を運び、信じられない環境でおいしい料理を作ってくれた。そして、その他にも多くのガイドに協力してもらった。

いつも私を励まし、この本の出版に尽力してくれたベラ・プタリア、そしてこのような機会を与えて下さったプラモド・カプールに、感謝している。最後に、妻ソイヤはブータンでの最高の伴侶であり、この本の執筆においても適切な助言をくれた。今後とも彼女の援助を期待している！

1章 着 陸

「乗客の皆様、これからパロへ着陸態勢に入ります。シートベルトをお締め下さい。山脈越えの飛行には慣れているお客さまも大勢いらっしゃると思いますが、今回の着陸はいつもとは違います。飛行機の翼が丘陵や森、建物ぎりぎりのところをかすめるように飛んでいきます。でも、心配はご無用、これが通常の飛行なのです。パロ到着まで最高の景色をお楽しみ下さい！」滑走

路1-5への最終着陸態勢に入ったドラック・エア BAeの機長アナウンスだった。白い口髭をたくわえた機長ジョージ・デセレスは、かつてアマゾン川やザンベジ川流域の熱帯雨林の上空を飛行していたベトナム退役軍人である。ブータンではちょっとした有名人であり、パロ空港に離発着する世界的にも卓越した腕前のパイロットである。コンピュータ制御で操縦する時代であっても、計器に頼らず、勘と経験から操縦する。雲に包まれた操縦席の小さな窓から様子を窺い、谷間に飛び込んだかと思うと、棚田すれすれに旋回し、スミスさんの家を掠めるようにしながら、黒く蛇行しているパロ川の上空を飛行していく。

パロ空港は、世界でも類を見ない飛行場だろう。世界最高峰の山々を抱くヒマラヤ山脈を越える飛行機からの景色は壮大である。孤高な佇まいで地球上の最高地点にそびえ立つエベレスト、それに寄り添ってマカルー山とローツェ山、真っ白に冠雪したカンチェンジュンガ山が姿を現し、やがてブータンに入ると、標高7300m(24100フィート)の真っ白い高峰チョモラーリが見える。それから山間の乱気流に揺られながら、鮮やかな緑色の山の傾斜に沿って高度を下げ、機体は一気に山村に向かって降下していく。黒いスレートの屋根に載っている真っ赤な唐辛子、水しぶきをあげて流れる溪流、ラバの一行が見えてくる。そして、松樹林に覆われた山腹に建つ、雄大な要塞であり僧院であるパロ・ゾンが現れる。

滑走路に降り立つと、山地特有の冷たい風が頬を撫で、気持ちが高揚してくる。つい今しがた飛行機で通り抜けてきた嵐雲から夕陽が差し込み、パロは眩い輝きに包まれている。まだ昼間の温かさが残っているが、ときおり南方からの冷たい風が渓谷を通して、首都ティンブーから曲がりくねって流れるワン川との合流地点まで、吹き下ろしてくる。フェンス越しの村では、急降下してくる飛行機やジェットエンジンの爆音にも動じず、悠然と生活を営んでいる。黒い屋根に白い壁の大きな土の家から、料理している煙が立ち昇っている。ヤク肉は軒下に吊るされ、燻製にされている。塗りたての漆喰のテラスには、伝統衣装キラを着た女性たちが集まって、穀物の籾殻を扇ぎ分けている。少年たちは豚を集めている。ポプラ並木のある草原を流れる河川敷では、アーチェリー・コンテストが行われ、歌や踊りで会場は盛り上がり、1mほどの高さの白色的に矢が命中すると歓声があがる。

かつては鉄道で移動した後、さらに長時間車を走らせ、ようやくブータンの中心部に辿り着いた。けれども、そうした時間をかけて移動しなければ、初めて遭遇するこの空間にすっかり困惑してしまうだろう。

ブータンのような国はどこにもない。ヒマラヤ山脈東部のいくつもの高峰によって隔離され、インドの蒸し暑く河川の多い平野と、寒冷で乾燥したチベット高原に挟まれるように存在するこの小さな王国は、ごく最近まで世界から完全に隔絶されていた。こうした地理的条件によって遮断されたブータンは、「最後の桃源郷」としての魅力^{ラスト・ジャングリア}を保持してきた。雪を冠った山々、緑に覆われた渓谷、深い森、激しく流れる河川の息をのむような光景、そして古代から引き継がれてきた大乘仏教と密教の教え。国土面積と人口はスイスに及ばないが、ブータンには古代と現代が激し

く入り混じり、素晴らしい自然の美しさと魅力的な文化的伝統が存在する。

ブータンは動植物の宝庫である。古代チベット人はブータンの国を「ロ・ジョン・メン・ジョン」(薬草の南の渓谷)や「ロ・モン・ツェンデン・ジョン」(針葉樹の南の渓谷)と呼んだ。希少な蘭、薬草、野草が手付かずの原始林で植生している。わずかに数キロメートルに多彩な生態系が存在する。麓の高温多湿の熱帯林には虎、豹、象の鳴き声が響き、高木の木陰にはゴールデンラングールやオオサイチョウが生息する。オーク、松、シャクナゲから成る温帯森林は、やがて野生の花々が咲き誇るヒマラヤの牧草地へと変わる。そこには単独で行動するユキヒョウ、色鮮やかなジュケイ、ブルーシープ、ターキンといったブータン特有の野生動物がいる。聖山チョモラーリのベースキャンプまで上がってくる、「スノーマン・トレック」と称される厳しい道中からは、クーラ・カンリ(24,700 フィート)やブータン最高峰のガルケル・プンスム(25,000 フィート)の雄大な姿が見える。中央ブータンにあるクローバーの形をした渓谷に下って行くと、手織り布や果樹園、乳製品で有名なプムタンに到着する。

主幹産業が農業であるブータンの渓谷には、氷河からの雪解け水やベンガル湾から上陸するモンスーンのもたらす雨によって、川は豊かに水を湛え、肥沃な土壌を作り出す。渓谷の斜面に造られた棚田は、夏になると青々とした緑色を呈し、春にはリンゴや桜が咲き誇り、丘陵が色付く。標高が高い地域では、冷涼な気候にあった大麦やソバが栽培され、秋になるとアマランスが色鮮やかに実る。水牛が畑を耕し、男たちは叩いて脱穀し、女たちが編んだかごで籾殻を取り除く。骨の折れる仕事だが、歌や踊り、そして協力し合うことで、苦労が半減する。最高のシャッターチャンスである!

仏教はこの山間の王国社会全体に浸透し、日常生活に深く根付いている。赤い袈裟を纏った僧侶たちは、結婚や誕生を祝う儀式、僧院の奉獻、集落の家々を清める悪魔祓い、雨の神々を鎮める儀式、さらには旅行者の歓迎といった宗教儀式を司っている。老人たちはマニ車を手に、仏塔の周りを回り、「オム・マニ・ペメ・フム」と真言(マントラ)を唱える。真っ直ぐに立てられた木の棒に幾重にも架けられた多彩なルンタが、僧院から漂う香にのって、稜線から吹く風にはためいている。

決まった時間になると、崇高な静寂に包まれた僧院に、シンバルやトランペット、太鼓の音が鳴り響き、悪魔の仮面を付けた僧侶や信徒が宗教舞踊を繰り広げ、ブータンの守護神を鎮め、見物客に幸運を祈願する。

ブータンでは、男性は民族衣装のゴを着る。これはキルトと着物を合わせたようなもので、手織りの格子柄の布からできている。腰のあたりで刺繍を施した布製の帯やケラを締める。前身ごろの大きな懐の中に、食べ物を入れたボンチュー(竹籠)、水やチャン(米ビール)の入った瓢箪、下草や生い茂った草を叩き切るのに便利な大きなナイフなどを持ち歩いている。カメラマンにとってゴは、カメラ本体やレンズを持ち運ぶのに優れた衣装である! 豪華な刺繍が施された衣服、伝統的な手工芸の毛織のブーツ、さらに鮮やかな装飾が施された鞆に納められた銀の長刀を

携えると、上流階級の着こなしとなる。公式行事やゾン(要塞化された僧院)に入場する際には、カムニという布を羽織る。カムニは身分によって色が異なり、一般市民は白、身分の高いダシヨーは赤、大臣はオレンジ色、国会議員は青、そしてブータン国王と宗教界の最高指導者ジェ・ケンポだけが黄色と決まっている。女性は丈の長いキラを巻き上げて銀のブローチで肩に留め、腰に帯びを巻く。普段は毛織物や綿の布に刺しゅうを施したものを着るが、祭典や行事では絹のキラを纏う。

ツェチュ祭は、各地区の政治・宗教の中心的役割を担っているゾンの中庭で開催される。何世紀も前の財宝や美術作品が保管されているゾンは、金属や釘を用いず、日干した土のブロック、石塊、木製の梁を組み合わせて建築された重要な文化遺産である。厚い壁は内側に向かって細くなり、上端には赤い紐が渡されている。窓は上部に取り付けられ、花柄や幾何学模様が施されている。一般市民の民家も独特な構造を呈し、現地での生活に適応している。多くの家は四角い間取りをしている。暗い廊下を進んで、急な木製の梯子を上がると、光が差し込んで明るい、開放的な木の骨組みの二階にでる。家族の部屋や祭壇は二階にあり、納屋のような形をした家の他の部分は、使用人や客人用として使われ、手織り機からは家で紡いだ毛糸から独特の模様を織り込む音が聞こえる。屋根は木製あるいはスレート製で傾斜が付けられ、ずれないように丸い小石や重たい石が載せられ、穏やかな夏の日には唐辛子やトウモロコシが干され、色鮮やかである。干し草の束は梁の間に積まれ、吊るされた肉片は台所の火で燻製にされる。

ブータンの歴史と宗教は、密着に関係している。ブータンは現地では「ドゥック・ユル」と呼ばれている。これは仏教のドゥック派を信仰する者という意味のドゥックパから由来している。ツァンパ・ギャレ・イエシ・ドルジェがチベットで新たな僧院を献堂していると、雷の轟く音が聞こえた。それを龍の叫び声であると信じ、その僧院をドゥックと名付けたため、彼の教えを信じる教徒はドゥックパと呼ばれるようになった。ブータンがドゥック派の信徒によって統治されると、ポタンタ(チベット辺境にある王国)はドゥック・ユル(雷龍の国)として知られるようになった。ブータンの国旗には、火を吹く龍が描かれている。今ではブータン製の製品には、ジャムやケチャップの瓶から航空会社に至るまで、ドゥックという言葉が刻印されている。

仏教は、紀元前6世紀に仏陀が悟りの境地に達したインドのガヤが発祥の地とされ、そびえ立つヒマラヤ山脈を越えてチベットへと広まり、さらに中国や日本へと伝わった。ブータンに仏教が導入されたのは、7世紀にチベットの王ソンツェン・ガンボがパロ谷に僧院を創設してからである。8世紀には、現在のパキスタン北西辺境州のスワート地方に現れたかの有名な僧侶パドマサンバヴァが、ブータンに密教をもたらした。ブータンではグル・リンポチェとして広く知られている。仏陀の説いた八正道を表している8つの明示は、国中の寺院で崇拜され、グル・パドマサンバヴァは、密教の宗派であるニンマ派の開祖として知られている。

中世に入ると、ブータンでは宗教闘争が繰り広げられ、さらにチベットからの侵略に直面するが、ようやく17世紀にドゥック派のラマ僧シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルがチベット人との

戦いに決定的な勝利を収め、国の統一に成功した。政治と宗教は密接に関連しながら、ブータンの歴史と社会に深く根差してきた。現在に至るまで、ジェ・ケンボが宗教界の最高指導者であるとされているが、国の最高指導者である国王が宗教界と俗世の権力を併せ持っている。

ニンマ派とドゥック派はかつて激しい宗教闘争を繰り広げた。今日の支配者層の先祖には、グル・リンポチェとシャブドゥンの両者がいる。19世紀後半になると、トンサのペンロップが絶対的権力を握った。1907年、宗教界、行政府、人民の代表によってブータンの初代国王が選出され世襲王政となった。現在は、ワンチュック家の四代目ジグミ・センゲ・ワンチュックがワタリガラスの王冠を授けられ、ドゥック・ギャルポ（国王）として雷龍の王国ドゥック・ユルの統治権が与えられている。ブータンは、世俗の政治権力だけでなく宗教界にも多大な影響力を及ぼす指導力を有する国王によって統治される、絶対君主制である。

ブータンは古色蒼然としたまるで別世界であると同時に、また若々しい活力にも満ち溢れている。ジグミ・シンゲ・ワンチュック国王は1974年に17歳で即位した。また若い世代の廷臣や行政官の多くは外国の大学を卒業しており、タシチョ・ゾンからは若い活力がみなぎっている。ブータンが発展に尽力する有能な政府を有し、外国の世故にたけた政策を導入しているのは、決して偶然の事象ではない。現在のジェ・ケンボも若い感性を職務に反映させている。

若き国王は、英知を持って国を統治する一方、スポーツにも高い関心を示している。ティンプーのチャンリミタン競技場で、ゴの袖を腰に留めてバスケットボールに興じる国王を見るのも、午後の楽しいひと時だった。雨が降ろうと、寒かろうと、たとえ高官代表団が首都を訪問しようと、国王が試合を思い止まることは滅多になかった。

週末になると、誰もがアーチェリーに熱中し、国王もタシチョ・ゾンを見下ろすチンチュの土手にある宮殿の庭で昼食会を開いたものだった。両チームとも威勢のよい応援団を引き連れ、勇ましい歌を歌い、相手チームの気を散らすような罵声を浴びせ、弓を引く直前にはますます応援に熱が入る。時には試合の数日前から、おぞましい呪いの言葉が対戦相手に掛けられることもある。かつて国王チームに悪運をもたらそうと企んだパブリック・スクールの監督生に、国王から週末に宮廷の芝刈りをするよう命じられたこともある。

アーチェリー競技会には、国王と親交の深いダショー・パルジョー・ドルジェの姿もよく見られる。現環境大臣として国民に知られているダショー・ベンジは、当時裁判長兼宮廷の道化師として、忘れてはならない存在だった。ある時、楽団指揮者を引き受けた彼は、長い銀色の指揮棒を巧みに振りながら、宮廷の芝生を引き連れてまわり、遂に楽隊は池に引き込まれ水浸しになりながらも、懸命に演奏を続けたという逸話もある。

ベンジの悪戯は有名である。ある朝、静寂な宮廷の控室で、国王が高僧と私的な会話を楽しんでいる間、宮廷の道化師ベンジは、頭上にあるシャンデリアに届くかを巡って上官と百ヌルタムを賭けて、勝ったという噂もある。また、彼は枕投げの最長記録を狙って、いたって単純な策を講じた。国王のしている前で、対戦相手を落とし穴に転げ落としたのである。

誰もがドゥック・ギャルポ（国王）に謁見する際には、深く頭を下げ、スカーフを羽織らなければならない。国王と目を合わせることは決して許されず、カメラマンとしては極めて困難な習慣であったが、そうした習慣に従って、私は視線を下げて仰ぎ見るように撮影した。近くに接近することも敬遠され、国王の御一行が曲がりくねった山道から不意に曲がって姿を現したときなどは、対応に苦慮したものだ。ブータン人の運転手は丘陵の斜面に向かってハンドルを切って車を止め、素早くダッシュボードの下に屈み込んだ。国王と視線を合わせることはおろか、国王よりも高い位置にいることも許されないのだ！

鋭く洞察力のある眼力の持ち主である国王は、1980年に東ブータンのモンガルで開催されていた建国記念日の祝典で、レベ・レベを踊っている最中に私を見るなり「やあ、サンガイじゃないか！ こっちへいらっしゃい」と招き寄せてくれたこともある。喜び勇んで踊りの輪に加わり、見よう見まねで飛び跳ねると、首にかけていたカメラが激しくぶつかり合い、ゴからはカメラレンズが転げ落ちそうになった！ この光景をカメラに納めることはできなかったけど、決して忘れることの出来ない貴重な思い出の一シーンである。

2章 環境と開発

年輩いた女性の顔には深い皺が刻まれていたが、恋する乙女のような至福な笑顔で、目の前に立っている若い男性に、賞賛の眼差しを向けていた。男は姿勢を低くして、彼女のごつごつした手が差し出すコップにラム酒を注ぐが、彼女の視線は彼に釘づけになったままだ。ブータン国王が民衆の中に入っていく。国王は村人たちに話しかけ、民衆の抱える問題について議論し、即座にその問題を解決するために役人を派遣する。さらに、臣民に食べ物や飲み物を提供し、貧民には衣服やお金を与え、ブータン国民に対して献身的に尽力している。

これは1980年11月のモンガルでの出来事である。国王ジグミ・センゲ・ワンチュックは側近らと、1907年にウゲン・ワンチュックが初代ブータン国王に就任した記念日を祝うために、この地を訪れていた。モンガルには遠方の村々から数千人の人々が集まり村の人口の十倍にまで膨れ上がり、人里離れたこの地にドゥック・ギャルポを一目見ようと大勢の人が集まっていた。民衆にとって、モンガルは初めて体験する「都会」であり、物珍しそうに自動車を見る。中央ブータンを貫く東西を結ぶ基幹道路は、この小さな町を通っているが、まだ舗装されておらず、車が走り去るたびに埃が舞い上がる。艶やかなメルセデス・ベンツ・Sクラス・セダンに乗った国王一行は、パチャムの舞に先導されて大広場へとやってきた。広間へとなだれ込んできた老若男女が、国王を一目みようとして押し付けてきたが、国王が群衆に近づくと、皆一斉に姿勢を低くした。ブータン王国の君主制を廃止し民主主義へと変換し地方分権を推奨するという、歴史的にも重大な政策がモンガルで発表された。

当時、国王は地方を巡って国民に必要なものを見てまわり、開発の総括的方针を打ち出してい

た。そうした風習から、建国記念日は毎年違う場所で開催され、遠方の地方が選出されることが多かった。国王は、地域の医療、栄養状態、衛生問題、安全な飲み水の供給、教育といった庶民の生活に根差した問題を調べた。その一方で、政府は僧院や寺院の土地を僧侶たちに交付するために入手し、土地を持たない小作農にも分配した。最も強調されるべき点は、国王自らが閣僚会議だけでなく、地方自治体や社会的指導者らとも率先して議論し、政治力がドンカク（郡）やゲオク（村）まで浸透するように尽力していることである。こうした政策は一時的に成功する大衆向けのものとは違い、国内の政治機構から無駄をなくして合理化し、地方の行政機関を発展させ、地方自治の責任を育む。こうした国王の訪問によって、地方各地に注目が集められ、国内の偏りのない開発につながる。国家開発計画省のカルマ・ウラ氏の言葉がある。「均衡のとれた開発政策は、国内に偏りなく行政サービスや社会基盤を提供することにつながります。後退する地方をつくらないようにすることが重要であり、地方を経済の主流に持ち込むのです」

こうした近代化への移行は、1952年から20年間ブータンを統治し1972年にナイロビで崩御したジグミ・ドルジェ・ワンチュク政権時代に推し進められた。インドの初代首相ジャワハルラー・ネルーは、1958年に娘インディラ・ガンディーを伴ってパロを訪問し、ブータンの近代化と経済発展において協力することを約束し、次のように述べている。「独立国として、独自の生活様式を選択し、その意思を尊重した過程を経るべきである。我々は同じヒマラヤに住む仲間であり、互いに助け合って友好関係を築くべきである」と。そして1954年に中国がチベットを侵略したことに大きな衝撃を受けたブータン国王は、鎖国を解き、世界と向き合う時が来たことを悟った。しかし、近代化には複雑な問題が堆積していた。財政の問題だけではなく、専門家、技術者、医師、教師といった専門の技能を有する人材が明らかに不足していた。ネルーは迅速にブータンの計画的経済開発を支援し、改革の具体的な方策が提示された。1961年、ブータンは第一期五カ年開発計画に着手し、道路建設、通信、教育、人材養成といった社会基盤の充足を最優先課題とした。

自然環境の開発は、ブータンの意向に沿って行われることになった。自然環境の開発には少なからぬ反対があった。10年の年月を経て、ジグミ・ドルジェ・ワンチュクは近代ブータンの父として名を馳せ、それまでの絶対君主制から立憲君主制へ移行するという大胆な変革を行った。急進的な改革だったが、国民の文化的価値観に動揺を与えないように、段階的に行われた。最高法院と国民議会（ツォドゥ）が設立され、法律が成文化され、農奴制が廃止された。国王は国民議会議決に対する拒否権を自ら放棄し、国民議会の採択した法案が決定権を持った。ジグミ・ドルジェ・ワンチュクの予期せぬ崩御により、2年前にトンサ・ペンロップに就任した17歳の皇太子が1974年に王位を継承した。ジグミ・シンゲ・ワンチュクは、父親の重要政策である社会変革と経済発展を引き継ぎながらも、ブータン独自の伝統や文化の保護にも尽力した。

改革への長い過程で、国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクは22名から成る内閣を解散し、改革を推し進めるため、1998年6月29日、国王は勅令（カショー）として国会に改革の包括案を提出し

た。これによりツォドゥは無記名投票によって6名の官僚を任命し、新たに王立諮問委員会の6名を選出した。さらに国王指名の1名と宗教界から選出された2名を加えた総勢15名から内閣が構成され、国会に必要な助言を行った。国王は定期的に行われる信任投票によって承認されなければならない、さらに国会は国王の辞任を要求する権限を有するという国王の提案に、閣僚たちは驚いた。絶対的な権力を有する国王が自らその権力を弱小化するという、君主制の歴史の中でも前代未聞の提案であり、改めて国王と国民との特別な結びつきが示された。官僚たちはこうした国王の提案に圧倒され、涙を流してこの勅令(カショー)を取り下げるよう懇願した。けれども、カショーはそのまま執行され、雷龍の王国ブータンは次の千年紀に向けて新たに旅立った。近代が終わった「後」の時代、「脱」工業化、環境にやさしい社会の構築のために、通信手や医療福祉・教育の発展を基盤とした独立独歩の政策、農業や林業活動の改善、木材・鉱物・水力発電といった豊富な資源の利用を重要視した。しかし、物質的な発展が、国民の精神的な充実を損なってはならないとし、国民総生産(GNP)では貧しい国であるが、高い自給自足を誇り、経済的な貧困とは無縁である。GNPの向上よりも、国民総幸福(GNH)の探究を最優先させたのだ!

ブータン政府は目先の利益や政治的な都合主義に囚われることなく、環境保護と経済発展の両方をバランスよく取り入れてきた。経済は天然資源の開発に大きく依存しているが、持続可能な利用と環境の保護を重要視している。ブータン政府は的確な状況判断から敏速に舵をとり、災害を避けた。1980年代には急激な森林破壊に直面した。国際的コンサルタントの度重なる強い要請を受け、最先端の技術が導入され、ゲドゥヤ下流域にある製材工場を稼働させるために、広域の原始林から木材が運び出された。しかし、すぐに苦い教訓として認識されるようになり、林業作業の規模縮小に続いて、その工場は廃止された。また336 MWを誇るチュカ水力発電の周辺での環境の激変によって計画が見直され、この地域に植林がなされ自然環境が保たれている。

ブータンを取り巻く自然環境が長年にわたって保存されてきたのは、仏教的観念とも関係している。ブータン政府は森林の生態系の保護に意義を認め、1995年には森林及び自然保護法を制定し、将来にわたって環境を守る法整備を進めている。国営の森林開発企業に伐採搬出の権限が一任され、伐採を管理し、過剰な森林開発を防止している。森林管理においても、開発よりも自然保護が優先されている。こうした状況下で、10年前よりも国土に占める森林面積の割合は増加している。特記すべきは、成長速度の速い外来種ではなく、主にその地域に植生していた樹木を植林していることである。現在、ブータン国土の72パーセントが森林面積であり、そのほとんどが原始林である。自然破壊が広がり、天然資源の保護政策が後回しにされている南アジアにおいて、ブータンの状況は非常に心和むものである。

ブータンの森林には多種多彩の生態系が存在し、世界的にも重要な遺伝子の宝庫である。このように多様な動植物の生命が育まれている地域は、地球上でほとんど見られず、1974年に森林保護と野生動植物の保護区に関する法律が決議され、効果を奏している。環境省副大臣ダショー・パルジョー・J・ドルジェが指揮をとる王立自然保護委員会は、北部ブータンにある本来の生態系

が残っている 4200 km² もの領域を保護区域に指定している。ジグミ・ドルジェ国王にちなんで名付けられた国立公園では、ワシントン条約 (CITIS) や国際自然保護連合 (IUCN) で絶滅危惧種とされている動植物の多くが生息している。ブータンでしか見られない生物も多数存在する。シャクナゲだけをとりても 15 種にも及び、まだ確認されていない花や昆虫もある。自然環境の優れた指標として、最近では中央アジアから渡ってくるオグロツルが用いられ、隣接するインドやネパールでは営巣地の環境破壊によって年々激減しているのに対し、ブータンでは顕著に増加している。

生物学的多様性は、伝統的な農耕技術や多毛作が有機農法によって行われている農業をみても、明白である。多種多様な種が継続的に存在するのは、伝統的な農耕習慣と知識を大切にしてきたからである。例えば、稲は人々の食料としてだけでなく、白い米粒は脱穀して取り出され、取り除かれた茎などは動物の飼料や肥料となり、栄養があるだけでなく自然環境にも有効利用される。緑の革命で実施された単一作物の生産量測定では、多様な農耕方法で多種の作物を収穫している場合、総括的な評価が歪められてしまう。また、単一栽培を組み合わせた農業形態は、推進できるものではない。自然界からの産出量が多いブータンでは、国民総生産だけでなく、自然総生産も考慮して評価されるべきである。

ブータンでは、医療福祉や初等教育の改善に力を注いできた。予防接種の実施により幼少期の罹患率を下げることに成功した。五歳未満児の死亡率は、1960 年には 1000 人あたり 300 人だったが、1980 年には 227 人、1996 年には 127 人にまで減少した。1960 年から 1980 年の年間減少率は、平均 1.4% であったのに対し、1980 年から 1996 年には 3.6% であった。それでもブータンの五歳未満児の死亡率は世界 36 位であり、2000 年までに 15% 近く減らす必要がある。幼少期の疾患対策が進められ、一歳児の予防接種率はツベルクリン 98%、DPT 87%、ポリオと麻疹は 86% である。産婦死亡率は 10 万分娩に対して 1600 と高率であり、教育を受けた医療従事者が立ち会った出産は 15% に過ぎない。ヨード欠乏症 (IDD) は、ヨード添加塩の摂取によってコントロールされ、現在では 96% の世帯でヨード添加塩を摂取している。

教育はブータンの将来を担う重要な問題として捉えられ、教育課程は近代国家を意識したものとなっている。1990 年から 1995 年には、小学 5 年までの就学率が 82% に達した。ブータン政府は、2005 年までに初等教育の完全就学を目指している。1968 年に初めて高等学校の卒業生 20 名を輩出し、1971 年には 59 校の小学校しか存在しなかったことを思えば、大躍進である。成人の識字率は男性 56%、女性は男性の約半数の 28% と低率である。古くから伝わる民間療法、タンカ作製の伝統技術、建築、工芸、音楽といったブータンの伝統的文化が繁栄するためには、仏教の教えだけでなく、伝統的な知識や教育が重要であると認識されている。

最先端の技術は、教育と通信手段に組み込まれてきた。学校で使われる教科書はブータン国内で印刷され、クエンセル新聞はコンピュータを用いて発刊されている。デジタル電話回線によって遠隔地と繋がり、ゲイレグフラグと同じ手軽さでニューヨークに電話をかけることができる。コンピュータは、ティンプーのビジネスの中心地同様、ゾンや学校にも設置してある。

教育によって、人々は新しい価値観を共有するようになり、国の運営において特に若い世代が重要な役割を担うようになってきている。タシチョ・ゾンから発せられる政策や開発計画は、若い専門家たちによって生み出されている。ブータン人は神、王、国、自国の文化に深く根差した感情を育てている。大勢の若者が海外で教育を受けているが、その多くは専門性を生かすために帰国し、他国で問題になっているような頭脳流出は起きていない。

ブータンでの経済・社会発展は、上意下達と民衆からの要求の両方から推進してきた。地方分権化は、政府や外国の援助を受けて、住民参加型の自立した自治に成功した枠組みの中での共生をもたらす。国王は国境までの全域において開発の恩恵が平等に享受されるように尽力している。環境保全は自然保護区域の管理とブータン特有の生物学的多様性を保護する政策に組み込まれており、天然資源の開発は環境を破壊せずに利用可能な範囲で行われている。国王の歴代続いている任務には、ブータンの宗教的・文化的伝統の保存活動も含まれている。ブータンの統治制度は民主主義ではないが、国王の権力行使が国民にとって温和であるため公益として作用している。すべての国民に必要な基盤を提供するという信条に根差した発展は斬新であり、発展の成果は国民に還元されるのである。

南アジアの多くの国々とは違い、ブータンは一度も他国から植民地支配されていない。チベットやイギリスから襲撃された歴史はあるが、独立主権国家の地位を死守してきた。近年、ブータンは先進国の政治を後追いし、1971年には国際連合に加盟した。同時に、コロボ計画や非同盟諸国会議といった国際的なフォーラムにも参加するようになった。南アジア地域協力連合(SAARC)のメンバーとして影響力を持ち、近隣諸国と強い連携を築き、国王は首脳会議に積極的に参加している。SAARCの会議が開催される立派な会議場が、ティンプーのタシチョ・ゾンから川を渡ったところに建っている。ブータンは自国の国際航空便を操業しており、ニューデリー、ダッカ、ヤンゴン、バンコクと結ばれている。インド、バングラディッシュ、タイ、日本といった国々とは貿易を行っている。UNDP、FAO、UNICEF、WWF、世界銀行などの国際開発機関や援助国は、ティンプーに人員を派遣している。1995年に政府開発援助からGNPの25パーセントにあたる7300万米ドルの投入を受け、順調にプロジェクトを遂行し、資金を運用してきたが、1970年には1%だった国債が、1995年には10%に増加した。

遠隔通信やジェット機の時代になると、他国と近接しているブータンは、次のミレニアムに備えて、いくつかの矛盾を抱えるようになる。国外に目を向ければ、混乱状態にある世界が見える。政治的なご都合主義、不安定な政局、汚職、社会や民族暴動、内戦、無法状態、伝統的文化規範の消失などなど。そのため、ブータンでは自国固有の文化を保持することに、ほとんど疑問を呈することなく、むしろ死活問題として捉えられた。

ブータンは何世紀もの間、鎖国状態にあった。1974年になってようやくその門戸が開かれたが、当初は高額な滞在費が課せられ、旅行者が制限されていた。外貨獲得の魅力的な手段ではあったけれども、無制限に旅行者を受け入れているネパールやラダクで文化が荒廃するのを目の当たり

にしたブータンは、同じ轍を踏むまいと決心した。旅行産業は民営化されたが、厳しい制約が課せられている。旅行者は自由気ままに国内を見てまわることはできず、僧院への立入は禁止され、古代美術や貴重な芸術作品の盗難を防止している。旅行業界の急成長に伴い、なかには格安の手数料や付帯サービスで生き残りをかける会社もある。そのため、少数の旅行者が指定された最高額を支払っていた初期と比べて、多くの旅行者が訪れるようになった今でも、利益は大して増加していない。

外界の情報が流入するようになると、国内に変化の兆しが認められるようになったため、ブータン政府は文化的規範や厳格な刑罰を伴う規約を強化した。皮肉なことに、国王がこうした政策を打ち出したように認識されているが、実際は「ブータンらしくある」ための法は国会で制定された。数年前までは、公式行事、職場、ゾンへの入場の際に、伝統衣装の着用が義務付けられていた。現在では、公の場で洋服を着ることは違法であり、警察は服装を取り締まる権限を持っている。けれども特に若者たちは、こうした見解には否定的であり、色々な言い訳をしながら、リーバイスのジーンズやデザイナーの洋服を着こなしている。

テレビ放送は、地上波も衛星放送も、独自の文化を守るために禁止されている。インドのずっとと奥地や隣接するアルナーチャル・プラデシュ州では、衛星放送の受信ディスクの出現によって、あっという間に伝統的な衣装、建築、社会風習、食事が消え去り、インド映画業界の発信する生活様式が普及した。ブータンの教育を受けたエリートたちには、ニュース、スポーツ、音楽番組の公開要求を早急に受け入れる気配はない。またコンピュータやファックス機が入手できるにもかかわらず、インターネットで情報入手や通信が禁止されている現状に、苛立ちが募っている。

ブータンは、婉曲的に「国際問題」と表現される、深刻な政局に直面している。発端は、ボド族（インド北東部の自治のために戦う部族組織）とアッサム地方でインド軍から分離した ULFA（武装した反政府的な過激派を内包するアッサム統一解放戦線）が、ブータン領地に侵略していることにある。ブータンではナムゲル・ワンチュク自然保護区として知られているマナス森林に、過激派はシェルターをつくり、またブータン南部のサンドロップ・ジョンカやゲイレグファグにも潜入している。インド政府当局は追跡権を要請しているが、ブータンはそうした武装テロリストに対抗するだけの軍備力に不安があった。ブータン政府にとって最大の懸念は、そうした南部の情勢不穏によって、政治に不安定な動揺が生じることである。

長年にわたって、ブータンの丘陵地帯には、豊かな牧草地を求めてやってきたネパール人が居住している。近年になって、自国での経済的困窮から逃げ出してきた移民労働者が増加している。こうしたネパール人たちは、政府と民間企業によって二重に影響を受けているが、近年の急激な増加にブータン政府は神経を尖らせている。シッキム王国では、ネパール人の人口増加が遂にはチョゲル人を凌ぎ、チベットでは中国が意図的に人口動態を操作しようと画策していたため、ティンブーでは警鐘が鳴らされたのである。ダージリン紅茶園にあるゴルカの独立運動は、ブータンの不安を煽っている。公民権法が制定された 1985 年以降、ブータン国内のネパール人社会は、1958

年の国籍法制定以前からブータン国内に居住していたことの証明提示を求められた。この政策に反対したネパール人は国外に追放され、数千人がネパールの難民キャンプに強制的に送られた。皮肉なことに、南部では多くの無学なブータン人が闘争に巻き込まれ、無神経な政府役人だけでなく、いわゆる「反国家分子」に対する大略殺を企てる自警団からも迫害を受けるようになった。複数の民族問題は、ドゥック・ギャルポにワタリガラスの王冠奪還を迫る共和政体への運動の始まりでもあった。

国王は、国内外の問題を最優先させるため、山間の森に隔離されたタシチョ・ゾンにある川辺の宮廷を断念した。現在では、バスケットボール大会やアーチェリー競技会は二の次とされ、幼年期のようにお目にかかることはない。国王の后と姉妹はティンプーの別荘にそれぞれ住んでいる。多くの式典任務は、父のように威厳と謙虚さを備えた18歳の皇太子ダシヨ・ジグミ・ケサー・ナムゲル・ワンチュクに委ねられている。新たな世紀の始まる前年、君主国家としてブータンの将来は、強力な基盤に支えられている。うまくいけば、南部の国境問題に関する異論や不和は、早急に平和的に解決されるだろう。ブータン人の譲歩の精神と平等主義を鑑みれば、異民族であろうと「雷龍の国」の境界領域で共生できるだろう。

〈切手収集〉

ブータンの切手は、1962年10月に初めて発行され、卓越した美術様式を呈し、世界的にも有名である。鋼鉄の切手、シルクの切手、金の切手。国歌を吹きこんだレコード切手まであるのだ！これは実際に再生して聞くことができる。一貫したテーマ性と優れた技術は、世界中の切手収集家の間でも高く評価されている。ブータンの多種多様な美しい自然を謳った数々の切手がある。野鳥、植物などが描かれ、政府によって自然環境が保護され、動植物の植生地が保存されていることがわかる。

〈野草の楽園〉

ブータンには生態学的に広範囲にわたり、多種多様な生物遺伝子の宝庫である。ヒマラヤ地方に特有の花、植物、野草が、低地から高地まで幅広い標高に生息している。

南部の熱帯雨林では、常緑高木のフタバガキが優占している他、広葉樹木、シダ、ヤシ、竹などが植生している。渓谷の中腹では、桜やリンゴの花が咲き誇り、モクレン、野バラ、それに15種以上のシャクナゲが見られる。もっと標高が高くなると、色鮮やかなアマランスが栽培されている。マツや針葉樹林が山腹を覆う。樹木限界線を越えると、繊細な高山植物ゲンティアナ・オルナタ（リンドウ）などがチョモラーリを仰ぎ見るヒマラヤ草原に咲いている。ポブジカ谷では霜にもめげずにシダが生えている。

3章 雷龍の国

パ　　ロ

パロにある「寶石の山の城」リンブン・ゾンからは、眼下にパロ谷全体を一望でき、杉の並木道や柳が枝垂れかかるパロ・チュ（パロ川）が見える。パロ・チュには、屋根つきの小振りな木製の橋が渡されている。寄り集まって建っている民家は、どれも入口をきれいに飾り、辺りには桜や桃の木々が並び、棚田がパロ谷の斜面に広がっている。パロは、とても平穏な場所である。ここに仏教が最初に伝えられたと言われている。昔からの言い伝えによると、ヒマラヤからチベット地域にかけて横臥する恐ろしい魔女を征服するために、チベットのソンツェン・ガンポ王（AD 629-710）が 108 の寺院を建設したらしい。魔女を地面に張り付けておくために、ブムタンのジャンベ・ラカン（寺）は魔女の膝の上に、パロのキチュ・ラカンは魔女の左足に建てられた。

キチュ・ラカンは、巡礼者や僧侶が訪れる聖地となり、737 年に、グル・リンポチェもこの寺院に導かれてブータンにやって来た。

パロ・チェを上流に進んでいくと、ドゥゲ・ゾンの手前に、タクツァン僧院（虎のねぐら）が、パロ谷上部の標高 800 m（2600 フィート）の岩壁に張り付くようにして建っている。グル・リンポチェは、雌の虎にのって、この山奥の虎の巣穴に飛んで来て、三カ月間の瞑想後、恐ろしい雷龍ドルジェ・ドロエに姿を変えた。彼は仏教の伝播を妨害する八つの悪魔を征服し、パロ谷を土着の宗教から改宗させ、仏陀の教示をブータン全域に広める足掛かりをつくった。

タクツァン僧院は極めて重要な聖地であり、AD 853 年頃この僧院で瞑想したグル・リンポチェの弟子ランチェン・ベルキ・シンゲの遺骸など、貴重な遺物が保管されている。その後も多くの信徒がタクツァン僧院を巡礼したが、14 世紀ようやく初めての祭壇がチベットのニンマ派ソナム・ゲルツェンによって建立された。瞑想したとされる洞窟の傍の岩には、グル・リンポチェの極楽サンドペルリが描かれている。1645 年、タクツァン僧院はニンマ派のシャブドゥン・ンガワン・ナムゲルとニンマ派の始祖リンジン・ニンポに引き渡された。シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルはこの地に寺院の建設を切望していたが、その意思はテンジン・ラブゲに引き継がれ、17 世紀の終わりに拡張建設が実現した。

この神聖な高所に存在する僧院で、ニンマ派とデュルック派が融合し、ブータンに多大な影響を及ぼした。ブータンでは、ヒマラヤ山脈を越えてくる侵略者に備えて要塞が築かれ、グル・リンポチェの教えを支持するデュルック派の有力者シャブドゥン・ンガワリ・ナムゲルが統治していた。彼は 1646 年にリンブン・ゾンを建立し、そこには密教の神々だけでなく、カーギュ派の分派ドゥック派の高僧も奉られている。グル・リンポチェとシャブドゥンの両者が壁に描かれている。毎年春には、グル・パドマサンバヴァを崇めて、ツェチュ祭が開催される。

ブータンの祭のなかでも特に壮観なのは、パロのツェチュ祭りである。ブータン人だけでなく

旅行者にとっても見どころの一つだ。ツェチュ祭では、シャブドゥンによって演出された舞踊(チャム)を通して、仏教が他宗教に打ち勝ったことを称え、土地を清め、人々に祝福をもたらす。仏教の教義は、こうした民間伝承を通じて広められる。寺院の屋根では、僧侶たちが一對の長いホルン、シンバル、太鼓、横笛で演奏する。亡くなった僧侶の大腿骨からつくられたオーボエやトランペットを奏でると、演奏者と聴衆の双方に善きカルマがおとずれるとされている。

祭りの初日、ゾンの中で開始の儀式が始められ、やがて敷石で覆われたゾンの中庭、デヤンカ広場に会場が移される。まず、会場を清め、悪霊から守るための踊りから始まる。智慧を司る仏である文殊菩薩が、死神の形相を呈する。激怒した牛の仮面をつけた踊り手は、文殊菩薩が現れるまで、東西南北の四方を守り清める。骸骨の仮面をつけて踊る、墓守の激しい踊りドゥググが、密教の神々が描かれているマンダラの前で繰り返される。こうして悪魔を無力化し、救済されるための信義が教示される。黒帽の舞シャナでは、僧侶が太鼓を打ち鳴らし、内外の悪霊を調伏するために、手は様々な印相を結び、足で地面に曼荼羅を描きながら、ゆっくり会場に入場してくる。かのシャブドゥン自身も、非常に重要な宗教的儀式としてこの舞を演じた。

仏教の教えをもとに戯曲化された舞踊は、観客に仏教の教義の奥深い意義を伝える。生前の悪行を暴く閻魔大王の法廷を題材にした「ラクシャ・マンチャム」は、歓喜して跳ね回る黒魔のいる地獄に送られる罪人と、白神によって黒魔から救済されて天国に送られる善人の物語である。裁きの場面では、閻魔大王の巨大な人形が現れる。ポレ・モレは、浮気した王妃が軽率な行動を罰せられるという物語になっている。「鹿の舞」では、聖人ミラレパによって仏教に改宗し、狩りをやめた獵師の物語が演じられる。

五日間に及ぶ祭りは、肌寒い夜明け前にクライマックスに達し、デヤンカ広場が大勢の人で埋め尽くされる。巨大タンカ、トンドルのご開帳である。トンドルは、布を複雑に縫い合わせてつくられ、拝見するだけで解脱できるとされている。そこには、八変化相のグル・リンポチェと、二人の配偶者、インド皇女マングーラヴァとチベット王女カンド・イエシェ・ツォギャルが描かれている。バターランプと砂糖とバターで作ったお供え物がトンドルの前に置かれていく。重たそうな着物を纏い、伝統的な布製の靴を履いた僧侶が、聖人のトンドルの御開帳を祝って、陽気に踊り、丸い胴体に7本の弦を張ったダムニエンを奏でる。この巨大タンカは朝日が差し込む前に、降ろされて巻き畳まれる。

パロ・ゾンの僧侶長は、ドゥック・カーギュ派の流儀に則って正装し、供物を受け取る列に座り、法要の儀式シュルデルを主宰する。先の尖った帽子をかぶり、深い朱色の服を着た僧侶たちが、大きく曲がったバチで両面太鼓を打ち鳴らす。グル・リンポチェの八つの明示が描かれたトンドルは、取り外されると、盛大な歓喜の中、金欄行列セルデン・ペーコルによって運び出される。最高位の聖人には、顔に日が当たらないように傘が掲げられ、捧げものである16人の女性を従え、広場を練り歩く。小さな両面太鼓ダマルを振り鳴らしながら、互いに動きを合わせながら、曲芸のような跳躍を繰り返す、勇者の舞パーシャムが踊られる。最後に、恐ろしい形相のお面を

つけて、ザンドベリの世界を再現したギン・タン・ツォリン、ギンとツォリンの舞が披露される。こうして悪魔を追い払い、この世を浄化する。ギンの大きく曲がった太鼓のバチで頭を叩かれると、邪悪なものが取り除かれるとされている。

ツェチュ祭が開催されている5日間は、いつもは静寂に包まれているリンブン・ゾンに、祭の演目や演奏が鳴り響く。拍手喝采、デヤンカ広場を埋め尽くす着飾った群衆、飲食物やアクセサリーなどの小物を売る露店。善きカルマを授かりながら、食事を楽しみ、異性に声をかけ、陽気に過ごすのだ！

リンブン・ゾンの上方に在るタ・ゾンは、パロ谷へ続く道の見張り台として使われていた。現在は、国立博物館になっていて、ブータンの歴史、美術品や手工芸品を展示している。タ・ゾンのずっと下方のドルポ谷とパロ・チュ（川）の合流地域にあるドゥンツェ・ラカンは、チョルテンの建築様式を有するブータンでは唯一の古い寺院である。1421年にチベットのラマ僧タントン・ゲルポ（1385-1464）が魔女の頭に建てたドゥンツェ・ラカンは、ブータンでも最高級の絵画を保有している。

パロ・チュ（川）沿いを緩やかに上っていくと、タクツァン僧院とドゥゲ・ゾンへと続いている。さらに進むとかの有名なヒマラヤ山脈奥地へ行くスノーマン・トレックの道となり、チョモラーリ、ラヤ、リンシ、そしてルナナへと向かう。ドルポ谷を上って行くと、ティンブーに着く。一日かけてダキパンツォを歩くと、高峰の山間部に背の低いシャクナゲに囲まれた未開発の湖がある。椀型の氷河渓谷から溢れた水は、山腹の森林を滝のように流れ、ドルポ川に注ぐ。

パロからティンブーへは、パロ谷を下ってワン・チュ（川）の合流点に向かっていく方が楽である。パロ川の下流域は、乾燥していて強風が吹き、荒地が広がっているが、ティンブーに続く道は再び開けた肥沃な谷へとつながっている。ナムセリンに広がる果樹園や段々畑の絵のような美しさとは対照的に、山々の高地にはうっそうとした針葉樹の森林がある。シムトカで道は左に曲がり、広大なティンブー盆地と世界にも類を見ない首都ティンブーが一望できる。

ティンブー

ブータンでカーギュ派の分派ドゥック派を創始したパジョ・ドゥゴム・シクポ（1184-1251）は、ワン谷で配偶者にめぐり合うという啓示を見た。その配偶者とは、かの有名な女性ヨガ行者の生まれ変わりである。パジョは、ワン・チュの対岸に予言を授かった女性を見かけた。二人は川沿いにルンテンザンパまで歩き、橋を渡って出会った。この橋は「予言の橋」と言われている。

ずっと前から、ティンブーの入り口に架けられている木製の幅の狭い橋が、ルンテンザンパ橋である。橋にはルンタやタルチョが結ばれ、轟く川の水しぶきを浴び、古風な趣のある魅力的な都市への入り口に相応しい風貌だ。他の都市では近代化の象徴として、味気ないコンクリート製の建造物が見られるが、ここティンブーは違う。コンクリート製の橋にタルチョは不釣り合いだし、飾られることもないだろう。川の轟く音だって吸収されない。

ティンブー谷は標高2,350 m (7,700 フィート)にある。1952年にティンブーが首都に制定されると、都市開発が始まり、デチェンチョリン宮殿が建設された。今日でも、この街は古来の建築様式を保持している。多くの新しい建築物は、政府の規制に従ってブータン風の窓を組み入れているだけだが、民家は従来の伝統的様式でつくられている。19世紀に入ると不動産ブームが到来し、計画的とは言い難い都市開発に直面した。人口の増加が、ありきたりな高層建築を後押しした。また他のアジア市場と同様に、大量の安価な中古車が日本から輸入された。日本国内の排出基準を満たさなくなった中古車である。その結果、ティンブーは大気汚染に見舞われるようになった。

それでも、世界の他の首都とは違って、ティンブーはのどかで、四季折々の風景が見られる。肥沃な谷では段々畑、緩やかな斜面では果樹園が営まれる。高い山々は針葉樹林で覆われている。威風堂々としたタシチョ・ゾンからは、眼下に農地とゴルフコースを見渡せる。夏から秋にかけてコスモスが咲き誇り、ゾンに彩りを添える。春には、手入れの行き届いた宮殿の芝生に桜がよく映える。

タシチョ・ゾンには、国王の執務室とブータン仏教界最高位ジェ・ケンポの総本山が入っている。川の土手の傍に建つ姿は、絵のように美しい。シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルがブータンに建てた他のゾンとは違って、防衛の砦として建立されたものではない。ティンブーに最初に建てられたドゴン・ゾン「青い石の要塞」は、デチェン・ポダンにあり、現在では僧侶の学校になっている。小高い丘の上に位置し、波乱にとんだ歴史をおくってきた。1630年代には、シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルがこのゾンを統治し、改修した。地名をとってタシチョ・ゾンと呼ばれるようになり、夏の間僧侶が居住する建物となった。現在の場所には、18世紀後期、ジェ・ケンポによって建設され、その後1960年代にはジグミ・ドルジェ・ワンチュク国王政権の政庁所在地として拡張された。国王の執務室と金箔の王座のある国民議会の部屋には、この上なく素晴らしい仏画タンカがいくつも飾られている。

週末には、チャンリミタン競技場でアーチェリーをして過ごすのが人気だ。そこでは、伝統的な竹製の弓を用いるダツェと洋弓(コンパウンド)を用いるモダスタイルの両方が行われる。対戦チームが1mほどの高さの木製の的の周りで踊って射手を挑発する中、矢が的に命中すると歓喜の雄叫びが上がる。人々は食べ物や飲み物を持参し、午後の楽しいひと時を過ごす。チャンリミタンは、地方行政長官トンサ・ペンロプのウゲン・ワンチュクが1885年に決定的な勝利をおさめた地である。その後、ウゲン・ワンチュクは堅調に統治し、初代ブータン国王となった。この戦いはブータンの歴史上大きな分岐点となり、17世紀後半から続いていた内紛が収束した。

週末になると、チャンリミタンの川岸ではバザーが開かれ、農場や村から品物が運ばれてくる。新鮮な野菜、若いシダの葉、唐辛子、チーズ、赤ジャガイモ、ドマ(びんろう樹の木の実)、キンマ、キノコ、卵、干し魚、干し肉などがびっしり並んでいる。チベットのアクセサリー、石、ボンチュー(竹製の籠)、弓矢、さらには週刊新聞クエンセルの最新版までもが売られている。豚の

脂身、塩茶、ブータンの酒チャンといった朝食の後に、バザーで買い物をしたり、友達と一緒に見てまわるだけでも、楽しい土曜日の始まりとなる。

チャンリミタンの上方に街の中心部があり、ランドマークの時計塔を中心として道路沿いに建物が並んでいる。本屋、旅行代理店、骨董店、店舗などの商店や、ホテル、銀行などが集まっている。織物、手工芸品、骨董品などが売られている。中央郵便局では美しい数々の切手が販売され、切手収集家にはお勧めの場所である。

ティンブーでの待ち合わせ場所と言えば、大きな窓ガラスのある円形のシャレー風建物であるスイス・ベーカリーである。穏やかな雰囲気に入れられ、コーヒー、紅茶、マフィン、ペストリー、パテが提供される。その店のスイス人経営者ツーリは、本名よりもブータン名ツェリンを好み、装置や道具類が大好きだ。電動測候所や太陽光発電だけでなく、トイレには施錠装置が付いている！ 向かいにあるプラムス・カフェは豪華な食事を提供し、街の中心部と連なる高峰を一望できる。丘を下っていくと、人気の酒屋サンバラ・パブがあり、ティンブーの若者たちで溢れている。ジューシーなスペアリブを、濃厚で気さくな雰囲気の中で味わえる。経営者カシュは魚釣りが大好きで、自分で獲ったニジマスで常連客に振る舞い、友人を大切にする。土曜日の夜には、暗い街の通りは活気づき、若者たちはディスコに集う。

ひと際目を引くメモリアル・チョコレートは、ジグミ・ドルジェ・ワンチュク国王を表敬して建てられた。パロのダウンツェ・ラカンと並んで、チョコレート(仏塔)の形をしたブータンでは数少ない寺である。谷底にあるシムトカ・ゾンでは、1631年にシャブドゥン・ンガワン・ナムゲルが建設した最古のゾンである。現在ではゾンカ語教育・教師養成の中心となっている。

モチタン地区は、ティンブーの高級住宅街となっている。森を上って行くと、1974年に行われたジグミ・シンゲ・ワンチュクの戴冠式のために建てられた、オールド・モチタン・ホテルがある。国賓、王族、有力者たちが集い、その絢爛豪華なホテルを一層引き立てたものだが、今日では廃れてしまった。いつか、また栄光を取り戻す日が来るかもしれない。

モチタンは、パジョディンや13世紀に高僧パジョ・ドゥグム・シクポが瞑想した3700m(12200フィート)に位置する僧院へのトレッキングの基地となる。その僧院の上方には、ガラス張りのベランダ付きの丸太小屋があり、ティンブーを一望できる。標高4,100m(13,500フィート)以上の高地にあるジミラン・ツォ(湖)では、マスが見られるかもしれない。寒さと霧のため、熱狂的な釣り人しか訪れない。

タシチョ・ゾンから、チン・チュの左岸沿いに道は曲がりくねり、アシ・ケサン皇太後の住居であるデチェンチョリン宮殿へと続いている。さらに道路は村を登ってジグミ・ドルジェ国立公園の入り口へ着く。そこからはラバの獣道を山頂へと進むスノーマン・トレックのルートとなり、チョモラーリ、ラヤ、リンシ、ルナナに登山できる。デチェンチョリンから農地や村を通り抜けて、タンゴ僧院とチェリ僧房のある森へ行くこともできる。

タンゴ僧院は、13世紀にパジョ・ドゥグム・シクポによって建設され、パロにおけるドゥック

派創始者である息子のダンパに継承された。シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルは、ブータンを訪れた際にタンゴ僧院に滞在し、パジヨの生まれ変わりであるドゥックパ・クレンの孫であるツェワン・テンジンによる歓待を受けた。シャブドゥンはツェワン・テンジンを妻とし、1638年には息子のテンジン・ラプゲが誕生した。シャブドゥンの庇護を受け、第4代デシとなり、ギャ氏の最後の血筋となった。1694年にプナカ・ゾンペンのゲドゥン・チョーペル率いる軍隊にティンブーから追放されると、テンジン・ラプゲはタンゴ寺院に隠退し、余生を過ごした。こうした15代続いた王位継承は終焉し、その後ブータンは二世紀に及ぶ騒乱の時代に突入した。

タンゴからは、伝統様式の木製の橋が対岸の岩に架けられ、1620年にシャブドゥンが居住するために建立したチェリ僧院へと続いている。現在では、ジェ・ケンポを引退した67歳のトゥルク・ンガワン・シンリ・ルンドゥブが暮らしている。

プ ナ カ

ドチュ・ラ (峠) は標高3,116 m (10,200 フィート) に位置し、プナカとティンブーを隔てている。ヒマラヤ地方特有のブルーカササギが、美しい羽を広げ長い尾をなびかせながら、モクレンの木からシャクナゲの木へと滑空する。冬になると、縦に木々に雪が降り積もり、滝が凍り氷柱が垂れ下がる。晴れた日には、冠雪のヒマラヤ山脈が眼前に広がり、ともに標高7,158 m (23,480 フィート) のマサン・ガンとジェジェカンブー・ガン、そしてガンカー・プンスム (25,000 フィート) の山頂が見える。丸太小屋の店では紅茶とビスケットを出していて、高峰の連なる山脈を間近に見えるように双眼鏡を貸してくれる。人々はチョルテンの周りを右回りに移動する。標高1,700 m (5,500 フィート) にある川谷にすっぽりと収まっているプナカへと続く下り坂の入り口には、色とりどりのタルチョが架けてあり、その下を進んでいく。道はモミの木々が植生するドチュ・ラ (峠) から、温帯植物の松や檜の木々の森を通り、やがて亜熱帯植物の巨大なシダや蘭、バナナ畑へと多様な生態系を経て行く。ブータンの中でも特に魅力的な村々が、プナカへと道が分岐するロベサに存在する。

プナカ・ゾンは、1328年に僧侶ンガギ・リンチェンが建設した寺に隣接して、シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルが1637年に建立した。プナカ・ゾンは、プナカがブータンの首都になるまで、ゾンペンの保護下にあった。初代国王ウゲン・ワンチュクは、1907年12月17日にグレート・プリズ宮殿で就任式を行った。その戴冠式には、ジョン・クロード・ホワイト率いるイギリスの派遣団、国王の親友、役人、25名のパンジャブ連隊員が参列した。1910年1月、プナカ条約によってブータンはイギリス領インド帝国との友好関係を強めた。第2代国王ジグミ・ワンチュクもまた1927年3月にプナカで戴冠式を行い、プナカが政庁所在地であったが、1952年に第3代国王ジグミ・ドルジェ・ワンチュクは首都をティンブーに遷すことを決断した。

プナカ・ゾンはポ・チュ (父川) とモ・チュ (母川) の合流地点に建っている。鴨や首の長い鵜の群がひしめき合いながら水面をかすめ飛んで行く。肥沃な川岸では多様な作物が耕作されて

いる。異なる穀物は同じ畑では栽培されず、そうした環境によって代々品質を保つことができる。ブナカの多くの土地や家畜は、標高の低い谷で温暖な冬を過ごす、ティンブーの裕福な人々に所有されている。シャブドゥンが冬の首都としてブナカを創設し、伝統的な習慣として続けられ、現在でもティンブーのタシチョ・ゾンにいる僧侶たちは、厳しい冬を避けて、最高権威であるジェ・ケンポ大僧正を筆頭にブナカへと移住してくる。1651年にブナカ・ゾンで瞑想に入ったシャブドゥンは、再び目覚めることはなかった。信じ難いことだが、彼の死は15年もの間隠密に伏され、ドゥック派の影響力を維持した。

1994年の大洪水でブナカ・ゾンは大きな被害を受けた。最初に建てられた小さな寺院であるゾンチュンは建て替えられ、ゾン全体も改装された。新たな護岸と堤防は川の流れを変え、洪水への備えを強化するが、川がゾンの外壁を取り巻くように流れている本来の美しい風景をも変えてしまう。

かつて、聖なる遺物ランジュン・カルサパニという観音菩薩像を取り返そうと、ガサヤラヤから山を越えてこの谷にチベット軍が襲撃してきた。チベットでドゥック派を創始したツァンパ・ギャレがブータンに持ち込んだとされている。ブータン軍は、繰り返される攻撃からブナカ・ゾンを護り、防塁に成功した。

毎年冬の終わり、太陰暦では一月に、ドムロチェ祭がブナカ・ゾンで開催される。祭りの期間中、ブナカ村にはレストランや屋台が立ち並び、遠くはラヤからも独自の円錐形の帽子を被った人々が押しかけ、街中が活気づく。

ブナカ・ゾンの僧侶たちは、弦楽器にトランペット、太鼓、シンバルが掛け合って奏でるオーケストラのように深く、低い声で、何時間もマントラを唱える。この祭りは、ブータンの守護神であるマハーカーラの顕現であるイエシェ・ゴンポに奉獻される。祭の主宰者であるジェ・ケンポは黄色い正装姿でバルコニーに座り、宗教舞踊が行われている中庭に臨む。

チベット軍の攻撃を再現した劇では、赤い衣装の軍隊がゾンから一斉に飛び出し、入口の急な木製の階段の上で刀を振りかざす。けたたましい爆竹の音とともに、パザブたちが現れ馬の背に飛び乗って戦いに繰り出していく。ゾンを取り囲むように軍隊が四か所に分散して陣営を張り、ゾンの中では神の保護を求めて舞踊が演じられ、兵士は酒を飲んで戦闘心を鼓舞する。祭の最後にこの舞踊が盛大に行われる。

ウォンディ・ポダン

ウォンディ・ポダンは、二つの川の合流地点に位置する。彼方から続く山脚は北部から流れてくるダン・チュ（川）の流域にまで及び、ブナカから曲がりくねりながら流れるモ・チュ（母川）はウォンディポダン・ゾンの下方の南部の山脚に沿って穏やかに流れる。段々畑は川底に向かって連なり、白いあぜ道が幾重にも見える。ウォンディ・ポダンでは、特に午後になると強い風が吹くので、ウィンディー（風の）・ポダンと呼ばれるほどだ。防風林は大きくなっているが、強風

で埃が巻き上がり、背の高いユーカリの木は曲がったままになっている。

ウォンディポダン・ゾンは、17世紀中頃にシャブドゥン・ンガワン・ナムゲルの指示で建設が始まり、1683年にテンジン・ラプゲによって完成された。屋根は伝統様式に則ってこけら板で葺いてあり、重い石で抑えられている。二つの大きなマニ車が、建物に囲まれた中庭への入口の両脇にあり、訪問者を出迎える。一番奥には主要な建物があり、毎年9月に開催されるウォンディ・ポダン・ツェチュ（祭り）では、グル・リンポチェの描かれたトンドル（仏画）が夜明けに掛けられる。巨大なトンドルの前で、バターランプがほのかな光で灯す中、小さなダマル（小さな両面太鼓）を手にパチャム（ブータン英雄の舞）が繰り広げられる。巨大トンドルの前で踊り手が小さく見える。祭典用のオレンジの帽子と衣装を纏った僧侶の姿には、ドゥック・カーギュ派の伝統が色濃く表れている。

ワンデュから川を渡って、乾燥した峡谷を行くと、リンチェンガの村がある。家々は際立った特徴はなく、その鈍い土色によって単調な風景となっている。皮肉なことに、リンチェンガは石工で有名な村である。古くから伝わる石切りや、ゾンの建築はこの村から広まり、現在でも、リンチェンガ村の熟練工がプナカ・ゾンやタシチョ・ゾンの再建を担っている。伝統的様式の民家、寺院、チョルテン、橋などの作製に必要な技術を有している。

ワンディは——シャブドゥンが、ワタリガラスの群が四方に飛び去っていくと予言した場所である——ブータン中央部にあり、幹線道路が交差する街だ。新しい道を川沿いに南下するとチランに着き、東西横断幹線はこの小さな町を横切る。ダン川の渓谷に沿って進むと、黒山の標高3,390 m (11,200) フィートにあるペレ・ラ（峠）を越えていく。ペレ・ラ（峠）の少し手前から未舗装の道が分岐し、ノブディン村からガンテやポブジカ谷へと続いている。

荒れた道や土砂崩れのある道を自動車で、オークやシャクナゲの森を通り抜けながらいくと、ポブジカへと通じる。ポブジカは氷河によって作られた盆地で、雪解け水で湿地となっている。冬には絶滅危惧種のオグロゾルの群がやってくる。中央アジアから山脈を越えて長距離飛行の末に渡ってくるツルの群は、大きな鳴き声と踊りで到着を喜んでいるようだ。こうしたオグロゾルの群は、翼を激しく羽ばたかせて上昇すると翼を広げて優雅に滑空しながら、そびえ立つ山の尾根に飛び立っていく。

ポブジカ谷を見渡せる丘の上に建っているガンテ・ゴンパは、ニンマ派のペマ・リンパの孫であるペマ・トリンレイによって1613年に建設された。ブータンでは最大級のニンマ派の僧院であり、黒山の西側にある唯一の僧院でもある。ペマ・トリンレイの生まれ変わりであるガンテ・トゥルクは優勢だったドゥック派と協調関係を保ちながらも、ペマ・リンパによる教義を広めようとした。第二代トゥルクであるテンジン・レペ・ドンドルブ（1645-1726）は僧院を増築し、傍にゾンを建設した。

ポブジカ村には伝統的な民家が集落を形成している。村の外れまで点在している家々は広々としていて居心地がよく、旅行者を宿泊客として受け入れている。ここには電気が通っておらず、

伝統的なブータンの生活様式が魅力の一つにもなっている。木の幹を刻んでつくられた急な階段を下りると、階下の暗い廊下へと続いている。広々として上の階には日が差し込み、薪ストーブが使われている。家の中は穏やかな静けさに包まれ、黙々と家事をこなしている。

ポブジカから丸一日歩くと、自然研究センターのあるカビタンに到着する。1996年12月の建国記念日に常設展示館が開館した。この地域には多種多様な鳥や野生動物が生息している。野生のヤクの群は、高山に植生している小型の笹が大好きだ。

黒山越えには、ペレ・ラ（峠）が重要な場所である。この地は、トンガ・ペンロップ（豪族）と隣接する西側の部族との前線でもあり、「狂気の神」ドゥック・クンレイ（1455-1529）が侵入を阻止したと言われている。また辛子の種を東側の村にばら撒いたので、米が育たないとも言われている。「黒山のビジョップ」の土地ともいわれ、起伏のある草原には辛子畑が散在しており、棚田や深い森に覆われている黒山の東側とは対照的である。ビジョップの人々は羊やヤクを飼い、豊富に入手できる笹から洒落た編籠やバンチャー（弁当箱）をつくる。

ペレ・ラ（峠）から11 kmほど東に行くと、耕作された台地の下端にルクジ村がある。二つの山の狭間にあるこの台地は悪魔であると信じられており、悪魔の頭部に寺を建立し、仏教の力で制圧しているとされている。グル・リンポチェ自身も蛇の魔女を退治して、この地を清めたと評されている。ルクジ村の人々は、近年建設された幹線道路が再び悪魔を目覚めさせるのではないかと心配している。巻き上がる砂埃、岩を吹き飛ばすダイナマイトの爆音、往来する交通が、眠っている悪魔を起こしてしまうかもしれない。地元の指導者が地神をよそに移転する案を提案したことから一層混乱が生じ、さらには不吉な出来事や不作、村人の死などによって混乱が拡大した。結局、懇願されたガンテ・トゥルクは神を元の場所に戻すことにした。

ト ン サ

トンサに向かう道沿いにあるチェンデブジ・チョルテンは、上部に目が描かれていて、マニ石の列越しに見える。18世紀半ばにトンサを恐怖に陥れていた魔女を鎮めようとして、ラマ・シダがネパールのボダナートやスワヤンブナートを真似て建立した。1982年には、皇太后アシ・ケサンが傍にブータン様式のチョルテンを造った。

トンサは、ずっと遠くから街が見える。古道は溪谷へと下って行き、それから急な坂を上るとトンサ・ゾンに着く。けれども、自動車道は山々の等高線に沿うように廻り道をしながら隣村へと行き、トンサへと続く。この曲がりくねった道には誰もが困惑する。橋を渡ればじきゾンに到着すると思っても、約20 kmの道程に一時間ちかくもかかるのだ。けれども、いろいろな角度からゾンを仰ぎ見ているうちに、ウゲン・ワンチュクが初代ブータン国王になり、国を統治する役職ペンロブが置かれるようになったゾンの重要性が、深く感じられるようになる。現在も続く、ブータン皇太子がトンサ・ブンロペに就任するというしきたりからも、この役職の重要性が窺われる。

17世紀になると、ブータンは三大勢力、トンサ・ペンロブ、パロ・ペンロブ、ダガナ・ペンロブに分かれた。パロは西ブータンを、トンサは中央と東ブータンを支配した。1864年のドゥアール戦争の後にシンチュラ条約を締結したブータンは、イギリスにドゥアールを譲渡し、補償金を受け取った。トンサ・ペンロブのジグミ・ナムゲルは、ブータンの支配権を主張した。彼の息子、ウゲン・ワンチュクは1881年と1885年にトンサ・ペンロブに就任し、ティンプーの反対勢力を打ち負かした。彼はイギリスとの関係を深め、その強力な指導力を高く評価したイギリスから、爵位を授かった。

標高2,200 m (7,200 フィート) にあるトンサ・ゾンからは、マンデ谷を見渡すことができる。トンサを守るために、タ・ゾンのV字型の見張り台から常時警戒していた。最初のチョルテンがこの地に、シャブドゥン・ンガワン・ナムゲルの曾祖父であるンガリ・ワンチュクによって建てられた。トンサの戦略的優位を示すために、シャブドゥンはここに最初のゾンを建設し、その後幾度もその拡張と修復を重ねてきた。そこにはンガリ・ワンチュクのチョルテンも含まれている。

トンサは、東西交通だけでなく南方への要所でもある。南方へ伸びる道は、熱帯雨林に覆われたシテムガンへと続いている。バナナ、マンゴー、シダ、苔類、竹、蘭などが植生している。山麓のゲイレグファグでは溪谷が平地へと開け、南端のマナスの森には多くの野生動物が生息する。地質学者たちはゴンコーラ付近で銅と褐炭の鉱脈を発見し、黒山にも非常に豊富な鉱物が埋蔵していると評価している。トンサから東へと続く道は、標高3,400 m (11,200 フィート) のヨトン・ラ (峠) へと上って行き、ブータンの最高峰ガンカ・プンスム (標高25,000 フィート) を仰ぎ見ることができる。

ブムタン

ブムタンのような場所には、幽霊にまつわる物語がよく似合う。神話や伝説に彩られたこの地方では、信仰心の篤い人々が、侵略してくる兵士や熱心に布教する僧侶の物語を語り、民家には宗教的象徴が描かれ、張り出し窓には魔除けが掛かっている。チョル谷は、16世紀以降ジャカル・ゾンに統治されている。夜になると、川から霧が立ち込め、湿地帯に神秘的な明かりが灯る。

ある冬の早朝、映画撮影のスタッフが撮影準備のため、寒さの中でレンズを磨いたり、電池を確認したり、なかなか始動しないエンジンをかけようとしていた。監督のロバート・タブジは構想を練っていると、一人の老人がゲスト・ハウスの前をぶらぶらと歩きながら通り過ぎ、川へと続く小道へと進んで行った。好奇心からというよりも寒さしのぎに、すぐにロバートはその男の後を追って川へと向かったが、その男は平然と川の中へと進んで行き、見えなくなった。溺れ死んだのだらうと思って、ロバートは助けを求めにゲスト・ハウスへと駆け戻ったところ、管理人からその老人は川の渦巻きに住む幽霊で、姿を現すと不吉な事が起きると聞かされた。その日の午後、ブムタンに暮らしている二人のスイス人医師がボート事故で亡くなった。

ブムタンはブータンの宗教的発祥の地である。ブムタンという地名は、文字通り「ブムパの形をした平原」という意味を持ち、ブムパとは宗教儀式で用いられる清めの水を入れる瓶のことである。ブータンの守護聖人グル・パドマサンバヴァは8世紀にブムタンに仏教をもたらし、クジェ・ラカンで瞑想したと言われている。ロンチェン・ラブジャムパとドルジェ・リンパが14世紀にこの地で説教し、ブータンの高名なペマ・リンパ（1450-1521）はタムシン・ラカンを建立し、今日ではニンマ派の元祖であるとされている。ジャンペ・ラカンは、7世紀にチベットのソンツェン・ガンポ王によって建立され、これはグル・リンポチェの訪問よりも以前のことであった。

ドゥック・カーギュ派が優勢になったのは比較的最近のことであり、ブータンがシャブドゥン・ンガワリ・ナムゲルに統治されるようになった17世紀になってから、ブムタンが政治の中心地となった。その昔、西ブータンではデュルック派が勢力を持っていたが、ブムタンはチベット王族に支配されていた。ブータンの王族たちの祖先を辿ると、ニンマ派とデュルック派の両方に行き着き、ブムタンと強い結びつきがある。初代ブータン王ウゲン・ワンチュクは、トンサ・ペンロブだったジグミ・ナムゲルのウォンディチョリン宮殿（白い鳥の城）で誕生した。彼はグル・リンポチェの体が写されたとされる岩のある場所にクジェ・ラカンを建てた。ブータンの神聖な寺院の一つであるクジェ・ラカンでは、ジグミ・ドルジェの葬儀が執り行われた。同じ場所に皇太后アシ・ケサン・ワンチュクが建てた寺があり、精巧につくられた立体的なマンダラが収められている。108の石塔はその場所を見張り、多数のタルチョが風にはためき、仏陀の教えが風に乗って世界に送られている。

ブムタン盆地は四つの渓谷からなっている。チュメ谷とチョコル谷は比較的標高が低く、農業が営まれている。この地方の主食はソバで、その他に小麦や大麦も収穫される。タン谷とウラ谷は標高が高く冷涼で、ジャガイモの生産が広く普及し、羊の飼育にも適している。チュメ谷の名産は、足踏み織機で制作する精緻な毛糸の織物ヤタである。特にスンゲイ村は有名で、複雑に入り組んだ模様を織り込んだヤタを制作する多くの若い女性がいて、見ているだけでも楽しい気分になる。

チュメ谷にはニンマ派の創始者にまで遡る古い僧院がいくつもある。標高3,600 m（11,900フィート）に位置するタルパリン僧院は、ロンチェン・ラブジャムパによって14世紀に建立された。ヤタ織で有名なスンゲイ村の近くには、ペマ・リンパの孫テンベ・ニマが16世紀に建てたブラ・ラカンがある。そこから歩いてすぐの森の中に隔離されるように、百人ほどの僧侶が生活しているニマルン寺がある。

チョコル谷の高い場所にあるジャカル・ゾンは「白き鳥の城」という意味があり、シャブドゥン・ンガワリ・ナムゲルの曾祖父であるデュルック派の僧侶ンガリ・ワンチュクが16世紀に建立した。この地方の行政を担っているにもかかわらず、デュルック派の僧侶が居住していないブータンで唯一のゾンである。ジャカルの街には、道沿いに数軒の店と食堂があるだけである。その道を上がって行くとウォンディチョリン宮殿へ着き、さらに進むとジャンペ・ラカンとクジェ・

ラカンへと続いている。クジェから川を渡ると、ブータンで最古の壁画や絵画が保存されているタムシン・ラカンがある。そこは小さな僧院でもあり、ペマ・リンパの教えが若い僧侶（ゲロン）に授けられる場でもある。

ジャンペ・ラカンの外観は、この地域の他の僧院と比べて際立った特色があるわけではないが、古くて価値のある寺である。廃れることのない魅力がある。13世紀から続いている伝説によると、魔女が暴れないよう抑えつけるためにその膝にジャンペ・ラカンが建てられたと言われている。その魔女はチベット全域に横たわっている。ジャンペ・ラカンのドゥップ祭は毎年11月頃に開催され、五日間続く。多くの儀式や踊りが執り行われ、過去のニンマ派の聖人たちを思い起こし、グル・リンポチェの徳を敬い、善が悪を倒した勝利を称え、観客への祝福の儀式でクライマックスを迎える。

ドゥップ祭は、夕刻に黒帽の舞とジン僧侶の舞で始まる。盛装した僧侶たちは踊りを通して聖なる儀式を執り行い、酒や穀物を奉獻する。悪魔を追い払うために火が灯され、暗闇の中で揺らめく炎の光に照らされて、踊り手たちの仮面の恐ろしい形相がより際立つ。ネイクド・ラマの踊りは古来の宗教儀式へと遡るのだが、この踊りは深夜に開催され、外国人観光客の目に触れないようになっている。ギンとツォリンの舞では、グル・リンポチェの化身が幸福をもたらし、仏陀の教えを妨げるものを取り除く。極楽浄土からの踊り（ダンツェ・ンガ・チャム）と英雄の踊り（パチャム）は、ペマ・リンパが僧侶たちにもたらしたと言われている。

愉快な赤い仮面を被ったアツァラは、観客を楽しませる。ツェチュやドムチェの祭の中で、パントマイムを演じ、旅行者でさえその魅力の虜になってしまう。こうした道化には別の重要な役割もある。収穫の時期に執り行われる豊作を願う儀式で、アツァラは木製の男根像の開口部から白い液体を垂らしながら、若い女性を追いかけ回したりもする！

ジャンペは盛大な村祭である。うっすらと雪を頂いた森林に覆われた山々を背景にしたジャンペ・ラカンの中庭が開放されると、ドゥルップに参加しようとブムタンの村々から人々が集まって来る。バンチューから、ヤクの燻製の薄切り、唐辛子と豚肉の料理、そば粉のケーキなどを次々と取り出し、仮面を付けた踊り手たちがシンバルや太鼓、笛などに合わせて飛び跳ねて踊るのを家族総出で楽しむ。ジャンペ・ドゥルップに参加している間は、押し合いへしあいの群衆と争うこともなく、外国人旅行者と衝突することもなく、快適な経験ができる。大きなゾンで開催される格式の高い他の祭りでは、こうはいかない。五日間の祭の最後には、その地方の神が儀式の行列に連れ出され、吉兆の時に集まった人々に幸運をもたらす。

17世紀終わりから18世紀初めにかけて、何組かのスイス人家族がブムタンに居住した。電気や近代的な設備がなかったにもかかわらず、外国人家族たちは革新的な技術を駆使して快適な生活を送った。太陽や風力エネルギーを活用し、対流システムを暖房に利用した。食卓には自家製のサラミ、焼き立てのパン、自分たちで摘んだイチゴやリンゴで作ったジャム、天然ハチミツ、ナツメグやシナモンを添えた紅茶などが並んだ。果樹園を備え、ヒマラヤの山小屋風別荘の雰囲気

を味わえるスイス人のゲスト・ハウスには、今でもこうした伝統を楽しむことができる。地元の人々は、チーズ、リンゴ酒、リンゴジュース、ハチミツの作り方を学び、今ではブムタンの名産品となっている。

チョコレート谷の東にあるのが、タン谷である。タン川は狭い溪谷を流れて、ブータンの重要な聖地の一つであるメバルツォ（燃える湖）へと続いている。グル・リンポチェの隠した埋蔵法典（テルマ）をペマ・リンバが見つけたとされるこの場所に、信者たちはランプを水面に浮かべ、遺灰を流す。メバルツォは正確には湖と言うよりは、深淵に流れ込む手前にある側流が淀んでいる部分であり、その周辺では水しぶきによる豊富な水から葉が茂り、希少植物が生息している。

標高 3,600 m (11,900 フィート) に位置するウラ・ラ（峠）は、ウラ谷への入り口となっている。この高原では羊を飼い、冬にはヤクを放牧する。標高 3,000 m (10,000 フィート) のウラ村では独自の農業様式がある。こけら板の屋根に石造りの民家が寄り集まって建っている。ジャガイモ生産が軌道にのって学校が建設される以前は、貧しい地域だった。今日では、家々は手入れが行き届き、子どもたちは明るい未来に向かって教育を受けている。このため、ウラ村はブータンにおける開発と近代化の模範例となっている。最貧民層に目を向け生活基盤を整備すると、比較的短期間に多くの人々の生活が明らかに向上するのだ。

4 章 チョモラーリ山：女神の神聖な山

霧がかかり細雨が降っているドゥゲ・ゾンは、荒廃した石造りの城壁から、火災や 350 年という歳月を感じさせる。1647 年にシャブドゥン・ンガワン・ナムゲルがチベット人の侵略に勝利した記念に、近づき難い岩肌に建設されたこの要塞は、パロ谷を侵略者から守る見張りの役割を果たした。ゾンの建っている尾根は地形的にも分岐点にあり、緑に覆われた肥沃なパロと、冠雪のヒマラヤ山脈へと続く荒涼とした岩場の境界にあり、山脈を越えるとチベット高原が広がる。

パロからの道はこの二つの世界の接合点にあるドゥゲ・ゾンで途絶える。現代文明とエンジン自動車とはお別れである。この先に必要なのは、根性、スタミナ、創意工夫である。動力は電気ではなく、生きた動物である。牛で耕作し、ラバで荷物を運び、馬に乗って移動する。もっと高地へと進むと、野生の気の荒いヤク以外に頼るものはない。ドゥゲ・ゾンの付近で、寒さのために足踏みしているラバに、鍋、フライパン、テント類、それに米、ジャガイモから卵、チーズ、豚肉、鶏肉といった食料品などを荷積みした。村は早朝から山登りの長旅に出発するラバの準備で活気に満ちていた。小競り合いしながら荷物を仕分けているラバ使いは後から合流することにし、いよいよ私の荷物をまとめ、出発だ！

ドゥゲ・ゾンにかかっていた霧が晴れ始め、雲の隙間から太陽が差し込み、真っ青な空が広がった。こんな風景の中、遺跡を越えて上って行くと、ブータン人が女神と崇敬するチョモラーリの真っ白に輝く高峰が現れた。聖なる山が見えるのは縁起が良い。けれども、そこに辿り着くには

徒歩による長旅を続けなければならない。条件が良ければ三、四日。私にできることは、好天を祈るだけだ。ヒマラヤをハイキングできるのは11月までである。探検に出発する時にはいつも気持ちが悪くなるものだが、朝の肌寒さに身が引き締まる思いがした。

出発したのは、ちょうど収穫の時期だった。パロを取り囲む低地では、稲がすっかり実るまであと数週間といったところだった。男たちが稲を打って脱穀し、女たちが編んで作った箆で籾殻を選り分け、棚田には籾殻がきらきら輝きながら舞っている。ここで生産される赤米はブータン料理には欠かせない。食事には、パロの赤米に大量の唐辛子、豚肉、細麵、グツィー——独特な臭いのする地元のチーズなどを組み合わせる。

一歩進むたびに揺れる細いつり橋を渡り、左岸のパチュに着いた。鮮やかな紅葉に囲まれ、氷河から溶け出した冷たい水の川に沿って村を登って行った。この川の流域は植生が豊かで、前衛の山は深い緑に覆われ、上につれシルバー・オークやブルー・パインといった常緑の木々が分布している。ヒマラヤ^{もみ}樅やジャクナゲが標高の高い山の背を覆い、樹木限界線を越えると、厳しい冷え込みや霜にも関わらず、ヒマラヤの牧草地には繊細な高山植物が咲いている。川の本流から離れた淵や側流では、様々な蘭、苔、藻、シダ、キノコが生息している。淀んだ沼や湿地を曲がりくねって流れて行く川の水は、スコッチ・シングル・モルトの原料水に匹敵するほどである！

耕作地帯は標高によって変化し、シルバー・オークと柳の森を抜けてさらに上って行くと、開けた土地にアプリコット果樹園、アマランス畑、ソバ畑が広がっていた。その間に集落がまばらに存在し、そんな中で新参者は地元の人々の好奇心の対象となった。照れくさそうに挨拶を交わす子どもたちは陽気で、両手にいっぱい果物を差し出す者もいた。お返しに何か渡したかったのだが、笑顔でカディンチェ(ありがとう)と返すことしかできなかった。こうした山間部の人々の威厳ある態度から生じる心温まる行為には頭が下がる。太陽が山脈にすっぽりと沈むころ、シャマザンパに到着し、川岸の平らな場所に最初のキャンプ地を設営した。ここまでの上り道はそう険しくはなかったが、開けた荒野にはところどころ起伏があり、人や動物の通り道は侵食されていた。こうした道をずっと歩いてきたので、私の膝は悲鳴を上げ始めた。他の仲間たちは後方からのんびり歩いていたが、私の不安が大きくなる前に、ラバとガイドがベルを鳴らして歓声を上げながら現れた。即座に野営場を設置し、たき火からは料理の匂いが立ちこめた。

その夜は雨降りだった。荒れ狂う川と張り合うように、雨粒がテントに絶え間なく打ちつけ、一睡もできなかった。けれども翌朝には、雨は止んで爽やかな朝日が差し込み、寒さも消え去った。登り続けて行くと、徐々に雄大な景色へと変わって行った。ドゥゲから歩き始めて三日目に初めて遭遇した、川辺のドゥゲ村のずっと上方に威風堂々と現れた冠雪のチョモラーリ峰、この光景は格別である。

最後の二日間は、非常に険しい道のりだった。標高が高くなるにつれ、動植物が徐々に少なくなっていく。タンタンカには色とりどりのテントが並び、ベーコンに温かい塩茶が出された。熱っぽい胸とからからに乾いた喉には最高の飲み物で、香ばしいヤクのバターを少量入れると、

さらに美味しくなる！ 地形の変化には、最初はほとんど気付かないが、やがて常緑樹の縦の木が見当たらなくなり、森の木々がまばらになってくる一方で、水しぶきをあげている水流の傍らにシャクナゲの灌木が山腹に点在するようになる。日陰には溶けずに残った雪が見られ、野生のヤクが花の咲き誇るヒマラヤの牧草地で草を食んでいる。そこで樹木限界線を越えて、植生の異なる地域に足を踏み入れていることに気付く。そこには未開の土地が広がり、岩だらけの断崖から冷たい風が吹き下ろし、早い冬の訪れを告げる雪が点在している。

ブータンは動植物の宝庫である。色鮮やかなジューケイ、ユキシャコ、はるか上空を旋回するヒゲワシ、警戒心の強いユキヒョウ、ジャコウジカ、ブルーシープ、ヒマラヤグマ、それにブータンの動物——ターキンが生息し、多種多様の薬草や野草が植生している。このような動植物がジグメ・ドルジェ国立公園で保護管理され、その面積は4,200 m²にも及び、アジアでも最大規模を誇る。

聖なる山々を守るため、こうした聖域に入ることは禁忌とされている。それでも、ヤクや羊を追う遊牧民の中には、聖山で生活している部族がいる。彼らは今でも物々交換で生計を立て、家畜からとれる肉、皮革、チーズ、バターと引き換えに、麓の村々から日用品を手に入れる。ワン族はかつてモンゴルから侵略してきた歴史をもち、ワンギ・メロと呼ばれ、この地に住み着いた。13世紀中頃にはパジョ・ドゥゴム・シクポによって仏教に改宗されたが、今でも山々、森、湖、動物といった自然界の神性を崇拝していることがはっきりわかる。このように独自の思想が混在していることは、羊の角、ブルーシープの骨、甘い香りの杜松、松ぼっくりから成る、タルチョをはためかせているチョルテンに、はっきりと表れている。ブータンやチベットで僧侶が演じる宗教舞踊や儀式は、聖人の由来を伝えるものである。興味深いことに、ブータン国王の王冠には、カラスの頭を持つ守護神マハーカーラであるゴンポ・ジャロドンチェンの化身と信じられている、真っ黒いワタリガラスが飾り付けられている。

ジャンゴタンが突然現れた。山脚に沿って進んで行くと、そこにはチョモラーリがそびえ立っている！ 夕日に照らされ、24,000フィートの高峰は銀色から金色へと変化し、やがて日が沈んでも白く見える。山頂より10,000フィート下方のジャンゴタンのベースキャンプの気温はマイナス12度だったが、あまりに壮大な景色と静穏に圧倒される。氷河から溶け出した急流の上方にある古い要塞の遺跡が、神聖な雰囲気をもっと高めている。そうした景色に圧倒されながら、丸二日間、女神の住むと言われている崇高で美しい山を眺め、平穏から怒号まで、歓迎から脅迫まで、様々に変化するであろう神秘的な印象に感銘を受けた。

その夜遅く、突然激しい雨が降り出し、重い鞍を付け頭部には華やかな飾りをしたヤクの群が荒れ狂いながらキャンプ地へとやってきた。大声で叫びながら、ヤク使いはヤクを落ち着かせようと奮闘し、寝かしつけようとするのだが、誰にもどうすることもできなかった。ブータンに昔から生息する獠猛な犬種として名高い犬だけが、冷徹な目と鋭い牙で威嚇し、一晩中かかってヤクの一群を取り囲んでいた。翌朝、さらに進むためにヤクに荷物が移し替えられた。ラバにはこ

れ以上の高地には耐えられないので、ドゥゲに引き返してしまうのだ。しかし、確実に歩み続けて荷物を運ぶラバと違って、ヤクは荷物を積むと動こうとしなくなったり、振り落とそうとしたり、大事な荷物を積んだまま山を駆け下りたり、道から逸れて川に飛び込むのだ！ ヤクの一行はその日遅くまで、鼻を鳴らしながら荒々しい脚並みで進み、しまいにはラバの群に突進した。運悪く私は巻き添えを食い、カメラの機材等は無事だったが、私の腕は包帯で吊るされ、冒険心は一気に萎えた。それでも、高くそびえ立つヒマラヤ、ジチュ・ダケの尖峰、聖山チョモラーリの姿は臉にしっかりと焼き付いている。決してこうした地域から退散しようとはしないワンギ・メロの人々のように、私も山々の虜になってしまっていた。